山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

有島武郎の女性観に関する研究

―『或る女』における早月葉子像の形象―

令和四年三月

盧　昱安

目　次

序　章 1
1．研究の目的 2
2．先行研究とその展開 7
3．本研究の方法 13
4．本研究の構成 19

第一章　『或る女』におけるアンビバレントな葉子像
―石坂養平宛書簡を手掛かりとして― 22
1．問題提起 23
2．無名の男性たちとの恋愛～〈愛着〉の欠如～ 26
3．名を持つ男たちとの恋愛～〈愛着〉と〈憎悪〉との相剋～ 28
3.1 木部に対する純真な〈愛着〉と失望 28
3.2 古藤に対する性衝動 32
3.3 ディレンマに陥る葉子像 34
3.4 倉地との恋愛におけるディレンマ 35
4．母親に対する愛憎 36
4.1 ライバルとしての敵愾心 37
4.2 母の理解者としての葉子像 40
5．妹たちに対する憎悪 41
5.1 愛子に対する〈憎悪〉 41
5.2 貞世に対する〈愛着〉 44
結論 45

第二章　『或る女』における「夢遊病者」としての葉子像
―「ヒステリー」を端緒として― 48
1．問題提起／１例目の「夢遊病者」 49
2．夢と現の混淆／２例目の「夢遊病者」 55
3．凶夢を見る葉子 58
4．死への傾斜／３例目の「夢遊病者」 62
結論 67

第三章　『或る女』における葉子の「本能」
―「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島武郎の「本能」観― 70
1. 問題提起 71
2. 評論「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島の「本能」観 74
3. 木部との関係における「本能」 77
4. 倉地との関係における「本能」～肉体的な側面を求める葉子～ 80
5. 倉地との関係における「本能」～「女の本能」に領導される葉子～ 83
結論 89

第四章　『或る女』におけるコケットとしての葉子像 92
1. 問題提起 93
2. 浦上宛書簡に記された有島の女性観の形成 96
2.1 トルストイの『クロイツェル・ソナタ』との関係性 97
2.2 イプセンの女性観との関係性／受容の可能性 100
3. コケットリーという視点 104
4. 醇化しえぬコケットとしての葉子像 109
おわりに―檜山京子宛書簡に記された有島の葉子像 111

第五章　『或る女』における堕落する葉子像の形象
―有島武郎の人生観― 114
1. 問題提起 115
2. 制度としてのキリスト教に対する有島の反応 119
3. 背教から文学へ、その実践としての葉子の形象 127
4. 堕落する葉子像 133
結論 138

終　章 141
1. 葉子の持つ両義性的な在り方 142
2. 有島武郎の女性観 144
3. 結論 148

付　録 149
参考文献一覧 153

序　章

1．研究の目的

有島武郎の女性観を研究するにあたって、まずは作家と作品の関係をどのように捉えるかについて考えてみたい。参考として、有島が浦上后三郎に宛てて書いた書簡の一節を見てみよう。ここには、作家有島の執筆意図と作品の形象の関係が記されており、興味深い。

> 「或女」で私が讀者に感銘して欲しいと思つたものは、現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさといふ事でした。女は男の奴隷です。彼女は男に據る事なしには生存の權利を奪はれてゐます。其結果（或る思想家がいみじく言ひあてたやうに）その無一物の境地から唯一つ男を籠絡すべき武器（戰慄すべき兜器―性慾的誘惑―自然の法に背いた機能の逆用）を用ゐる事を強ひられました。（傍書）―この事は葉子のみならずその小説に出て來る凡ての女性に對しても顧慮されてゐる積りです―そこから人間の男女關係の悲劇が胎胚したのだと思ひます。而して遺傳はその惡癖を增大し、增大した惡癖は本然的に女性の中に男性に對する衝動的な復讐心を釀成し、それが本能的な男性に對する憧憬愛着の情とからみ合つて複雜的な復讐、復讐的な執着を生んで行きます。是れは今の世の中に存在する最も悲しい悲劇の一つであらねばなりません。私はさう思索しました。而して私はそれに對して心が動かされました。或る程度までの醇化をしました。然しその醇化が不足であつた事が、恐らくはあの作を私の期待を裏切つて硬化してゐます。
>
> （「浦上后三郎宛」大正八年十月八日付。傍線は引用者による。以下同じ。）[1]

手紙の宛先である浦上后三郎とは、有島が浦上の投稿小説を選評したことがき

[1] 『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月三十日、一一四頁）

っかけとなって交誼を結ぶことになった人物である[2]。有島は浦上宛書簡において、芸術家と哲学・思想の関係、及び、それを踏まえた『或る女』の執筆意図について言及している。これによると、ある程度までの「醇化」をしたが、その「醇化」が不足していたため、『或る女』は「私の期待を裏切って硬化」したという作品観を抱いたことがわかる。つまり、作家有島は自分の意図したことをすべて、自分の作品『或る女』の中に託すことができていないということになる。自分の創り出した作品といえども、そこには作家の意図しなかった領域が胚胎してしまうということである。確かに、作家は自分の思想や価値観といった内在性を作品の中に投影することができるであろう。しかし、その投影は「ある程度」までであって、十全なものではない、と少なくとも有島は言っているのである。つまり、作家にとって作品は、その全てが掌中にあるわけではない。作家の裁量し得ない領域が、作品の中に生じてしまうということになる。

さて、浦上宛書簡で有島の述べたことが彼の作品に適用されるとするならば、作品は、作家が作り上げた瞬間から徐々に作家の手を離れ始め、やがて自立するということになろう。その時、もはや作品は作家の従属物ではなくなる。そして、作品に描かれた人物もまた作家の支配下から逃れ、自立する。このような作家と作品の関係を問題意識として抱えつつ、本研究の目的がどのようなものであるかについてここで述べておくことにしよう。本研究は、白樺派の作家である有島武郎の『或る女』を対象として、そこに描かれた主人公早月葉子像の形象について考察する。そして、葉子の人物像の究明を契機として有島の女性観や思想がいかなるものであるかについても考察する。なお、これらの考察を展開するにあたって、有島の女性観や思想と文学作品に形象された人物像とを短絡的に結び付けるのではなく、両者の間にいかなる乖離やずれが見られるかという点に比重を置く。以上が本研究の目的である。

---

[2] 浦上后三郎宛書簡については第四章で詳述している。

1.1　有島武郎という人物

有島武郎は白樺派の作家である。明治十一年（1878）三月四日、父・武、母・幸の長男として東京市小石川区小石川水道町五十二番地に生まれた[3]。有島は明治二十九年（1896）七月、学習院中等科を卒業して同年九月に北海道の札幌農学校に入学した。その際、同級生であった森本厚吉と知り合う。彼との付き合いを通して、有島はキリスト教の世界に入信する決意を持つ。そして、明治三十四年（1901）三月二十四日、有島は札幌独立基督教会の会員になった。明治三十四年（1901）七月、札幌農学校を卒業し、一年間の志願兵役を終えた後、明治三十六年（1903）八月から米国で留学生活を送る。留学中にロシア文学や西欧文学を耽読し、また金子喜一と親友になり、社会主義思想を知った[4]。やがて、有島はキリスト教に対して不信感を募らせ、文学への志向を固めていく。つまり、有島にとって渡米は、宗教から文学へと転回していく契機でもあったのである。明治四十年（1907）、帰国した有島は東北帝国大学農科大学講師となった。明治四十三年（1910）四月には、雑誌『白樺』の創刊に参加して文学活動を始めた。同年五月、札幌独立教会から退会し、背教者となる。大正四年（1915）三月、東北帝国大学農科大学に辞表を提出したが、休職の扱いになった。大正五年（1916）、父と妻の死に遭い、本格的な作家生活に入った。大正十二年（1923）六月九日、軽井沢の別荘で人妻である波多野秋子と情死するに至る[5]。

有島は、決して長くはない作家人生の間に、小説をはじめとして劇曲や評論などの様々なジャンルで執筆活動を展開した。そして、創作物の中で職業や境遇の違う

---

[3] 以下、有島武郎の足跡については本多秋五「解説」、及び瀬沼茂樹「年譜」（『日本の文学 27　有島武郎・長与善郎』、中央公論社、一九六七年三月）を参考にした。

[4] 金子喜一（1876～1909）は社会主義運動家、ジャーナリストである。有島はハーバード大学大学院で金子喜一を知り、親密な友人関係を結ぶ（川上美那子「金子喜一」、『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月、三一〇頁）

[5] 波多野秋子（1894～1923）は雑誌記者であり、有島に『婦人公論』の執筆を依頼した。この後恋愛が生じ、夫に知られ、一九二三年六月九日有島の軽井沢の別荘・浄月庵で共に縊死した（伊藤佐枝「波多野秋子」、『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月、三五三頁）

人物たちに託すかたちで近代社会に伏在する様々な問題を提起した[6]。野間宏は、有島の文学を「日本の他の作家には少ない、広い社会的展望と、社会的関心とさらに社会への積極的参加のあるもの」にしたのであると捉えている[7]。但し、有島の生前時において、彼の文学が高く評価されることはなかった。有島文学の真価を始めて世に知らしめたのは正宗白鳥である。次に掲げるのは、その正宗白鳥による有島と『或る女』に対する批評である。

> 「或る女」を讀むに及んで、この作者は世間から同じ種類の作家として見られてゐる他の作家とは、根底から違ふやに思はれた。私はこの長編小説を感興に惹かれて讀んでゐるのではない。くどいのに退屈することもある。しかしその豊富なる藝術的天分、弛みのない鍛錬された文章、外面的にも内面的にも人間を見る目の繊細に的確なところ、日本の作家には類例がないと思ふ。[8]

正宗白鳥の批評は有島と『或る女』を決定的に転換させたものであった。とりわけ、「外面的にも内面的にも人間を見る目の繊細に的確なところ、日本の作家には類例がない」とある点は、以後の有島文学の特徴を方向付けることになる。例えば、本多秋五氏は、有島が「十九世紀リアリズムの、日本におけるもっとも正統の継承者」であると高く評価した[9]。安川定男氏は本多氏の論に賛同し、有島が「社会的視野のもとに人間存在を内部と外部」とから全体的に把握して「本格的なリアリズムの手法」を学び、その特色を『或る女』において発揮してみせたと補足した[10]。

---

[6] 例えば、『お末の死』は国家イデオロギーへの懐疑が暗示される短編小説である。『小さき者へ』は貧富の差がもたらす悲劇を描いた短編小説である。『カインの末裔』は北海道の厳しい自然環境を背景に、小作人仁右衛門の悲惨な生活を描く中編小説である。『星座』は時代とともに生きる若者たちの青春群像を描く未完の長編小説である。

[7] 野間広「有島武郎」(『日本の思想家』、光書房、山本健吉編、一九五九年一一月、一二七頁)

[8] 正宗白鳥の「有島武郎」の初出は一九二七年七月二十五日の「讀賣新聞」であった。その後、『作家論（二)』(創元社、一九四二年一月）に収入された。

[9] 本多秋五「有島武郎論」(『「白樺」派の文学』、新潮社、一九六〇年九月、二五八頁)

[10] 安川定男「有島武郎文学の魅力」(『国文学解釈と鑑賞』第五四巻、至文堂、一九八九

『或る女』は有島文学において画期的な作品であると言えよう。数ある有島の作品の中で、本研究が『或る女』を対象とする理由も上記のような文学的価値を認められている点にある。

1.2　『或る女』という作品

ここでまず、『或る女』の成立過程について述べておきたい。有島によって書かれた『或る女』は前編と後編の二部構成となっている。前編は、明治四十四年（1911）一月から大正二年（1913）三月にかけて雑誌『白樺』に連載され、当初は『或る女のグリンプス』という題名で発表された。連載回数は十六回を数えたが、二十一章をもっていったん中絶する。その後、五年間余りの時を置いて、大正七年（1918）十二月から有島は改稿を始め、翌年（1919）の二月二十五日に脱稿する。この原稿は、同年三月二十三日に『或る女』前編と改題したうえで、『有島武郎著作集』第八輯として叢文閣から刊行された。その際、主人公の名は早月田鶴子から早月葉子へと改められた。その年の四月一日から有島は続稿の執筆に取り掛かり、五月二十六日に脱稿する。この原稿は、六月十六日に『或る女』後編と題され、『有島武郎著作集』第九輯として同じく叢文閣から刊行された[11]。以上に見てきたように、『或る女』は明治四十四年一月から大正八年五月という九年にわたる歳月を経て完成された作品である。この作品は有島の作家活動の始発から終焉に至るすべての期間を含んでおり、有島文学の全体がこの作品にカバーされているとも言われている[12]。

『或る女』という小説は、自我に目覚めた女性主人公早月葉子の恋と人生を描いた作品である。葉子は医師である父とキリスト教婦人同盟副会長の母親佐の長女

年二月、一二頁）

[11] 『或る女』の成立過程については安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）を参考にした。

[12] 西垣勤「『或る女』研究史素描」（『有島武郎論』、有精堂、一九七一年六月、一五九頁）

として生まれる。十四歳の時、赤坂学院で神への捧げ物を舎監に誤解されて以来、周囲に対する反抗心が生じ、自由奔放な生活に身を委ねることになる。十五歳の時に初めて恋愛を経験し、以後、多くの男性たちの求愛を受けるが、葉子はそれらを弄ぶ。十九歳の時、日清戦争の従軍記者である木部孤笻と恋に落ち、母の反対を無視して結婚した。しかし、その結婚はわずか二か月で破綻をきたす。その後、葉子には木村という男性との縁談が持ち上がり、アメリカに滞在している木村のもとへ向かうことになる。その渡米の船中で、葉子は船の事務長の任にある倉地という男性と出会い、彼の野性的な魅力に惹かれ、本能の赴くまま倉地に身を任せる。倉地と歩む人生を選択した葉子は、米国に到着後、病気と偽って上陸しなかった。葉子はそのまま絵島丸で日本に帰国することを決める。(以上、二十一章までの前編)。日本に戻った葉子は倉地と同棲生活を送っていた。しかし、二人の不倫関係が、米国渡航時に同船していた田川博士夫人によって告発されることになる。そのスキャンダルが新聞に載せられたため、倉地は郵船会社から解雇されてしまう。生活に窮した倉地は、その後スパイ活動に手を染めていく。一方、葉子は心身ともに疲弊し、やがて体調に異変をきたすようになる。この体調の異変は子宮の病であることが発覚し、葉子は入院を余儀なくされる。倉地は葉子を見捨てて失踪し、葉子は病状が悪化して、病室の中で悲鳴をあげながら死に向かう。以上は『或る女』についての概説である。

2. 先行研究とその展開

前節にも述べたように、『或る女』は完成稿ができるまでに九年間を要し、『或る女のグリンプス』、『或る女』前編、『或る女』後編という三つのテクストが存在している。これらのテクストをめぐっては、従来、『或る女』というテクストの成立

過程に関する論[13]、『或る女のグリンプス』から『或る女』前編への改稿問題[14]、『或る女のグリンプス』と『或る女』前・後編の影響関係を論じるもの[15]などの観点から論じられてきた。『或る女のグリンプス』と『或る女』前編は、ほぼ同じ内容のものと言えるが、作品としての評価は後者を重視する傾向にある。では、『或る女』の前編と後編の評価はどうか。例えば、本多秋五氏は「『或る女』は、前編に比して後編が格段にすぐれている」と指摘する[16]。これに対して西垣勤氏は、大切なのは「前後編優劣の論議」ではなく、「前後編それぞれのモティーフ、主題の究明と、前編から後編への変化の過程とその意味の検証」にほかならないと論じる[17]。更に、蒲生芳郎氏は西垣氏の論に疑問を呈し、「『或る女のグリンプス』に内在する葛藤・屈折の契機、後編への展開の必然性」があると指摘する[18]。

また、『或る女』のモデルや、その素材となった事件[19]についても論議されてきた。なお、実在した人物と登場人物の対応関係については第一章で詳述している。

以上は『或る女』の研究が辿ってきた初期の歴史となる。研究史の動向は、やが

---

[13] 例えば、福田準之輔「『或る女のグリンプス』―その成立について―」（近代日本文学作家研究叢書『有島武郎研究』、瀬沼茂樹・本多秋五編、右文書院、一九七二年一一月一〇日）、山田昭夫「或る女」（『鑑賞日本現代文学第10巻有島武郎』、角川書店、一九八三年七月二五日）、内田満「『或る女』後編の成立―自筆原稿による二、三の考察」（『日本近代文学』第三十二集、一九八五年五月七日）などがある。

[14] 例えば、江頭太助「『或る女』研究の基本問題」（『文学・語学』八、一九五九年三月）、山田俊治「『或る女』前編の改稿問題―葉子の形象について―」（『文芸と批評』第五巻第一号、一九七九年二月）、安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）や、上杉省和「『或る女』論」（『有島武郎―人とその小説世界』、明治書院、一九八五年四月二〇日）などが挙げられる。

[15] 蒲生芳郎「『或る女』論―『或る女のグリンプス』と『或る女』後編の関係―」（『宮城学院女子大学基督教文化研究所・研究年報』第九・十合併号、一九七七年三月）、鳥居明久「『或る女のグリンプス』から『或る女』後編へ―古藤を手がかりとして」（『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、青英舎、一九八〇年十月一五日）、山田俊治「『或る女』の方法と主題―葉子の生の行く方」（同書）などがある。

[16] 本多秋五「有島武郎論」（『「白樺」派の文学』、新潮社、一九六〇年九月一五日、二一八頁）

[17] 前掲注12、一六三頁

[18] 蒲生芳郎「有島武郎『或る女』論序説―前・後編屈折の問題に関する試論―」（『宮学院女子大学基督教文化研究所・研究年報』第六・七合併号、一九七三年九月、一二三頁）

[19] 鎌倉芳信「『或る女』論―モデル問題を中心に」（『日本文学』、一九七四年一一月一〇日）、山田昭夫「『或る女』の素材」（前掲注13山田書）、西垣勤「『或る女』論―前編の構造について」（前掲注12西垣書）などがある。

て作品内部を見つめるものへと移行し、『或る女』前・後編を一つの完成された作品と捉え、それをどう読み解くかという次元で論議されるようになっていく。本研究も、『或る女』の成立過程やモデル論に囚われるのではなく、前・後編を併せて一つの作品と捉える立場である。そして、その『或る女』に投影された有島武郎の女性観を主たる研究対象とする。ここで、『或る女』に関わる有島の女性観が、従来、どのような問題として考察されてきたのかについて確認しておくことにしたい。先行研究の概況としては、西洋との関係や、女性像の〈新／旧〉をめぐる論争などからアプローチする傾向にあったと言える。本節では、それらの研究状況を概観していくことにする。

2.1　西洋との関係

有島の女性観の形成を考えるにあたって、キリスト教の影響や西洋文学の受容などの視点は看過できない。山田昭夫氏は、キリスト教と二十世紀初頭の文学的巨匠たちという二つの契機がなければ、『或る女のグリンプス』構想の胎動は考えられないと指摘する[20]。当初、キリスト教に入信した有島は、その後、留学先のアメリカでキリスト教に順応できない自分の姿に悩み、空虚感に襲われることになる。形の上ではキリスト教信者としての生活を維持していたが、内面ではクリスチャンであることへの懐疑と苦悩が深刻化する。この懐疑と苦悩は、やがて制度や組織といったものに対する不信につながり、ついには背教へと至る。宗教から解放された有島が向かった先は文学であった。そういった有島の思想上の変化と『或る女』との関わりについての先行研究も散見される。ここでは、有島武郎研究会編『有島武郎とキリスト教』[21]と『有島武郎と西洋』[22]を挙げておきたい。この二

---

[20] 山田昭夫「或る女」（前掲注 13 山田書、一五〇頁）
[21] 有島武郎研究叢書第七集『有島武郎とキリスト教』、有島武郎研究会編、右文書院、一九九五年八月
[22] 有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』、有島武郎研究会編、右文書院、一九九六年七月

書には、関係する複数の研究論文が収載されており、参考になる。以下に、それらの研究の内容と特徴を簡単に紹介しておきたい。

まず、『有島武郎とキリスト教』に触れていこう。この本は、研究論文、有島とキリスト教関連項目に関する年譜、資料紹介という三つの構成に分けられている。そのうち、研究論文には、川鎮郎「有島武郎とキリスト教―研究史的に―」、小玉晃一「有島武郎・アメリカ時代管見」、上杉省和「有島武郎と札幌独立基督教会」、植栗彌「有島文学の女性像とキリスト教―『宣言』『クラヽの出家』『或る女』『聖餐』に見る―」、佐藤泰正「『或る女』―〈信〉と〈認識〉の相剋をめぐって―」といった十一本の論文が収録されている。これらの論文では、有島のキリスト教に対する信仰の形成、背教の原因、また『或る女』との関係などが取り上げられている。これらの論の詳細については本研究の第五章「『或る女』における堕落する葉子像の形象―有島武郎の人生観―」において触れているので、ここでは省略する。次に、『有島武郎と西洋』について紹介しておきたい。当書もまた、『有島武郎とキリスト教』と同様、有島の女性観の形成を把握するためには欠かせない研究書である。ここに収められた論文は九本である。例えば、小玉晃一「有島武郎と西洋―イプセンにも触れて」、鈴木保昭「有島武郎とホイットマン」、金田由紀子「有島武郎の訳詩集『草の葉』について」、柳富子「『或る女』考―有島のトルストイ受容に寄せて」、安川定男「有島武郎とベルグソン」などがある。これらの先行研究は、ホイットマン、トルストイ、イプセン、ベルグソンなどの外国作家との関係に触れるものであり、加えて、その底流にある外国思想と有島の女性観との関連性についても論じている。なお、それらのうち、特にトルストイとイプセンに関わる論については、本研究の第四章「『或る女』におけるコケットとしての葉子像」において詳しく触れている。

以上の諸論により、有島の女性観の形成においてキリスト教や西洋文学が影響を与えているという見取り図が示されることになった。

2.2　女性像の〈新／旧〉をめぐる論争

有島の女性観を考えるうえで、彼の生きた時代における女性解放運動との関係も重要である。まずは、『或る女』の執筆当時における社会状況を簡単に確認していきたい。先にも触れたように、『或る女のグリンプス』は明治四十四年（1911）一月から大正二年（1913）三月にかけて、雑誌『白樺』で掲載された小説である。因みに、明治末年から大正初頭にかけて日本では「新しい女」が流行した[23]。その「新しい女」という言葉の流行に寄与したものとして看過できないのが、明治四十三年（1910）五月、早稲田大学校外講演会での坪内逍遥の「近世劇に見える新しき女」という講演である[24]。そして、明治四十四年（1911）九月、日本で最初の女性のみによる文芸誌『青鞜』が、平塚らいてうを中心とする若い女性たちによって創刊された[25]。『青鞜』では「新しい女」を提唱し、女性解放運動を展開した。しかし、その『青鞜』も、大正五年（1916）二月には終焉を迎える。江種満子氏は、有島が『青鞜』の「出発から終焉までのプロセス」を熟視し、「女性の生き難さ」をリアルに痛感し、その認識を自身の女性観に取り入れながら、『或る女のグリンプス』に手を加えて『或る女』前編を書き、引き続き『或る女』後編を書き下ろしたと指摘する[26]。

従来、『或る女』の葉子の造形をめぐって、果たして〈新しい〉女性像として描かれているのか、それとも、〈旧い〉女性像としての域を出ていないのではないかという二つの立場が提出されてきた。そのうち、葉子を「新しい女」と解する論は多い。例えば、葉子は「時代の『意図』と響き合っている」新しい女であるという

---

[23] 奥田浩司「或る女のグリンプスと坪内逍遥の「新しい女」―〈女〉の衝動性、無意識性をめぐって―」（『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月、一四頁）

[24] 中村都史子「坪内逍遥の静かなるフェミニズム―講演「近世劇に見える新しき女」（『日本のイプセン現象』、九州大学出版会、一九九七年六月、二五九頁）

[25] 渡邊澄子「『青鞜』運動史」（『「青鞜」を読む』、新・フェミニズム批評の会編、東洋印刷株式会社、一九九八年十一月一六日、五一五頁）

[26] 江種満子「有島武郎の女性論」（『文教大学国文』三七巻、二〇〇八年三月、四六頁）

解釈[27]や、当時の家父長制下の結婚に不向きな女性として読む解釈[28]、また、「日本的な規範から外れる」新しい女であるという解釈[29]、あるいは、「自立的で革新的な『自己』と『生活』」を求める時代的な女として読む解釈[30]、などが提出されてきている。それに対して、前時代的な「旧い」女性像の観点から葉子を検討したものとして、例えば、「家父長制と対決する戦士」としての葉子に「自己同化」して読むことができないという解釈[31]や、「女性の自立と自由」を求めた葉子の行為は、結局倉地との関係において「妻となり主婦となる家父長制的女性像」を次第に自ら身にまとうに他ならないという解釈[32]などがある。なお、〈新しい／旧い〉女性像を論じた研究は他にも多くあり、それら諸論については、本研究の各章において問題提起をする際に触れることにする。

近年、女性の生き方を描いた『或る女』というテクストを、フェミニズム・ジェンダー批評という視点で読み直す論も盛んである。特に九十年代以降数多く見られるものである[33]。但し、そういった諸論自体が、ある種の方向性や落とし所を前提として持っている点には留意すべきである。すなわち、性差が抱える問題と、そのあるべき答えを所与の前提として文学作品を読むということは、様々な読みの可能性を放棄しかねない危うい営みと言えよう。それゆえ、本研究では性差の問題として『或る女』を読むのではなく、あくまでも『或る女』という作品に描かれ

---

[27] 前掲注 23、二二頁

[28] 中島礼子「『或る女』前史としての国木田独歩における女性像―「おとづれ」「第三者」「鎌倉夫人」と「或る女のグリンプス」をめぐって―」（『有島武郎研究』第八号、二〇〇五年三月、九～一一頁）

[29] 井上理恵「『或る女』上演を考える」（『有島武郎研究』第一二号、二〇〇九年九月、六頁）

[30] 日比嘉高「洋上の渡米花嫁―有島武郎「或る女のグリンプス」と日系アメリカ移民―」（『有島武郎研究』第一四号、二〇一一年六月、一一頁）

[31] 金井景子「女王の家政学―『或る女』と明治三十年代―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、四八頁）

[32] 中村三春「ジェンダーとレトリック―『或る女』というコンタクト―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、一〇三頁）

[33] 中山和子・江種満子編『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』（翰林書房、一九九七年一〇月）は、近年のジェンダー論的な『或る女』研究の集大成作である。

た人物描写や物語の構造を、テクストに書かれた表現に依拠して分析するという文学的な捉え方で論を展開していく。この点については、第二章「『或る女』における「夢遊病者」としての葉子像―「ヒステリー」を端緒として―」において詳述しているので、ここでは概観にとどめる。

以上が、女性像の〈新／旧〉をめぐる問題、及びフェミニズム・ジェンダー批評の先行研究の状況となる。

３．本研究の方法

ここで本研究の方法について述べておくことにしよう。本研究は、文学作品に描かれた人物の造形や作品の構造を考察するうえで、有島の女性観の特徴や思想の変化に着目し、その関係について解明しようとするものである。また、有島の書き残した書簡、評論、及び各種の記事や講演録などの周辺資料を手掛かりとして、有島がどのような女性観を持っているかを分析する。有島はしばしば、書簡や評論などにおいて独自の価値観や観点を披露しているが、時としてそこには転向や自家撞着が見られる。そういった有島の思想の転換が作品の人物像にどのように投影され、あるいは乖離しているのか。本研究では、その投影と乖離の様相を有島の遺したテクストに立脚点を置きながら、作品分析を展開する。

さて、ここで、有島武郎の女性観の一端が表れている資料を見てみたい。次に掲げるのは、有島が石坂養平に宛てた書簡である。これは、大正八年（1919）十月十九日に書かれたもので、『或る女』の刊行後、間もなく執筆されたことになる。

> 何物も男性から奪はれた女性は男性に對してその存在を認めらるゝ爲めに女性の唯一の寶なる貞操を賣らねばなりませんでした。生殖に必要である以上の姪欲の誘引を以て男性を自分に繋がねばなりませんでした。然しこの不自

然な妥協は如何して女性の本能の中に男性に對する憎惡を釀さないでゐられませう。男女の爭鬪はこゝから生れ出ます。同時に女性はまだ女性本來の本能を捨てる事が出來ません。卽ち男子に對する純眞な愛着です。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命です。私はそれを見ると心が痛みます。「或る女」はかくて生まれたのです。[34]

これは大正八年（1919）十月九日に有島が石坂養平宛てた書簡の一節である。有島は、この書簡において『帝国文学』（大正八年十月）に掲載された石坂養平の「有島武郎論―氏の思想的傾向に就いて」[35]に反論し、『或る女』の成立背景や創作意図についても言及している。有島は、女性が男性を繋ぎ留めておくために「貞操」を提供したり、あるいは「姪欲の誘引」という手段を用いたりすると述べている。そして、これらの行為は女性にとって「不自然な妥協」であったため、必然的に男性に対する憎悪の感情が醸成されるとして、そこに「男女の争闘」の契機が生じると捉えている。しかし、一方で有島は、女性には男性に対して「純真な愛着」を持つという本能があるとも説き、この憎悪と愛着という「二つの矛盾した本能」が女性には備わったと述べている。有島は、以上のような論理によって、女性には二つの矛盾した「本能」があるというテーゼを導き出し、それを『或る女』の創作意図として示しているのである。ということは、『或る女』の主人公早月葉子像の形象にも、この「二つ矛盾した本能」が関わっていると考えられよう。

なお、この書簡において有島固有の二元論的な発想という思考の傾向にも留意しておきたい。実は、そういった二元論的な発想は、彼の観念的世界では、作家活動に入る前から人生に対する普遍的な問題が通奏低音のように響いていた。ここで、有島文学の二元論を確認しておきたい。有島の文学的独立宣言と呼ばれる「二つの道」という評論がある[36]。先行研究の多くが触れるところであり、論者もそ

---

[34]『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月、一一八頁）
[35]『有島武郎全集』別巻（筑摩書房、一九八八年六月、五二二～五二七頁）に所収。
[36] 山田昭夫「有島武郎の作品と人」（『鑑賞　日本現代文学』、角川書店、一九八三年七

れに倣って参照してみたい。

二つの道がある。一つは赤く一つは青い。凡ての人が色々の仕方で其上を歩いて居る。或る者は赤い方をまツしぐらに走つて居るし、或者は青い方を徐ろに進んで行くし、又或者は二つの道に兩股をかけて慾張つた歩き方をして居るし、更らに或者二つの道の分れ目に立つて、凝然として行手を見守つて居る。搖籃の前で道は二つに分れ、夫れが松葉つなぎの様に入れ違つて、仕舞に墓場で絶えて居る。人の世の凡ての迷ひは此二つの道がさせる業である。

（「二つの道」、『白樺』、明治四十三年五月）[37]

これは明治四十三年五月一日発行の『白樺』第一巻第二号の巻頭に掲載された有島の評論の一節である。この引用文によると、有島は世の中には二つの道があるという二元的な考え方を持っていることがわかる。すべての人がこの二つの道の上に歩いて生きていくとし、二つの道があるからこそ人間は迷っているわけであるとも説いている。人間は世界に迷っている時、常に二つに分裂し、矛盾な境界の上に立つことになりがちなのである。果たして、この二つの道はいったいどのようなものであろうか。

人は色々な名によつて此二つの道を呼んで居る。アポロ、ディオニソスと呼んだ人もある。ヘレニズム、ヘブライズムと呼んだ人もある。Hard-headed,Tender-hearted と呼んだ人もある。靈、肉と呼んだ人もある。趣味、主義と呼んだ人もある。理想、現實と呼んだ人もある。空、色と呼んだ人もある。此の如きを數へ上げる事の愚かさは、針頭に立ち得る天使の數を數へんとした愚さにも勝つた愚かさであらう。如何なるよき名を用ゆるとも、此二つの

月、二二頁）

[37] 『有島武郎全集』第七巻（筑摩書房、一九八〇年四月、五頁）

道の内容を言ひ盡す事は出來まい。二つの道は二つの道である。人が思考する瞬間、行為する瞬間に、立ち現はれる明確な現象で、人力を以てしては到底無視する事の出來ない、深奥な殘酷な實在である。

（「二つの道」、『白樺』、明治四十三年五月）[38]

人間はこの二つの道を色々な名で呼んでいる。例えば、〈アポロ／ディオニソス〉、〈ヘレニズム／ヘブライズム〉、〈Hard-headed／Tender-hearted〉、〈霊／肉〉、〈趣味／主義〉、〈理想／現実〉、〈空／色〉といった二項対立的な概念の組み合わせである。この二つの道は、人間が思考する瞬間、行為する瞬間に立ち現れてくるものであり、これは人の力の及ばない残酷な事実であると有島は説く。川鎮郎氏によれば、有島は「二つの道」を通じて、キリスト教的倫理から脱却し、人間は霊・肉などの二元的存在であることを認め、その欲求と矛盾存在をそのまま肯定して行こうと志向しているという[39]。つまり、彼はこの評論の中で、様々な二元的な、また矛盾した考え方をそのまま肯定することを表明したのである。しかし、有島はこの後、思想的転回をはかる。二元的であることを克服しようとして一元を追い求めたのである。「二つの道」が刊行されて十年が経過した後、評論「惜みなく愛は奪ふ」の中で有島は次のような観点を提示することになる。

お前の衷には苦しい二元が建立される。靈と肉、天國と地獄、天使と惡魔、それから何、それから何……對立した觀念を持出さなければ何だか安心が出來ない、そのくせ觀念が對立してゐると何だか安心が出來ない、兩天秤にかけられたやうな、底のない空虛に浮んでゐるやうな不安がお前を襲つて來るのだ。

（「惜みなく愛は奪ふ」、『有島武郎著作集』第十一輯、叢文閣、大正九年六

---

[38] 同上、八頁

[39] 川鎮郎「有島武郎」（『新研究資料現代日本文学　第一巻　小説Ⅰ・劇曲』、明治書院、二〇〇〇年三月、一五六頁）

月五日）[40]

「惜みなく愛は奪ふ」は有島の生涯の思索の集大成ともいうべき「生命論的」な評論である[41]。この評論において、当初は肯定していた二元的な考え方が、人間を苦しめさせる原因であると捉え直している。そして、対立的な観念を持っていると「安心が出來な」くなり、「底のない空虚」感と「不安」に襲われてしまうとも言う。有島は二元論的な発想に対してある種の懐疑を抱いてもいたのである。有島の二元論的な発想に対する疑念は次の文章にもうかがえる。

> 私にあつては靈肉といふやうな區別は全く無益である。また善惡といふやうな差別は全く不可能である。私は凡ての活動に於て全體として生長するばかりだ。[42]

有島は、世界が分割できない存在であり、二元論的な発想には意味がないと述べている。また、〈霊／肉〉、〈善／悪〉のような対立的な観念が「全く無益」であり、「全く不可能」であるとも説いている。有島は二元論を批判しつつ、この世界には霊も肉もあるし、善も悪もあるという発想を持つようになっているのである。そして、有島はすべての活動について「全體として生長するばかり」であると総括する。つまり、彼は世界を一つの根本的な原理によって説明しようとするのである。

因みに、有島の二元論的発想に関して、例えば、本多秋五氏は、有島の生涯の本質は「克自自制の儒教教育」と「個人主義の洋学教育」という二つの極の間を揺れ動くのであると論じている[43]。また、安川定男氏は、有島が「二元分の分裂と矛

---

[40] 「惜みなく愛は奪ふ」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月、一四三頁）
[41] 前掲注 39、一五六頁
[42] 前掲注 40、一四五頁
[43] 本多秋五「有島武郎論」（『「白樺」派の文学』、新潮文庫、一九六〇年九月、二五四頁）

盾」に苦しまなくてはならなかったと述べている[44]。また、内田満氏は「二元の生活」を克服しようと求めつづけた有島が、「痛酷な一元の反語」に直面したと指摘している[45]。山田昭夫氏は、有島文学の根底にあるものが「二元葛藤」であるとし、有島の不断の命題が「二つの自我を何とかして一元化して生きたい」ということであると捉えた[46]。そして、この二元論的な発想をめぐる研究史の到達した地点は「二元分裂に苦悩する近代知識人としての有島像」と石丸晶子氏によって総括された[47]。以降、有島研究の多くはこの軌道に沿って展開していくことになる。片山礼子氏は有島が希求するのは「二元的分離のない本能的生活が現実となる」理想の世界であると述べている[48]。譚仁岸氏は「二元の道」を強いられた運命の中で、「自らの独特な方法でそれを克服しようと奮闘」していた一人の文学者として有島を捉えようとしている[49]。いずれの論者も、有島が二元を克服するべく一元を求めながら、そこに到達できなかったという見取り図を示している。

そして、有島の二元論的発想は作品『或る女』とどのような関係があるのか。岡本道雄氏は、有島が葉子において「二元的矛盾の徹底した姿」を描き出そうとしていると指摘している[50]。西垣勤氏は、有島が「自己の二元的なしかもゆれ動く主体」を、外的な事実をモデル佐々城信子によりながら早月田鶴子の内面に溶かし込んだのであると述べている[51]。また、上杉章和氏は、『或る女のグリンプス』が評

---

[44] 安川定男「『或る女のグリンプス』」(『有島武郎論』、明治書院、一九六七年一一月、増補版、一九七八年五月、一四九頁)
[45] 内田満「有島武郎の創作方法（下）―『石にひしがれた雑草』から『或る女』へ―」(『同志社国文学』一一号、一九七六年二月、九二頁)
[46] 山田昭夫「有島文学の基本構図」(『有島武郎・姿勢と軌跡』、右文書院、一九七九年七月、八頁)
[47] 石丸晶子「有島武郎」(『日本現代文学研究必携』、三好行雄編、學燈社、一九八三年七月、一一三頁)
[48] 片山礼子「有島武郎『或る女』の「なつかしさ」―本能的生活―二元化から一元化へ―」(『有島武郎研究』十号、二〇〇七年三月、一九頁)
[49] 譚仁岸「思想と実生活」の対立とその止揚―正宗白鳥、小林秀雄、有島武郎を中心に―」(『神戸女学院大学論集』第六七巻一号、二〇二〇年六月、八九頁)
[50] 岡本道雄「有島武郎の自殺とキリスト教―近代日本思想史の一断面―」(『神戸女学院大学論集』九巻、一九六三年四月、五一頁)
[51] 西垣勤「『或る女』論」(『白樺派作家論』、有精堂、一九八一年四月、一四〇頁)

論「二つの道」に述べられている「霊肉二元対立のドラマ化」にほかならないと論じている[52]。これらの先行研究は概ね、作家有島の二元論的発想はそのまま作品『或る女』に投影されているという論調になっている。論者も、そういった二元論と『或る女』との関係について重視すべきという点は賛成する。本稿においても、有島文学の本質としての二元論的発想と『或る女』に形象された人物像との関係について言及することになる。但し、両者の間を短絡的に結び付けるのではなく、そこには乖離や揺れが見られるということについても明らかにする。

4. 本研究の構成

以上に見てきたような問題意識と研究方法に基づき、本研究を以下のように構成した。

第一章は、アンビバレントな葉子像を考察するものである。この考察を展開するにあたって着目したのは有島が石坂養平に宛てて書いた書簡である。この書簡によれば、有島は、女性が男性に対して「憎悪」と「愛着」という二つの矛盾した本能を持つと述べており、こういった女性観のもとに『或る女』は生まれたと記している。つまり、主人公葉子の造形には、男性に対して〈憎悪／愛着〉という二つの矛盾した本能を抱え持つ女性の姿が投影していると想定されるのである。但し、ここで留意すべきは、その相反するように見える本能は、葉子の場合、男性に対して発動されるばかりでなく、女性に対しても発動されている点である。本研究では、葉子は、男と女という関係に限定してアンビバレントな状況に陥るのではなく、女性との関係においても同様の状況に陥るということを検討することになる。

第二章は、夢遊病者に喩えられる葉子像について考察するものである。葉子の精神の失調について、従来はヒステリー症と結びつけて論じられる傾向にあった。し

---

[52] 上杉章和「『或る女』論」(『有島武郎―人とその小説世界―』、明治書院、一九八五年四月、二三四頁)

かし、作品に表れた葉子の「ヒステリー」の初出場面を見てみると、そこでは夢と現の混淆した状態が描かれており、加えて、そういった状態に陥っている葉子のことを「夢遊病者」に喩えるかたちで描出してもいた。本研究ではこのような点に着目し、葉子の精神状態をヒステリー症と擦り合わせるのではなく、作品自体の表現としてある「夢遊病者」という切り口からその内実を具体化するべく論を展開する。

第三章は、評論「惜みなく愛は奪ふ」における有島の「本能」観に着目し、葉子に関連して用いられている「本能」を考察するものである。有島は、『或る女』において葉子を本能の赴くままに生きる女として描いたと言われている。ここで言う「本能の赴くまま」というのは、自由奔放に生きるという意味であろう。こういった意味で「本能」を捉えていくのは、いわば辞書通りの解釈であり、おおむね妥当と言える。但し、葉子に関する「本能」の初出を見てみると、それは男に奉仕する前時代的な女性像そのものであって、決して「新しい女」とは言えない。有島は、前時代的な女性の相貌を見せ始めた葉子を「女の本能」に目覚めた女性として描いているのである。果たしてこの「本能」とはいかなるものであるのか。このような問題意識のもとに、有島語彙としての「本能」に着目し、この語が〈精神／肉体〉という二項対立を揺れ幅としつつ葉子の人物造形に関わっていることについて検討を加えていく。

第四章は、コケットとしての葉子像を考察するものである。この考察を展開するにあたって着目したのは有島が浦上后三郎に宛てて書いた書簡である。この書簡において有島は『或る女』の執筆意図を書き残している。そこには、男と女は対等な関係ではなく、女は男の「奴隷」であり、そのような従属的な立場に置かれた女にとって、男を「籠絡」しようとした時に用いることのできる武器は「性慾的誘惑」であるという趣旨の叙述が見られる。留意したいのは、その書簡の中で有島が、先の執筆意図について、ある程度までの「醇化」をしたが、その「醇化」が不足していたため、「私の期待を裏切って硬化」したとも述べている点である。果たして、

有島が『或る女』において実践しようとしたコケットな女の形象はいかなる「醇化」と「硬化」を見せているのか。本研究では、以上のような問題意識のもとに、まず、有島の女性観をコケットリーとの関連から再検討する。そして、そのような女性観の実践としてある葉子のコケットリーとしての造形が、いかなるものとして展開されているのかを明らかにする。

第五章は、堕落する葉子像を考察するものである。この考察を展開するにあたって着目したのは有島が書いた『或る女』の広告文である。有島は『或る女』の執筆意図について、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」にこそ目指すべき「人生の可能」があると述べている。従来、この「人生の可能」をめぐっては、それが『或る女』という作品でどのように主題化されているかという観点から論じられる傾向にあった。本研究ではこの問題に対し、作品の主題との関連にとどまらず、そういった発想を持つに至った有島の人生観の形成や、その人生観が作中人物早月葉子の形象にどう関わっているのかについても検討を加えてゆく。

本研究では以上の五章において本論部分を展開する。

第一章

『或る女』におけるアンビバレントな葉子像

―石坂養平宛書簡を手掛かりとして―

1. 問題提起

有島武郎によって書かれた『或る女』は、当初『或る女のグリンプス』という題名で雑誌『白樺』に明治四十四年（1911）一月から連載され、その後、後半を書き足すかたちで前・後篇の仕立てとなり、前篇が大正八年（1919）三月二十三日、後篇が同年六月十六日に、それぞれ『有島武郎著作集』第八輯と第九輯として叢文閣から刊行された[1]。『或る女』の時代背景は日清戦争直後の明治三十年代に設定されているが、この作品が実際に連載され始めたのは明治四十四年であり、その同年九月には雑誌『青鞜』が創刊されている点に留意しておきたい。この当時の日本には、それまでの良妻賢母を是とする考え方に囚われず、社会的な抑圧から解放されようとする「新しい女」たちが芽生え始めていたのである[2]。果たして有島は、そういった「新しい女」を生み出すうえで、どのような女性観を前提としていたのか。

ここで、有島武郎の女性観の一端が表れている資料を見てみたい。次に掲げるのは、序章でも取り上げた石坂養平宛の書簡である。これは、大正八年（1919）十月十九日に書かれたもので、『或る女』の刊行（大正八年六月十六日）後、間もなく執筆されたことになる。

> 何物も男性から奪はれた女性は男性に對してその存在を認めらるゝ爲めに女性の唯一の寶なる貞操を賣らねばなりませんでした。生殖に必要である以上の姪欲の誘引を以て男性を自分に繫がねばなりませんでした。然しこの不自然な妥協は如何して女性の本能の中に男性に對する憎惡を釀さないでゐられませう。男女の爭鬪はこゝから生れ出ます。同時に女性はまだ女性本來の本能

---

[1] 安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月、四五五頁）

[2] 金子景子「ジェンダーとセクシャリティ」（中山和子・江種満子・藤森清編『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房、一九九八年三月、一五五頁）

を捨てる事が出來ません。卽ち男子に對する純眞な愛着です。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命です。私はそれを見ると心が痛みます。「或る女」はかくて生まれたのです。[3]

これは『或る女』の創作意図について書かれたものである。有島は、女性が男性を繋ぎ留めておくために「貞操」を提供したり、あるいは「姪欲の誘引」という手段を用いたりすると述べている。そして、これらの行為は女性にとって「不自然な妥協」であったため、必然的に男性に対する憎悪の感情が醸成されるとして、そこに「男女の爭鬪」の契機が生じると捉えている。しかし、一方で有島は、女性には男性に対して「純眞な愛着」を持つという本能があるとも説き、この憎悪と愛着という「二つの矛盾した本能」が女性には備わったと述べている。有島は、以上のような論理によって、女性には二つの矛盾した「本能」があるというテーゼを導き出し、それを『或る女』の創作意図として示しているのである。ということは、『或る女』の主人公早月葉子の造形にも、この「二つ矛盾した本能」が関わっていると考えられよう。つまり、〈憎悪／愛着〉という矛盾した本能を抱え持つ女性の姿が、葉子には投影されていると思われるのである。

ここで、葉子の造形に関してどのような研究が行われてきたかを確認しておきたい。従来の研究は、概ね、有島の説く女性観と同様に、〈男／女〉という二項対立の構図の中で男に対して愛憎を抱く葉子像を見て取る傾向にあった。例えば、葉子は男への復讐としての闘争と、本能の欲求としての男性への愛の矛盾相剋を生きる女性であるという解釈[4]や 、『或る女』自体についても「男／女の二項対立という文化装置を受容すること」によって描かれた物語として読む解釈[5]、また、葉

---

[3] 石坂養平宛書簡（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月、一一八頁）
[4] 三田憲子「有島の男女観に立脚した作品読解を」（総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、二四二頁）
[5] 山田俊治「他者に生きた葉子／『或る女』のジェンダー機制」（総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、二三〇頁）

子は「優れた肉体を武器とし、男に対して宣戦布告した人物」であるという解釈[6]、あるいは、「性が男性に対して巧な武器になることを知る」葉子は「波乱に富む男性遍歴を重ね、ようやく心底から愛着できる男性に出逢ったと思うと、激しい愛執の闘い」に陥ることになるという解釈[7]などが提供されてきている。

葉子は確かに、有島の考える本能を具備した女性として描かれているが、しかし、本稿で着目するのは、その相反する本能が、男性に対して発動されるばかりではなく、血縁のある女性に対しても発動されるという点である。「本能」というのは生得的なものであり、したがってそれは普遍的なものでもある。しかし、葉子に見られる二つの「本能」は、有島の説くような男性だけに適用されるものではない。本稿はそれを検証しようとするものであるが、この試みが妥当性を持つということになれば、有島の考えている「本能」という用語は修正を余儀なくされてこよう。あるいは、有島の説く「本能」が普遍的なものであるとした場合、今度は葉子の造形が有島の女性観を忠実に投影したものではなく、固有のものとして描かれているということになるであろうか。

さて、以上の考察を展開する上で本稿が補助線としたのは〈男／女〉という二項対立の軸ではなく、有島の説く女性の「本能」であり、そこから派生してくる「男女の争闘」という関係性であることを、あらかじめ確認しておきたい。あくまでも本稿の問題の端緒となっているのは有島が書簡で綴っている女性の「本能」論だからである。但し、本稿は、単に有島の考え方を作品の中で検証して了とするものでもない。有島の説く「本能」とか、「男女の争闘」といった観点は、〈男／女〉という二項対立を基盤として発想されたものに他ならないが、本稿ではその〈男／女〉という二項対立的な前提についても再検討していくことになる。葉子は、男と女という関係に限定してアンビバレントな状況に陥るのではなく、女性との関係においても同様の状況に陥るということを指摘する。有島の説く「矛盾した本能」を手

---

[6] 中村三春「媚態と狂気―『或る女』におけるコケットリーの運命」（中村『言葉の意志 有島武郎と芸術史的転回』、有精堂、一九九四年三月、一五七頁）
[7] 江種満子「有島武郎女性論」（『文教大学国文』、二〇〇八年三月、四五頁）

掛かりとしつつ、愛憎の葛藤を抱える葉子の在りようを究明し、更には、有島の女性観から逸脱し、固有の生として自立していくアンビバレントな葉子像について考察を展開してみたい。

2. 無名の男性たちとの恋愛～〈愛着〉の欠如～

『或る女』において、葉子は数々の恋愛を経験する。本節では、そういった葉子の恋愛歴の初期に位置付けられるものを取り上げる。

> 葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潛り込ませて置いて、もう一歩といふ所でつき放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、ある機會を絕頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても自分との關係の絕頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこに來かゝると情容赦もなくその男を振捨てゝしまつた。さうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獸性を恥ぢるやうに見えた。（第二章・一二頁）[8]

これは、葉子と「多くの男」たちとの恋愛が回想的に書かれたものである。留意すべきは、相手の男性がいずれも無名の者たちであるという点である。それらの恋愛相手はいずれも具体的な名前を欠いており、「男」という抽象化された存在として一括されている。その結果、ここには葉子の概念化された男性観、あるいは恋愛観が端的にうかがえることになっており、注目される。試みに、その恋愛様式を抽出すると、以下のようなプロセスとなる。

---

[8] 『或る女』の本文は、『有島武郎全集』第四巻（筑摩書房、一九七九年一一月二〇日）により、章数・頁数を記した。但し、私に適宜キーワードとなる表現を四角で囲ったり、傍線を施したりした。以下同様。

① 男をかなり近くまで潜り込ませておく。

② 絶頂の一歩手前のところで男を突き放す。

③ 捨てられた男は自分の獣性を恥じる。

葉子は②に見られるとおり、恋愛の途中で男を突き放すという行動に出る。なぜ、男を突き放すのかというと、彼女は男が恋愛における絶頂において「突然女性を踏み躙る」ということを直感で知っていたからである。葉子は、自分が男によって踏みにじられることになる前に、自分の方から男を突き放し、傷を負わないようにしているのである。このような葉子の在り方からうかがえるのは、葉子にとって恋愛とは、単に異性（男性）に対する欲求としてあるのではなく、相手（男性）を出し抜くためのものとしてあり、それはあたかもゲームのようなものとしてあるということであろう。つまり、葉子にとって男性とは、勝負を争う競争相手なのである。それゆえ、葉子は恋愛相手である男を「情容赦もなく」振り捨てることができる。このような行動からは、男性に〈愛着〉などを持たない葉子像を読み取ることができよう。

> 十五の春には葉子はもう十も年上な立派な戀人を持つてゐた。葉子はその青年を思ふさま飜弄した。青年は間もなく自殺同様な死方をした。一度生血の味をしめた虎の子のやうな渇慾が葉子の心を打ちのめすやうになつたのはそれからの事である。（第八章・五九頁）

これは葉子が十五歳の時に経験した恋愛についての叙述である。この時、葉子は十歳年上の青年を恋人に持っていた。葉子はその青年を思いのままに翻弄した。葉子に翻弄された青年は、自殺同様な死に方をしたとある。留意すべきは、この恋愛が葉子に罪悪感を覚えさせることにはなっていないという点である。葉子は青年の死に傷ついたり、その死を悼んだりはしない。青年に対する〈愛着〉などは持っていないと言ってよいだろう。むしろ、葉子はこの青年の死をきっかけに「生血の

味をしめた虎の子のやうな渇慾」を覚えたのである。葉子にとって恋愛は、あくまでも男性との勝負を競うものであり、その勝負の末に競争相手が死ぬということは、最高の勝利のかたちに他ならないのである。

ここに見てきた無名の男たちとの恋愛における葉子は、弱い男性をさげすみ、足下に踏んで、勝利の味に酔い痴れている。葉子は、艶やかな妖婦のように男性たちに媚態を示し、誘惑の腕を振るった。これは葉子の、男性に対する〈憎悪〉の一側面とも捉えられようか。

3. 名を持つ男たちとの恋愛～〈愛着〉と〈憎悪〉の相剋～

3.1　木部に対する純真な〈愛着〉と失望

葉子の恋愛遍歴において、彼女が初めて恋した男性は木部孤笻であった。因みに、『或る女』はモデル小説として知られている作品であり、主人公葉子のモデルは国木田独歩の先妻である佐々木信子とされ、また、木部のモデルとなったのは国木田独歩[9]、古藤のモデルは有島自身であると指摘されている[10]。これ以外の登場人物にも、それぞれ相当する実在のモデルがいる。例えば、倉地三吉は武井勘三郎、木村貞一は森広、五十川女史は矢島楫子、田川博士は鳩山和夫、内田は内村鑑三、愛子は佐々城アイ、貞世はヨシエである[11]。但し、留意すべきは、そういった実在の人物たちの足跡が、そのまま『或る女』に書き写されているわけではないという点である。現実の佐々木信子と国木田独歩の結婚の実態はそれとして、葉子と木部の結婚には『或る女』に固有の人間関係が紡ぎ出されているのである。その葉子

---

[9] 鎌倉芳信「『或る女論』―モデル問題を中心に―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、一四〇頁）

[10] 有島武郎は黒沢艮平宛書簡（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月、九八頁）において、「木村といふのは森広で、古藤といふのは私です。」と指摘している。

[11] 西垣勤「『或る女』論―前編の構造について―」（『有島武郎論』、有精堂、一九七一年六月、一〇三頁）

の夫となる木部に関して、本稿で注目するのは次の条である。

> その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して兼ねてからある事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落付き拂つた中年の婦人が、心の底の動揺に刺戟されてたくらみ出すと見える残虐な謀計は、年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻掻くのを見ると、葉子の心に純粋な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽に他愛もなく酔ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ晴れしいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。（第二章・一三～一四頁）

これは、葉子が十九歳の時に経験した木部という二十五歳の男性との恋愛の顚末について書かれたものである。従軍記者として名を博していた木部は、ある会食の席上、葉子と出会って一目惚れをし、二人は恋に落ちた。しかし、それを知った葉子の母親は、二人を引き裂こうとする。その母親の干渉に耐えかねて、木部はもだえ苦しむ。苦しむ木部を見た葉子の反応に注目したい。葉子の心には「純粋な同情」と、男に対する「無條件的な捨身な態度」が生まれ始めたとある。そのような葉子の心と身体に生じたものを、ここでは「女の本能」と規定しているのである。これは作品の中で「本能」という言葉が最初に用いられた箇所となる。この「女の本能」こそは、有島が書簡で述べていた「男子に対する純眞な愛着」に他ならない。男を遊び相手とも敵とも認識していた葉子にとって、木部に対するこのような感情は「本能」への目覚めとも理解できる。

葉子はいくつかの恋愛経験によって、前節で見てきた無名の男たちに対するよ

うな厳しい男性観を持っていたにもかかわらず、なぜ、木部に対しては愛情を持つことになったのか。葉子が木部に関心を持ち始めたのは、彼女の母が木部に好意を抱いていることに気づいたからである。葉子は、そういった母の有り様に刺激され、そして、その男をめぐって母と競合する関係に入ったのである。あたかもそれは、賞品を獲得するゲームの様相を呈し、そのゲームに熱中した結果、葉子は勝者となって木部を獲得するに至る。

さて、二人はこの後、結婚し、同棲を始めるのであるが、葉子の木部に対する「純真な愛着」は次第に冷めていくことになる。結婚生活は陳腐で、夫の実像に葉子は失望するほかなかった。

> 葉子を確實に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。（略）結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係らず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼れであったのに、思ひもかけぬ貪婪な陋劣な情慾の持主で、而もその慾求を貧弱な體質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感ぜずにはゐられなかつた。夕食を濟ますと葉子はいつでも不満と失望とでいらいらしながら夜を迎へねばならなかつた。（第二章・一四～一五頁）

これは葉子と木部が同棲を初めてから二週間も経たない頃の、葉子の心境である。葉子は木部に対して失望や不満を抱いていることがわかる。従来、この結婚生活の破綻について、例えば兵頭かおり氏が、「結婚生活における木部はまさに、あくまで自己中心的な妻を我が物として振る舞う男」[12]だと指摘するように、葉子

---

[12] 兵頭かおり「木部孤節と運命観―第三十七章を中心に―」（『有島武郎『或る女』を読む』、紅野敏郎編、青英舎、一九八〇年一〇月、二四九頁）

と木部のそれぞれの性格に原因が求められてきた。しかし、ここに引用した本文を見る限り、葉子の失望や不満は性格というよりは性的なものに対して抱かれているように受け取れる。具体的に見てみよう。まず留意すべきは、木部に対する葉子の認識の変化である。結婚する前、葉子は木部に対して「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」という認識を持っていた。これは、性的な関係を結ぶことに消極的な木部の態度を述べたもので、それを「崇高」と表現しているように、ここには木部に対する葉子の肯定的な認識をうかがうことができる。ところが、結婚後の葉子は、木部に対して「取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男」という認識を抱くようになる。これは、同じく性に対する木部の態度を述べたものとなるが、ここではその表現が葉子の否定的な認識をかたどるものへと転換されている。つまり、木部に対する葉子の失望には、葉子の性的な欲求不満があると推測されるのである。また、結婚後の木部は葉子に「女々しい弱點」を露骨に現し始めたともあるが、この「女々しい弱點」とは、葉子にとって「貪婪な陋劣な情慾の持主で、而もその慾求を貧弱な體質で表はさうとする」ことであった。これも、木部の性的な魅力の欠落だと言える。葉子が求めているのは「女々しい」男性ではなく、男らしい性なのである。しかし、木部にはそういった魅力が欠落していて、それが結婚生活を破綻に導いた原因であると、この引用本文からは読み取れる。

無名の男性たちとの恋愛の中で、葉子は誰に対しても心を許さなかった。木部という男性は、葉子が初めて心を許した相手であり、彼は「純眞な愛着」という言葉で葉子と繋がる相手であったとも言える。しかし、結婚後、葉子は初めて「男といふものの裏を返へして見た」（一四頁）ような経験をする。木部は葉子を「確實に占領した」と確信した直後に態度を一変したのである。かつて葉子は、本能的に男性の本性というものを知っていて、自分が踏みにじられることになる前に自分の方から男を突き放していた。しかし今、この木部との結婚では、その男の本性を目の当たりにしてしまう。では、木部との関係において、葉子が踏みにじられる前に彼を突き放すことができなかったのはなぜか。それは、葉子が木部に対して「純眞

な愛着」を抱いてしまったからであろう。

3.2　古藤に対する性衝動

葉子を取り巻く男性登場人物たちに着目する際に、木部とともに顧みられてくるのは、古藤義一という存在であろう。この古藤という人物については、本多秋五氏が「この小説で絶対に欠くことの出来ぬ重要人物である」[13]として、その重要性を指摘している。また、その重要性については外尾登志美氏も、古藤は「葉子の、この時代における生涯の証人としてあり、『或る女』の作品世界を保証していることにある」[14]と指摘している。これらの諸論を踏まえつつ、本稿では葉子の性衝動という観点から葉子と古藤の関係を見ておきたいと思う。

> 葉子はその晩不思議に惡魔じみた誘惑を古藤に感じた。童貞で無經驗で戀の戯れには何んの面白味もなささうな古藤、木村に對してと云はず、友達に對して堅苦しい義務觀念の強い古藤、さう云ふ男に對して葉子は今まで何んの興味をも感じなかつたばかりか、働きのない沒情漢と見限つて、口先きばかりで人間並みのあしらひをしてゐたのだ。然しその晩葉子はこの少年のやうな心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつて堪らなくなつた。一夜の中に木村とは顔も合はせる事の出來ない人間にして見たくつて堪らなくなつた。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのが妬ましくて堪らなくなつた。幾枚も皮を被つた古藤の心のどん底に隱れてゐる慾念を葉子の蠱惑力で掘起して見たくつて堪らなくなつた。（第五章・三六頁）

ここに掲げたのは、葉子が古藤を誘惑しようとしている条である。ここに出てくる古藤とは、葉子がこの時点で婚約している木村という男性の友人という位置づ

---

[13] 本多秋五「有島武郎論」（『白樺派の文学』、新潮社、一九六〇年九月、二一八頁）
[14] 外尾登志美「或る女の構造―無秩序の軌跡とその証―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、六五頁）

けである。婚約者の木村は現在、米国に滞在中であり、その木村の代わりに葉子の世話をしているのが古藤であった。古藤は女性との経験が無い童貞として描かれている。葉子は、そのような古藤に「罪を犯させて見た」い、即ち、葉子に対して欲情させてみたいという念にかられる。本文には、古藤の深層にある欲念を掘り起こしたいとあるが、これは間接的な葉子の性衝動とも理解できる。

この時、葉子は古藤が自分の婚約者の友人であるということを忘れ、ただ単に一人の男として、自分の獲物として手に入れようと考えていた。このような葉子の性衝動をどのように捉えたらよいか。一つには、女性が男性を求める〈愛着〉という本能の現れであると解される。但し、木部との関係において見られたような「純眞な愛着」と同じものかというと、それは違う。そこには葉子の不純な動機がうかがえるからである。葉子は、決して「無條件的な捨身な態度」で古藤に接しているわけではなく、自分の「蠱惑力」を証明するために古藤を利用しようとしているのである。菅谷敏雄氏はこのような葉子の在り方を「誘惑者＝〈恋愛〉のテクニシャン」[15]と捉える。これは、有島が書簡で述べていた「姪欲の誘引」に相当するものと言ってもよい。この点については、安川定男氏にも指摘がある。即ち、安川氏によれば、葉子は「『男を籠絡すべき武器』としての『性欲的誘惑』に依存しようとする度合も人一倍強ければ、男性に対する衝動的な復讐心の点でも、本能的な男性に対する憧憬愛着の情の点でも共に人一倍の激烈さを所有」した人物であり、それゆえに「執着的な復讐、復讐的な執着の葛藤」を抱える人物であると説く[16]。そうであるとした場合、この葉子の性衝動には男性に対する〈憎悪〉が関係しているとも解されてくる。

葉子は、無名の男たちとの間では〈愛着〉の欠如した恋愛を展開してきたが、木部との恋愛において初めて純真な〈愛着〉を見せた。しかしその〈愛着〉は、結婚

---

[15] 菅谷敏雄「『或る女』論―境域から〈海〉へ―」（『有島武郎研究』、有島武郎研究会、一九九七年三月、一一頁）

[16] 安川定男「『或る女』論―浦上宛書簡をめぐって―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、七四頁）

直後に失望へと転換する。葉子は性的な魅力を欠いた木部に失望してしまうのである。ここに見てきた通り、葉子の性衝動は次第に肥大化してゆくわけであるが、その具体的な様相を古藤との逸話においてうかがうことができるのであった。

3.3　ディレンマに陥る葉子像

男性に対して〈憎悪〉を抱いたり、一方で〈愛着〉を持ったり、あるいは性衝動に駆られたりする葉子の姿を、『或る女』の中に求めてみよう。

> ①葉子の嘗めた凡ての經驗は、男に束縛を受ける危險を思はせるものばかりだつた。然し何んといふ自然の惡戯だらう。それと共に②葉子は男といふものなしには一刻も過されないものとなつてゐた。砒石の用法を謬つた患者が、その毒の恐ろしさを知りぬきながら、その力を借りなければ生きて行けないやうに、③葉子は生の喜びの源を、まかり違へば生そのものを蝕むべき男といふものに求めずにはゐられないディレンマに陥つてしまつたのだ。肉慾の牙を鳴らして集つて來る男達に對して、（さう云ふ男達が集つて來るのは本當は葉子自身がふり撒く香の爲めだとは氣付いてゐて）葉子は冷笑しながら蜘蛛のやうに網を張つた。近づくものは一人殘らずその美しい四手網にからめ取つた。葉子の心は知らず知らず殘忍になつてゐた。唯あの妖力ある女郎蜘蛛のやうに、生きてゐたい要求から毎日その美しい網を四つ手に張つた。（第十六章・一三〇～一三一頁）

これは、葉子の男性経験が総括的に回想されるという条である。まず、傍線①において、葉子を束縛し、危険をもたらす存在として過去の男性たちが捉えられる。これは、有島の説く〈憎悪〉の本能によって捉えられる男性像となる。続いて、傍線②において、葉子が必要とする存在として男性が捉えられる。これは、有島の説

く〈愛着〉の本能によって捉えられる男性像と言えよう。この二つの男性像が、傍線③において、再定義されることになっている。即ち、「生の喜びの源」というのは〈愛着〉の本能によるものであり、「生そのものを蝕む」というのは〈憎悪〉の本能によるものであろう。問題は、そういった二つの本能の間で葉子が「ディレンマに陥つてしまつた」と文章が結ばれている点である。

彼女の恋愛遍歴は、葉子が主導権を握りながら相手の男性を存分に翻弄するという性質のものであった。唯一、彼女の方も対等に愛を捧げた木部との恋愛ー結婚においても、彼女は結婚して二ヶ月で木部を見捨ててしまったのだ。更にまた、葉子は自分の「蠱惑力」を証明するために、女性経験のない古藤を誘引しようとしていた。しかし、倉地という男と出会って以降、葉子の運命は変わっていく。

3.4　倉地との恋愛におけるディレンマ

> 「お葉さん」（事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにかう呼びかけた）突然震へを帶びた、低い、重い聲が燒きつくやうに耳近く聞えたと思ふと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きも出來ないやうに抱きすくめられてゐた。固より葉子はその朝倉地が野獣のやうな assault に出る事を直覺的に覺悟して、寧ろそれを期待して、その assault を、①心ばかりでなく、肉體的な好奇心を以て待ち受けてゐたのだつたが、かくまで突然、何んの前觸れもなく起つて來ようとは思ひも設けなかつたので、女の②本然の羞恥から起る貞操の防衛に驅られて、③熱し切つたやうな冷え切つたやうな血を一時に體内に感じながら、抱へられたまゝ、侮蔑を極めた表情を二つの眼に集めて、倉地の顔を斜めに見返した。（第十五章・一二五頁）

これは、米国へ向かう船中で葉子が倉地に襲われ、肉体的な関係を結んでしまう場面である。その時、葉子は傍線部①にあるように、倉地が自分と肉体関係を迫っ

てくることを予期し、期待もしていた（葉子の性欲）。しかし、実際に倉地がそういった行動に出ると、葉子は傍線部②にあるように、「貞操の防衛」という態度をとる（倉地に対する憎悪）。このような葉子の心と身体の相反する反応は、傍線部③において、「熱し切つたやうな冷え切つたやうな血」というアンビバレントな表現に置き換えられていく。しかもそのアンビバレントな状態は、「一時に」葉子の体内において現象することになる。即ち、このような矛盾を抱えた葉子は、この時、ディレンマに陥っていると考えることができるのである。

葉子は男性に対する「憎悪」の本能を持ち、意識的に倉地を否定していた。この点について、石丸晶子氏は「葉子は意識的に倉地を否定していたが、無意識の力に引っ張られる」[17]と説く。石丸氏は、「意識／無意識」という関係によって倉地に対する葉子の相反する態度を説明するが、この関係は有島の説く「憎悪／愛着」という「本能」の持つ二面性に対応しているのではないか。そうであるならば、「無意識の力」は、よりいっそう本能的な「愛着」とも言えよう。

以上は、有島の男女争闘論に即して、葉子と無名の男性たち、または名を持つ男性たちとの恋愛を分析してきたものである。実は、このような対人関係において〈憎悪〉と〈愛着〉の間でディレンマに陥るという葉子の姿は血縁関係にある女性たちに対しても観察されるものである。有島は、女性の「本能」が〈憎悪〉と〈愛着〉という、相反するものとしてあり、それが「男女の争闘」を基盤としているものであるという見取り図を示していた。しかし、そういった相反する「本能」が〈男／女〉という性差とは無関係に観察されてくることを以下に検証してみたい。

4. 母親に対する愛憎

葉子と血縁の女性達との関係については従来、「同性嫌悪」[18]という論点から論

---

[17] 石丸晶子「『或る女』論」（「国語と国文学」東京大学国語国文学会七月号、一九七三年七月、四七頁）

[18] 竹腰幸夫「『或る女』論―母、葉子、愛子をめぐって―」（日本文学研究資料『有島武

じられてきた。これに対して本稿では、母の親佐に対しては〈憎悪〉と〈愛着〉が相剋し、二人の妹たちに対しては二つの本能が分散するという観点を提案したい。なお、分散というのは、即ち、愛子に対して〈憎悪〉、貞世に対して〈愛着〉をそれぞれ抱く葉子の姿のことを指す。

4.1　ライバルとしての敵愾心

葉子の母は早月親佐という呼称であり、キリスト教婦人同盟副会長として、社会的に華々しく活躍する存在として描かれている。それに対して医者の夫は影の薄い存在であり、その家庭は母権的な力の支配下にあると言える。父は意志の弱い男で、作品の中での比重が小さく、葉子に対する影響も少ない。一方、母は女流のキリスト教の先駆者として有能な活動家だが、家では夫をまったく無視する女性である。次は葉子の目に映った家の風景である。

> 基督教婦人同盟の事業に奔走し、社界で男勝りのしつかり者といふ評判を取り、家内では趣味の高い而して意志の弱い良人を全く無視して振る舞つたその母の最も深い隠れた弱點を、拇指と食指との間にちゃんと押へて、一歩もひけを取らなかつたのも彼女である。（第二章・一一～一二頁）

葉子の家族は明治の時代には珍しい存在形態であると言える。基督教婦人同盟の事業に奔走した葉子の母は、「社界では男勝りのしつかり者という評判」をとり、一方、家庭内では「良人を全く無視して振る舞つた」という女性で、葉子とよく似ているという印象だ。このような母に葉子は幼い時から絶えず抵抗しながら成長した。母親の隠れた弱点をちゃんと押さえていたのも葉子ただ一人であり、母親も葉子に対して警戒し、密かに敵意を持っていたのだった。葉子の母は、世間一般の

郎』、有精堂、一九八六年三月、三四頁）

母親のように娘に対して自分と同じ女の生き方を強いる保守的な女性ではなかった。そればかりではなく、葉子が成人した後は、母と娘という関係性が次第に希薄化し、引き換えに男を得るために競い合うようなライバル関係へと移行する。

> その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して兼てからある事では一種の敵意を持つてさへゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云ふべき境を通り越してゐた。世故に慣れ切つて、落付き拂つた中年の婦人が、心の底の動揺に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な謀計は、年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。（略）葉子の母が暴力では及ばないのを悟つて、すかしつなだめつ、良人までを道具につかつたり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの智力を搾つた懐柔策も、何の甲斐もなく、冷靜な思慮深い作戰計畫を根氣よく續ければ續ける程、葉子は木部を後ろにかばひながら、健氣にもか弱い女の手一つで戰つた。而して木部の全身全靈を爪の先き想ひの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我を折つた。而して五ヶ月の恐ろしい試練の後に、両親の立會はない小さな結婚の式が、秋のある午後、木部の下宿の一間で取行はれた。而して母に對する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなつた。（第二章・一三頁）

これは葉子と母が正面衝突をする場面である。葉子と木部の恋に気づいた母は「嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出した」とある。葉子の母は嫉妬の感情を露わにし、その様子は「不思議でないと云うべき境を通り超して」いた。二人を別れさせるために、母は「殘虐な謀計」をしたり、「あらん限りの智力を搾つた懐柔策」をしたりした。激しい嫉妬心の影響で、母親は自分の子供に対して敵意すら持つようになったのである。一方、葉子は母のそういった感情を見抜き、ライバルに

対するかのような憎悪を持ち、「健氣にもか弱い女の手一つで戰つた」とある。その結果、木部は「勝利の分捕品」として、葉子一人のものとなるに至る。

葉子は女性としての母の欲望を見透かし、ライバルとしての競争意識を持ち、木部と結婚したのである。大石修平氏は「木部と葉子との恋愛の実質は、葉子と母とのたたかいにある」としている[19]。結婚の実質的な内容が女性同士の闘争にある以上、この結婚は最初から不幸な結末が見通されていたと言える。歳月が経つにつれて、葉子の魅力は母を追い越し、娘の若さは母の衰えを際立たせる。

> 母は――母は一番葉子の身近かにゐたと云つていゝ。それだけ葉子は母と兩立し得ない仇敵のやうな感じを持つた。母は新しい型にわが子を取入れる事を心得てはゐたが、それを取扱ふ術は知らなかつた。葉子の性格が母の備へた型の中で驚くほどするすると成長した時に、母は自分以上の法力を憎む魔女のやうに葉子の行く道に立ちはだかつた。その結果二人の間には第三者から想像も出來ないやうな反目と衝突とが續いたのだつた。(第十六章・一三一頁)

これは葉子が母との関係を回想する条である。「一番葉子の身近にゐた」母は葉子にとって「兩立し得ない仇敵」に当たる存在である。その母は「自分以上の法力を憎む魔女」のように「葉子の行く道に立ちはだかつた」とある。葉子の母は、当時の婦人解放運動の思想を持った基督教婦人同盟の副会長であった。葉子の家は、家父長的ではなく、母親が権威・権力を振るう母権的な制度下にあった。こういった家の有り様は、当時の一般的な家庭像とは乖離したものである。そしてその乖離は、葉子の母に起因するものであった。江種満子氏は、葉子の育てられ方について、「母の抱く女性の社会的地位向上の理想をそのままに、男の陰に控えることをモットーとする時代全体の習慣とは全く無縁に育てられた」[20]と論じている。母は

---

[19] 大石修平「『或る女』の形象組織」、(日本文学研究資料叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月、七三頁)

[20] 江種満子「愛/セクシュアリティ―『或る女』の場合―」(有島武郎研究叢書第六集、

同時代の女性達よりも先進的な思想を持ち、「新しい型にわが子を取入れる事を」心得ていたものの、それを取り扱う術は知らなかったとある。葉子の母は、娘が自分と同じように先進的な女性となることを期待していながら、しかし、その先進的な女性の扱い方については知らなかったのである。そのため、葉子の家庭は、いわば一つの家の中に先進的な女性が二人いるような状態となってしまい、葉子と母はライバル関係に駆り立てられていく。その有り様は「反目と衝突」という対立の様相を呈している。勝ち気で負けず嫌いの性格という似た者同士の母娘ゆえ、二人はお互いを思い合い、譲り合おうとはしなかった。そして、二人はついに和解できぬまま、母が死去することになる。

4.2　母の理解者としての葉子像

葉子は、生前の母親に対しては憎悪の感情を抱き続けていた。しかし、母の死去後は、愛着の感情を見せるようにもなる。

> 葉子の性格はこの暗闘のお陰で曲折の面白さと醜さとを加へた。然し何んと云つても母は母だつた。正面からは葉子のする事爲す事に批點を打ちながらも、心の底で一番よく葉子を理解してくれたに違ひないと思ふと、葉子は母に對して不思議ななつかしみを覺えるのだつた。母が死んでからは、葉子は全く孤獨である事を深く感じた。（第十六章・一三一頁）

母の死後、葉子は母に対する印象を変化させてゆく。母は葉子にとって一番の理解者として想起され、懐かしい存在として回想されてくる。そして、そのような母を喪失したことで葉子は深い孤独感に見舞われる。母は葉子のことを「魔女」だと考えていたが、母自身もまた「魔女」の一人ではなかったか。母と葉子

『有島武郎　愛/セクシュアリティ』、右文書院、一九九五年五月、一六頁）

は似た者同士であり、同じ価値観を共有しているがゆえに深い愛憎関係で結ばれていたとも言える。

> 若さから置いて行かれる……さうした淋しみが嫉妬に代わつてひしひしと葉子を襲つて來た。葉子はふと母の親佐を思つた。葉子が木部との戀に深入りして行つた時、それを見守つてゐた時の親佐を思つた。親佐のその心を思つた。（第三十五章・三二八頁）

これは、自分の求愛者であった岡と妹の愛子が恋愛関係にあるのかもしれないと疑う葉子の心理描写である。葉子は嫉妬の感情に襲われると同時に、かつて自分が木部と恋をした際、母親がどのような気持ちでいたかを理解する。葉子は愛子に嫉妬し、憎悪の感情を抱き始める。それはちょうど母が葉子に対して抱いた感情と同じものであった。母が死去した今になって、葉子は初めて母親の気持ちに気づき、生前の母がとった言動を理解するようになる。葉子が若くて美しい妹と向き合う時、彼女はなぜ母親が、以前自分に対して敵意を抱いていたのかを漸く理解できたのである。

葉子と母の二人の女性は、かつてライバルとして互いに憎悪の感情を持っていた。しかし、母の死去後、葉子の母に対する思いが変わっていく。実は自分を一番よく理解する人であった母を失い、喪失感に苛まれる。母を理解できなかったことについて後悔する。ライバルにして理解者という特殊な母娘関係をここに読み取っておきたい。

5. 妹たちに対する愛憎

5.1　愛子に対する〈憎悪〉

葉子には二人の妹がいる。上の妹は愛子という呼称で、下の妹は貞世という呼称である。両親の死後、妹たちの親代わりとして、葉子は世話をする。しかし、葉子は次第に妹の愛子に対して憎悪の感情を抱くようになる。

> 岡が何を云へば愛子は泣いたんだらう。愛子は何を泣いて岡に訴へてゐたのだらう。葉子が數へ切れぬ程經驗した幾多の戀の場面の中から、激情的な色々の光景がつぎつぎに頭の中に描かれるのだつた。もうさうした年齢が岡にも愛子にも來てゐるのだ。それに不思議はない。然しあれほど葉子にあこがれ溺れて、謂はゞ戀以上の戀とも云ふべきものを崇拜的に捧げてゐた岡が、あの純直な上品な而して極めて内氣な岡が、見る見る葉子の把持から離れて、人もあらうに愛子―妹の愛子の方に移つて行かうとしてゐるらしいのを見なければならないのは何んと云ふ事だらう。（第三十五章・三二五頁）

これは、かつて葉子に恋愛感情を持っていた岡という男が、今は葉子の妹である愛子にその恋愛感情が移っていることを、葉子が察知する条である。愛子は葉子と違い、男性の前に自分の弱点を示し、男に妥協する。このような愛子に、岡は次第に心惹かれていく。これは、葉子にとって屈辱的なことであり、葉子は愛子に嫉妬の感情を抱く。

> 愛子の涙―それは察する事が出來る。愛子は屹度涙ながらに葉子と倉地との間にこの頃募つて行く奔放な放埒な醜行を訴へたに違ひない。葉子の<u>愛子と貞世とに對する偏頗な愛憎</u>と、愛子の上に加へられる御殿女中風な壓迫とを歎いたに違ひない。（第三十五章・三二六頁）

葉子は、岡の移り気を非難していくのではなく、愛子を責める。葉子は、愛子が岡に、自分と倉地の「醜行」を告げ口したと邪推する。そればかりでなく、葉子が

愛子を憎み、貞世を可愛がることや、更には、葉子が愛子を圧迫していることなどを岡に訴えたのだろうと邪推している。ここで留意すべきは、愛子に対する葉子の嫉妬が、葉子の邪推の中で〈憎悪〉として捉え直されていく点である。葉子は愛子の若さに嫉妬しており、その嫉妬は、葉子が何に対してコンプレックスを抱いているかについて明らかにしてしまう。すなわち、葉子は自分が愛子のような若さを失いつつあるということを恐れているのである。この時点では愛子に恋愛感情を移したのは岡という男であるが、やがて岡と同じように倉地の気持ちも自分から愛子に移ってしまうのではないかという不安が葉子を襲っているとも言える。更に着目したいのが、傍線部にあるように、葉子には愛子と貞世という二人の妹がいて、愛子に対しては〈憎悪〉を抱いているが、貞世に対しては〈愛着〉を抱いていると書かれている点である。この貞世に対する〈愛着〉については後述するので、ここでは措くとして、愛子に対する〈憎悪〉の展開を、もう少し辿っておこう。

> 倉地と愛子とが話し續けてゐるやうな事はないか。あの不思議に心の裏を決して他人に見せた事のない愛子が、倉地を如何思つてゐるかそれは分からない。恐らくは倉地に對しては何の誘惑も感じてはゐないだらう。然し倉地はああ云ふしたたか者だ。 愛子は骨に徹する怨恨を葉子に對して抱いてゐる。その愛子が葉子に對して復讐の機会を見出したとこの晩思ひ定めなかつたと誰れが保證し得よう。そんな事は遠の昔に行われてしまつてゐるのかも知れない。若しさうなら、今頃は、このしめやかな夜を……太陽が消えて失くなつたやうな寒さと闇とが葉子の心に被ひかぶさつて來た。愛子一人位を指の間に握りつぶす事が出來ないと思つてゐるのか……見てゐるがいゝ。葉子は苛立ち切つて毒蛇のやうな殺氣立つた心になつた。（第四十三章・四〇二頁）

これは、倉地が妹の愛子と浮気しているのではないかと疑う葉子の心理描写である。葉子は、「心の裏を決して他人に見せ」ない愛子に対し、疑心暗鬼に駆られ

る。そして、葉子は愛子の心理を邪推し始める。葉子は、愛子が自分に対して怨恨を抱いているのではないかと妄想し、いずれ愛子は「復讐の機会を見出」し、倉地を奪うのではないかということを邪推する。その結果、葉子は「毒蛇のやうな殺氣立つた心」になってしまう。

> 愛子は確かに自分をあなどり出してゐると葉子は思はないではゐられなかつた。寄つてたかつて大きな詐僞の網を造つて、その中に自分を押しこめて、周圍から眺めながら面白さうに笑つてゐる。岡だらうが古藤だらうが何があてになるものか。……葉子は手傷を負つた猪のやうに一直線に荒れて行くより仕方がなくなつた。（略）葉子の愛子に對する憎惡は極點に達した。葉子は腹部の痛みも忘れて、寢床から跳り上がつた。而していきなり愛子のたぶさを摑もうとした。（第四十六章・四二九頁）

これは愛子に対する葉子の疑心暗鬼が高じて、ついに、葉子が愛子に憎悪の感情をぶつけるという条である。葉子は「猪のやうに一直線に」愛子に向かう。愛子が岡や古藤といった男たちと関係を結んでいるのではないかと疑い、しかし愛子が何の反応も示さないことに葉子は苛立ち、そして葉子の「憎悪」は極点に達した。

5.2　貞世に対する〈愛着〉

さて、葉子のもう一人の妹である貞世について見てみたい。

> 葉子は貞世の後姿を見るにつけてふとその時の自分を思ひ出した。妙な心の働きから、その時の葉子が貞世になつてそこに幻のやうに現はれたのではないかとさへ疑つた。これは葉子には始終ある癖だった。始めて起つた事が、如何しても何時かの過去にそのまゝ起つた事のやうに思はれてならない事がよ

くあった。貞世の姿は貞世ではなかつた。苔香園は苔香園ではなかつた。美人屋敷は美人屋敷ではなかつた。周圍だけが妙にもやもやして心の方だけが澄み切つた水のやうにはつきりしたその頭の中には、貞世のとも、幼い時の自分のとも區別のつかない果敢なさ悲しさがこみ上げるやうに湧いてゐた。（第四十章・三七九頁）

これは葉子が貞世の姿を見て、幼い時の自分の姿を幻視する場面である。貞世の中に自分を見出す葉子の幻視は「始終ある癖」とあり、両者の相似は反復継続的に確認されている。ここで参考になるのが生井知子の指摘[21]である。生井は、有島の女性像が十五歳という年齢を境にして〈聖なる少女／娼婦的誘惑者〉に分かれると指摘しており、示唆に富む。それに従えば、貞世ぐらいの年齢の子供はもともと何も知らない子供であり、〈聖なる少女〉という像を結ぶことになる。愛子は十六歳であり、葉子が男とのセクシャリティの関係を知った年齢を超え、〈娼婦的誘惑者〉に相当すると言えようか。

ここで顧みられてくるのが、葉子が愛子に対して若さというコンプレックスを抱いていたことである。若さという観点で言えば、貞世に対しても若さというコンプレックスを抱くはずである。しかし、貞世はこの時点（明治 35 年）で十四歳であり、彼女は男性たちの恋愛対象とはならない、いわば〈聖なる少女〉の位相に置かれているのである。それゆえ、葉子は〈少女〉としての貞世に嫉妬やコンプレックスというものを抱くことは無い。

結論

本稿では、石坂養平宛の書簡を手掛かりとして、葉子の男性観、及び母や妹とい

[21] 生井知子「有島武郎論―その女性像をめぐって―」（『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、一九九一年四月、三七頁）

った葉子の血縁にあたる女性たちに着目し、〈憎悪〉と〈愛着〉という両極に分裂していくアンビバレントな葉子の人物像について検討を加えてきた。

第二節では、葉子と無名な男性たちの恋愛様式を抽出し、その結果、無名な男性たちとの恋愛においては〈愛着〉などを持たず、〈憎悪〉の側面を見せていく葉子像を見出した。第三節では、木部、古藤、そして倉地という登場人物たちに対して、葉子がどのような〈憎悪／愛着〉を抱いているかについて分析した。具体的に言うと、木部との恋愛において、葉子は初めて心を許し、「純眞な愛着」を抱く。しかし、結婚後、木部の本性を目の当たりにして、結婚生活も破綻する。続く、古藤との恋愛では、〈憎悪〉に近似した性衝動を見せる葉子像を読み取った。彼女の恋愛遍歴は、葉子が主導権を握りながら相手の男を翻弄するという性質のものであった。一方、倉地との恋愛では、主導権を握られ、〈憎悪〉と〈愛着〉というアンビバレントな状態に置かれ、ディレンマに陥っていく葉子像を明らかにした。第四節では、葉子と母の関係について考察した。二人の女性はライバルとして互いに憎悪の感情を持っていた。だが、母が亡くなった後、葉子は自分の一番の理解者を失ったことを痛感する。このように葉子は〈愛憎〉という、相反する感情を母に対して抱いていることを見出した。第五節では、愛子に対して〈憎悪〉を抱き、貞世に対しては〈愛着〉を抱くというかたちで葉子と二人の妹の関係を分析した。葉子は愛子の若さに嫉妬し、自分のコンプレックスを露わにする。一方、貞世に対しては、溺愛する姿を見せている。葉子は貞世に自分の姿を投影しているのである。これは、間接的な自己愛とも言えそうである。

葉子は、〈憎悪〉と〈愛着〉という二つの相反する感情を、男性たちに対してだけではなく、母や妹といった肉親の女性たちに対しても抱く人物として造形されている。これが本稿で析出したアンビバレントな葉子像となる。有島が書簡で述べていた男性に対して「二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命」であるという女性観は、確かに葉子に投影していると言える。しかし、葉子の〈憎悪／愛着〉という感情の在りようは、肉親という限定が付いて

いるものの女性に対しても抱くものであった。つまり、葉子の〈憎悪／愛着〉という感情は対象人物毎に異なる様相を呈しており、有島の女性観が一律に適用されるものではないということを結論として述べておく。

第二章

『或る女』における「夢遊病者」としての葉子像

―「ヒステリー」を端緒として―

1. 問題提起／１例目の「夢遊病者」

有島武郎によって書かれた『或る女』は、当初『或る女のグリンプス』という題名で雑誌『白樺』に明治四十四年（1911）一月から連載され、その後、後半を書き足すかたちで前・後篇の仕立てとなり、前篇が大正八年（1919）三月二三日、後篇が同年六月一六日に、それぞれ『有島武郎著作集』第八輯と第九輯として叢文閣から刊行された[1]。主人公早月葉子は、婚約者木村をたずねてアメリカに渡航中、船の事務長の任にある倉地という男性と出会い、彼の野性的な魅力に惹かれ、恋愛に陥ってしまう。しかし、この恋愛は葉子を困難な状況へと追い込み、葉子の身体には婦人病という傷を負わせ、また、葉子の精神にはヒステリー症状という負荷をかけてゆく。その結果、最終的には身体も精神も破滅していく葉子が描かれるに至る。従来、このような破滅への道を歩む葉子に関しては、身体面よりも精神面の方に、より比重が置かれて論じられてきた。石井直志氏によれば、『或る女』は日本において女性のヒステリーを描いた最初の文学作品であるという[2]。因みに、このヒステリーをめぐっては、以下のように病理的な観点から論じられたり[3]、ジェンダーの観点から論じられたりしている。

病理的な観点から葉子のヒステリーを検討したものとして、例えば、川上美那子氏は、有島武郎が女性に固有の病理とされるヒステリー症に深入りするがあまり

---

[1] 安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）

[2] 石井直志は「夢イメージの世紀末　精神病理の世紀末　《ヒステリー》考―『ボヴァリー夫人』から『或る女』まで」（『國文學　解釈と教材の研究』、學燈社、一九九五年九月一一三頁）のなかで「十九世紀、おもにフランス自然主義の作家たちがヒステリーの女性を中心に作品を書き綴っていた第二帝政から世紀末にかけて、日本ではヒステリーを病む、鋭敏な感受性の女性を主人公とする小説は生まれていない。（略）有島武郎の『或る女』はこうして、十九世紀後半のフランスの文学者が開始した女性を主人公とする小説構成のメカニズムを、日本でおそらくはもっとも早く取り入れた作品だ」と指摘している。

[3] 先鞭を付けたのは本多秋五氏である。本多氏は「いかにもこの作品の後半には、病理学的加速度への興味に執しすぎた嫌いがある」と説いている（「有島武郎論」『「白樺」派の文学』新潮社、一九六〇年九月、二三五頁）。

に、葉子を「錯乱と狂気」の世界に連れ込んでしまったという解釈を提示している[4]。あるいは、小西由里氏は、「血の道の病」として考えられているヒステリーが、「遺伝や貧血、心身の衰弱、他の病気など」といった症状を伴う点に留意し、葉子のヒステリーの症状の一環として肉体面の病理である子宮の病が引き起こされているという解釈を提案している[5]。同様の論は朴美姪氏にもあり、ヒステリーは「婦人病（血の道）」であると共に精神の病でもあり、それは遺伝するとも考えられていた点に着目して、葉子のヒステリーも母からの遺伝であると説く[6]。

また、こういったヒステリーをジェンダーの観点から捉え直す試みも行われている。例えば、『或る女』に描かれたヒステリーは、葉子に対する有島の「倫理的規制」であるとする解釈[7]、明治時代では「女性固有の実体的な病」とみなされていたとする解釈[8]や、葉子がヒステリーになるのは「男の領分」／「女の領分」という境界を逸脱したためであり、行きづまるのは当然の帰結であるとする解釈[9]、あるいは、「性欲（肉の欲念）→《婦人病》→嫉妬→ヒステリー→狂気→死。葉子に典型化されたこの〈女という性〉の階梯」は「性医学の言説によって作られた連鎖のモデルをほぼなぞって」いることになるとする解釈[10]、などが提供されてきている。

ここに見てきた諸論は概ね、『或る女』が書かれた当時の社会において、ヒステ

---

[4] 川上美那子「『或る女』について（二）―後篇世界の意味」（日本文学研究叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、二一頁）

[5] 小西由里「『或る女』におけるヒステリー」（『近畿大学日本語・日本文学』第四巻、二〇〇二年三月、一二二頁）

[6] 朴美姪「有島武郎『或る女』におけるヒステリー：葉子の破滅を中心に読み直す」（『九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究』二一、二〇一七年一二月、四七頁）

[7] 江頭太助「『或る女』研究の視点―H・エリスの『性の心理学的研究』の影響―」（『有島武郎の研究』、朝文社、一九九二年六月、九六頁）。

[8] 山本芳明「ヒステリーの時代―『或る女』序説―」（『学習院大学文学部研究年報』第三六輯、一九九〇年三月、一一六頁）。

[9] 江種満子「愛／セクシュアリティ―『或る女』の場合―」（『《有島武郎研究叢書》第六集　有島武郎　愛／セクシュアリティ』右文書院、一九九五年五月、三一頁）

[10] 坪井秀人「『或る女』のマッド・シーン」（総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、八九頁、後に『性が語る』名古屋大学出版、二〇一二年二月に所収）

リーというものがどのように認識されていたかということを踏まえつつ、その社会通念上のヒステリー症状の理解と葉子の描かれ方とを照らし合わせていくというものであると言えよう。確かに、有島自身、十九世紀のフランス文学で流行したヒステリーに傾倒していたという背景もあり[11]、その実践として『或る女』の葉子の造形があるという見方は蓋然性が高いかもしれない[12]。しかし、留意しなければならないのは、ヒステリーとは実体的なものではなく[13]、更に言えば、時代的な状況に影響を受けたディスクールの一つでしかない[14]という指摘もある点である。本稿でも、そういった先行研究を踏まえ、所与の前提としてヒステリーを実体的に捉えるのではなく、今一度本文に立ち戻り、ヒステリーと称される現象がいかなる言葉によって形象されているかという表現の問題として検討していきたいと思う。試みに、ここではまず、『或る女』において初めて「ヒステリー」という語が現れる場面を見てみることにしよう。

「……私を見捨てるん……」

葉子はその聲をまざまざと聞いたと思つた時、眼が覺めたやうにふつと更めて港を見渡した。而して、何の感じも起さない中に、熟睡から一寸驚かされた赤兒が、又他愛なく眠りに落ちて行くやうに、再び夢とも現ともない心に歸つて行つた。港の景色は何時の間にか消えてしまつて、自分で自分の腕にしがみ附いた若者の姿が、まざまざと現はれ出た。葉子はそれを見ながら如何してこんな變な心持ちになるのだらう。血の故とでも云ふのだらうか。事によるとヒステリーに罹つてゐるのではないか知らんなどゝ呑氣に自分の身の上を考へ

[11] 小坂晋によれば、有島はエリス（Havelock Ellis）の著書『性の心理（Studies in psychology of sex)』(1910,3rd edition）の中の「ヒステリー研究」に関する章を読んでいたという（「有島文学の性心理学的分析」『文学・語学』第一九号、一九六一年七月、後に、『白樺派文学』日本文学研究資料叢書、有精堂出版、一九七四年八月に再録)。
[12] 石井直志氏、前掲注 2 論文
[13] 山本芳明氏、前掲注 8 論文
[14] 坪井秀人氏、前掲注 10 論文

てゐた。（十章・七三～七四頁）[15]

これは、葉子が婚約者のいる米国へ向かうために絵島丸という郵船に乗り込む場面の一節である。葉子が乗船する際、彼女は見知らぬ若者に絡まれてしまう。やがて郵船が動き出すと、葉子は若者の声を思い出し、目が覚めたようにふっと港を眺める。そして、彼女は再び「夢とも現ともない心」に帰って、若者の姿を思い浮かべる。葉子はしばらく、この「夢とも現ともない心」の境地をさ迷う。彼女はそのような自分を「ヒステリーに罹つてゐるのではないか」と疑うのである。これは、葉子に関して「ヒステリー」が用いられた最初の箇所である。ここで注意したいのは、葉子がヒステリーという症状をどのように捉えているのかということである。引用した本文における「港の景色」は現実のことであるが、「若者の姿」は葉子の幻想によるものである。彼女は現実と幻想を往還しているうちに「夢とも現ともない」状態に陥ってしまったと言える。つまり、葉子はヒステリーを「夢」と「現」という異なる二つの世界の混淆した状態として捉えているのである。

試みに「ヒステリー」の用例を調査してみると、全部で七例あり、すべてが葉子に関係している（章末の別表を参照）。それらは、①〈夢／現〉と関係する用例（№１、№３）、②純然たるヒステリー症の用例（№５、№６、№７）、③比喩表現としての用例（№２、№４）、の三種に大別することが可能である。このうち、№１は本稿で問題提起とした場面であり、№３はその時の事を回想する文脈での表出となる。どちらも「ヒステリーに罹つてゐるのではないか知らん」（№１）、「ヒステリーになつたのではないかと疑つた」（№３）と、疑問表現が付されている点に留意したい。なぜなら、№５の用例を見ると、「純然たるヒステリー症の女になつてゐた」とあって、ここではヒステリーから疑問表現が消え、その代わりに「純然たる」という形容が施されているからである。そして、この用例を境に葉子のヒステ

[15] 『或る女』の本文は、『有島武郎全集』第四巻（筑摩書房、一九七九年一一月）により、章数・頁数を記した。以下同様。なお、引用文中に施した傍線は引用者による。以下、本稿における引用文中の傍線はこれに同じ。

リーは、それ以前のものが疑似的なもの、それ以降のものが「純然たる」ヒステリーとして描写されていく。つまり、『或る女』に描かれたヒステリーには、疑似的なものと純然たるものとがあって、前者についてはヒステリーとは別の現象として捉え直す必要があるということになる[16]。それを本稿では、夢と現という観点から捉え直そうと考えている。具体的には、〈夢／現〉という二項関係をフレームとすることで、葉子のヒステリーというものが夢と現の混淆した状態であるということをまずは押さえておく。更に注目すべきは、先に引用した本文には次の叙述が連接しており、そこでは夢と現が混淆した葉子のことを「夢遊病者」と捉え直しているのである[17]。

> 葉子は夢遊病者のやうな眼付きをして、やゝ頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から棧橋に連れ出した船員の事がはつと思ひ出されて、今まで盲ひてゐたやうな眼に、まざまざとその大きな黒い顔が映つた。葉子はなほ夢みるやうな眼を見開いたまゝ、船員の濃い眉から黒い口鬚のあたりを見守つてゐた。船はもう可なり速力を早めて、霧のやうに降るともなく降る雨の中を走つてゐた。船側から吐き出される捨水の音がざあざあと聞え出したので、遠い幻想の國から一足飛びに取つて返した葉子は、夢では

---

[16] 但し、後者の「純然たるヒステリー」についても、それを引き起こす要因となっているのは子宮後屈症と子宮内膜炎の併発であり、果たして「純然たるヒステリー」というものが実体としてあるのかは不明である。なお、坪井秀人は、「医学的言説が倫理的・文学的に潤色され」た事例として「純然たるヒステリー」を捉えている（坪井秀人氏、前掲注 10 論文、七一頁）。

[17] 『或る女』の刊行された大正八年当時、「夢遊病」という事象は他の文芸作品でも取り上げられていた。例えば、夏目漱石の『明暗』（大正六年）には、「夢遊病者として昨夜彷徨った記憶」という叙述があり、江戸川乱歩には『夢遊病者彦太郎の死』（大正一四年七月『苦楽』に掲載）というタイトルを冠した作品がある。なお、宮本和歌子氏は、江戸川乱歩が『新青年』（大正一三年六月）に発表した「二廃人」に「夢遊病がどんなものか、ハツキリしたことは無論知りませんでしたが、夢中遊行、離魂病、夢中の犯罪などといふ熟語が気味悪く浮んで来るのです」という叙述に着目し、ここに挙げられた夢中遊行、離魂病、夢遊病は「自分の無自覚のうちに自分の意思にかかわらない様々な言動をする」という点で共通する事象であると説く（「江戸川乱歩『夢遊病者彦太郎の死』における一人二役関係」『京都大学國文學論叢』三九号、二〇一八年四月、一九頁）。

なく、まがひもなく眼の前に立つてゐる船員を見て、何んといふ事なしにぎょっと本當に驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイブのやうに葉子はまじまじと珍らしくもない筈の一人の男を見やつた。（十章・七四～七五頁）

これは『或る女』における一例目の「夢遊病者」の用例である。船が出港してしばらくの間、葉子は自分の体験したことが現実に起きた出来事として考えられなかったのであろうか、朦朧とした状態に陥っており、それが「ヒステリー」として捉えられたり、「夢遊病者」として捉えられたりしていることがわかる。

従来の研究では葉子をヒステリーの症状を持つ女性という観点から論じる傾向にあった。しかし、そのヒステリーの具体的な状態は夢と現の混淆であり、それはむしろ夢遊病者という規定の方が相応しいものであるとも言えよう。因みに、葉子を「夢遊病者」と表現する用例は作品中に三例認められ、葉子が一貫して夢遊病者と造形されている可能性も否定できない。但し、その三例はいずれも「夢遊病者のやうな（に）」という比況の用法として表出している点には注意を要する。葉子は、例えば「自分の無自覚のうちに自分の意思にかかわらない様々な言動をする」[18]といった社会通念上の夢遊病者の症状を呈するわけではない。睡眠状態に入ったり、意識を失ったりするわけではなく、自意識を持ちながらも夢と現の境目が徐々に不分明になるという状態に陥るのである。つまり、葉子は純然たる夢遊病者ではなく、それゆえに「夢遊病者のやうな」という比喩的な表現でその状態が形容されると論者は考えている[19]。それは有島武郎の言葉の固有性という問題とも関わってこよう。果たして有島が用いる言葉とは、社会通念上の言葉の意味との間でどのような乖離を見せているのか。本稿では以上のような問題意識のもとに、夢遊病者

---

[18] 宮本和歌子氏、前掲注 17 論文、一九頁

[19] なお、有島は他の作品でも「夢遊病者」という語を用いているが、そこでは、「彼れは夢遊病者のやうに人の間を押分けて歩いて行つた」（『カインの末裔』有島武郎全集、第三巻、筑摩書房、一一九頁）、「一人の青年が夢遊病者のやうに足もともしどろに歩いて來るのを見つけた」（『クラヽの出家』有島武郎全集、第三巻、筑摩書房、一三四頁）とあり、やはり「やうに」という語が下接していて比喩的な用法となっている。

に喩えられる葉子がどのように造形されているのかを分析していく。

2. 夢と現の混淆／２例目の「夢遊病者」

考察の端緒として、まずは『或る女』における「夢」の用例を俯瞰しておこう。『或る女』において「夢」の語は全部で七一例ある。そのうち、六四例が葉子と関係する用例となる（巻末の第二章付録資料を参照）。但し、これらは全てが葉子一人を対象としているわけではなく、葉子と他の人物を含めるかたちの用例もある。また、葉子以外の人物としては、葉子の妹である貞世に関するものが三例、愛子に関するものが一例、この二人に関するものが一例認められる。その他、木部に関するものが一例、街中の演説者に関するものが一例となる。本稿ではこれらの用例を分析するにあたり、葉子の足跡を指標にして、乗船前、乗船中、帰国後という三区分を便宜上用いることにする。なお、乗船前の部分における「夢」の用例は、「夢のやうに」「夢心地」「夢中」というもので、慣用句的に用いられており、葉子の造形に深く関与しているとは言えない。本節では、乗船中における葉子の「夢」に注目し、葉子の精神状態を探る手掛かりとする。

次に掲げるのは、絵島丸に乗船中の葉子を描いた場面である。

> 佇んだ所は風下になつてゐるが、頭の上では、檣から垂れ下つた索綱の類が風にしなつてうなりを立て、アリウシャ群島近い高緯度の空氣は、九月の末とは思はれぬ程寒く霜を含んでゐた。氣負ひに氣負つた葉子の肉體は然しさして寒いとは思はなかつた。寒いとしても寧ろ快い寒さだつた。もうどんどんと冷えて行く衣物の裏に、心臓のはげしい鼓動につれて、乳房が冷たく觸れたり離れたりするのが、なやましい氣分を誘ひ出したりした。それに佇んでゐるのに脚が爪先から段々に冷えて行つて、やがて膝から下は知覺を失ひ始めたので、氣分は妙に上ずつて來て、葉子の幼い時からの癖である夢とも現とも知れな

い音樂的な錯覺に陷つて行つた。（略）何の爲に夜寒を甲板に出て來たか葉子は忘れてゐた。夢遊病者のやうに葉子は驀地にこの不思議な世界に落ちこんで行つた。それでゐて、葉子の心の一部分はいたましい程醒めきつてゐた。葉子は燕のやうにその音樂的な夢幻界を翔け上り潛りぬけて樣々な事を考へてゐた。（十三章・一〇一～一〇二頁）

ある暗い夜、寒々とした郵船の甲板で葉子は一人佇み、海の呻きを聞いていた。葉子の知覚は次第に鈍くなり、寒さを「さして寒い」とは感じなくなる。しかし、そういった知覚に反して乳房が着衣に触れたり、離れたりする感覚は鋭くなってゆく。その結果、葉子は「なやましい氣分」に苛まれてしまう。冷気で爪先から膝下の知覚が麻痺していく一方、「なやましい氣分」は「妙に上ずつて來て」、葉子は幼い頃からの癖である「夢とも現とも知れない音樂的な錯覺」に陥る。すると、葉子の意識はいつの間にか不思議な世界へと入り込む。その意識の在りようを本文では「夢遊病者」という語で表している。

この場面に関して先行研究では専ら「音楽的な錯覺」をめぐって論議されてきた。例えば、江種満子氏はこの葉子の境地について、「聴覚的の、触覚的の、視覚的の、温度感覚的の諸々のイメージを喚起しながら、刻々に純粋に感官的な瞬間」へと辿り着くとし、「理性の退行→幻影（幻像）の揺曳」という状態に陥ると説く。更に、江種氏はこの幻想場面に、葉子の「新しく生まれ出ようとするナイーヴな自己と旧来のいかめしい自己とのたたかい」を見出している[20]。また、西垣勤氏は、江種氏の指摘した葉子の「たたかい」について「過去と現在のたたかい」、「挫折状況における過去とのたたかい」として読み直している[21]。高橋世織氏も、江種氏の分析に賛意を示しつつ、「葉子は外界からの刺激によって動かされる〈受動的な

[20] 江種満子「『或る女』論―「夢幻」と「屈辱」をめぐって」（日本文学研究叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月、二四頁）。
[21] 西垣勤「『或る女』論―前篇の構造について―」（『有島武郎』、有精堂、一九七一年六月、一一四頁）

存在〉で視覚行為をおこなっている」と指摘する[22]。江種氏の説く「感官的な瞬間」や、高橋氏の説く「〈受動的な存在〉での視覚行為」は、いずれも葉子の陥った「音樂的な錯覺」を「肉体の記憶の甦り」として把握しようとするものである[23]。

ここに挙げた諸論は〈過去／現在〉という時間的な観点で時空を捉えようとする試みであると言える。本稿で注目したいのは、葉子の「音樂的な錯覺」が「夢とも現とも知れない」状態として形容されている点である。この「夢とも現とも知れない」状態にある葉子のことを本文では「夢遊病者」と喩えている。この「夢遊病者」は『或る女』における二例目の用例となる[24]。なお、葉子の心の一部分は「いたましい程醒めきつてゐた」とあり、朦朧としていながらも覚醒しているという混淆した状態にある。つまり、「夢遊病者」という語が表す境地とは、過去の自分から新しい自分へと変化しつつある状態であり[25]、葉子にとっては夢とも現ともつかない状態として感じられている。この新しい自分とは、倉地との本当の恋愛に身を置く自分のことであろう。それを葉子は夢、すなわち「音樂的な夢幻界」として感じているのである。このように考えてくると、葉子にとって「夢」とは、恋愛によってもたらされたロマンチックな領域としてあることがわかる。それは音楽に包まれているような領域として感知されており、本文では「音樂的な夢幻界」と表現されている。葉子が陥った「音樂的な錯覺」は次の本文においても観察される。

> 葉子は今の境界が本當に現實の境界なのか、先刻不思議な音樂的の錯覺にひたつてゐた境界が夢幻の中の境界なのか、自分ながら少しも見界がつかない位ぼんやりしてゐた。而してあの荒唐な奇怪な心の adventure を却てまざまざとした現實の出來事でもあるかのやうに思ひなして、眼の前に見る酒に赤

---

[22] 高橋世織「乗り物のなかの葉子―＜しぐさ＞の解読」(『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、星雲社、一九八〇年一〇月、一二八頁)

[23] 「肉体の記憶の甦り」は江種氏による解釈であり、それを高橋氏も肯定して自説に取り込んでいる（江種満子氏、前掲注 20 論文、及び高橋世織氏、前掲注 22 論文)。

[24] 因みに、二例目の「夢遊病者」の用例は『或る女のグリンプス』の中に記されてはおらず、『或る女』の前編になって加筆されたものである。

[25] 前掲注 20、江種氏の論文。

らんだ事務長の顔は妙に蠱惑的な氣味の悪い幻像となつて葉子を脅かさうとした。（十三章・一〇四頁）

これは甲板で倉地と言葉を交わした際の、葉子の心境についての描写である。葉子は「今」の境界が「現實」の境界であるのか、それとも先ほど経験した「音樂的の錯覺」が「夢幻」の中の境界であるのかを図りかねている。しかし、葉子は先ほどの経験を「現實」の位相に思いなし、一方、今目の前にいる倉地を「蠱惑的な氣味の悪い幻像」と見なしている。ここに描かれているのは、現実と幻像とを取り違え、その取り違えた幻像に飲み込まれそうになっている葉子の姿なのだと言えよう。こうして見てくると、船に乗って以降の葉子は、夢と現の位相差が次第に無化され、現実と夢幻との間で倒錯する人物像として描かれていると捉えることができる。こういった葉子像の展開する区分が乗船中となっているのは象徴的である。米国へ渡航中の船というのは、日本の地を離れて米国の地へ着くまでの暫定的な時空としてあり、それは境界的な領域にあると言ってもよい。その境界的な領域にあっては、船の揺れとも相俟って様々な分節軸が揺れ始め、あるいは無化された状態に置かれてゆく。夢と現の分節もまた、そうだと言えよう。船という時空をこのように捉えてみたとき、葉子が乗船中に夢と現の位相が混淆した状態に陥るというのも、葉子が境界的な領域に身を置いているがゆえに起きた現象であると解しておきたい。

3. 凶夢を見る葉子

乗船中の葉子に関する「夢」の用例の中には、「凶夢」という用法も認められる[26]。ここではその凶夢の具体的な内容を分析し、更にはそういった夢を見るに至

[26] 『或る女』の中で「悪夢」は四例、「凶夢」は一例あり、その他に「恐ろしい夢」が一例ある。なお、「凶夢」の用例は「恐ろしい凶夢」という用法となる。

る葉子の深層心理にも触れていきたい。

> 倉地は暗闇の中で長い間まんじりともせず大きな眼を開いてゐたが、やがて、「おい惡黨」と小さな聲で呼びかけて見た。然し葉子の規則正しく樂しげな寢息は露ほども亂れなかつた。眞夜中に、恐ろしい夢を葉子は見た。よくは覺えてゐないが、葉子は殺してはいけない殺してはいけないと思ひながら人殺しをしたのだつた。一方の眼は尋常に眉の下にあるが、一方のは不思議にも眉の上にある、その男の額から黑血がどくどくと流れた。男は死んでも物凄くにやりにやりと笑ひ續けてゐた。その笑ひ聲が木村々々と聞えた。始めの中は聲が小さかつたが段々大きくなつて數も殖えて來た。その「木村々々」という數限りもない聲がうざうざと葉子を取捲き始めた。葉子は一心に手を振つてそこから遁れようとしたが手も足も動かなかつた。（二十一章・一九二頁）

これは、前編の末尾に見える葉子の夢を描いた場面である。葉子は結局、米国に上陸することなく日本へ帰国する。木村との婚約を破棄し、倉地と過ごす人生を選んだのである。そのような選択をした葉子は、木村に対する罪悪感から、凶夢にうなされる。彼女は夢の中で婚約者である木村を殺してしまう。葉子は木村を「殺してはいけない」と思いつつも、彼を殺してしまう。因みに、この凶夢は『或る女のグリンプス』においても描かれているが、凶夢の具体的な内容、即ち木村を殺してしまうという展開は無く、木村を殺すという条は『或る女』の前編だけに認められるものである。

従来、この葉子の夢には彼女の抑圧された深層心理が表れていると解されてきた。果たして、この凶夢に象徴される葉子の深層心理とはいかなるものであるのか。この点について、篠崎秀樹氏は「前編末尾に葉子の見る凶夢は、自ら破滅と感じる彼女の不吉な運命と同じ深みに現れた不幸な二元分裂の姿を具象化したものにほかならない」と指摘し、葉子が「死に至る恋愛を選んだことを意味している」

と解する[27]。また、外尾登志美氏も、「葉子の見た木村に関わる凶夢も、葉子の内部の世間的幸福への思いを象徴している」として、葉子が「世間的幸福」を殺す選択をしたと説く[28]。一方、川上美那子氏は「葉子の凶夢と不安は、女というものの存在様式そのものの呻きのように聞こえる」と論じる[29]。各氏の論じるところは、概ね、木村の象徴するものは“生きるための結婚”であるというところに集約されよう。そして、葉子は木村を殺すことでその選択肢を放棄し、“死に至る恋愛”を選んだということになる。

さて、以上のような先行研究を踏まえた上で、本稿で更に注目したいのは、これに先立つ場面で葉子が木村に呪詛の言葉を発していたという点である。

> 葉子には過去の凡て呪咀が木村の一身に集まつてゐるやうにも思ひなされた。母の虐げ、五十川女史の術數、近親の壓迫、社界の環視、女に對する男の窺覦、女の苟合などゝいふ葉子の敵を木村の一身におつかぶせて、それに女の心が企み出す殘虐な仕打ちのあらん限りを瀉ぎかけようとするのであつた。「あなたは丑の刻參りの藁人形」こんな事を如何かした拍子に面と向かつて木村に云つて、木村が怪訝な顔でその意味を酎みかねてゐるのを見ると、葉子は自分にも譯の分からない涙を眼に一杯溜めながらヒステリカルに笑ひ出すやうな事もあつた。木村を拂ひ捨てる事によつて、蛇が殻を拔出ると同じに、自分の凡ての過去を葬つてしまふ事が出來るやうにも思ひなして見た。（二十章・一七二～一七三頁）

米国への上陸を促す木村に対し、仮病を装う葉子は次第に彼を虐めてみたいと

---

[27] 篠崎秀樹「葉子の『運命』観―木村への執着」（『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、星雲社、一九八〇年一〇月、一八二頁）

[28] 外尾登志美「『或る女』前編の内部構造―内部衝動と世間的幸福との間の不安」（『有島武郎―「個性」から「社会」へ―』、右文書院、一九九七年四月、一四二頁）

[29] 川上美那子「『或る女』について（一）」（日本文学研究叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、一七頁）

いう欲求に駆られるようになる。やがてその欲求は、木村をスケープゴートに見立て、彼に葉子が人生を歩むうえで見舞われてきた災厄の一切を背負わせてみたいというものとなる。葉子が見舞われてきた災厄とは、具体的には「母の虐げ、五十川女史の術數、近親の壓迫、社界の環視、女に對する男の窺覦、女の苟合」などであり、それらは葉子がこれまで戦ってきたものとして括ることができる。したがってこの災厄は、本来は葉子が引き受けるべきものであり、木村が責任を負う筋合いのものではない。しかし、葉子は自らに降り掛かった災厄の全てを木村に転嫁し、彼を殺すことで葬り去ろうと夢想する。葉子が木村に発した「あなたは丑の刻參りの藁人形よ」という言葉は、あたかも自身の災厄を木村に背負わせるための呪詛として機能していると言える。そして、この時の葉子の呪詛が凶夢というかたちで投影されていると解しておきたい。凶夢の中で木村は殺されてもなお、片方の眼を逆さまにして「にやりにやりと笑い續け」る。その笑い声は「木村」の名を唱えつつ、葉子を取り囲み、彼女を苦しめていく。それはまるで逆さまになった木村の眼が葉子に呪詛返しをしているかのように映る。しかし、この光景が葉子の見た夢の中のものである以上、それは葉子の深層心理に他ならない。果たして葉子は何に苦しめられているのか。先行研究の説くところをまとめれば、それは“生きるための結婚”と“死に至る恋愛”の葛藤ということになる。ただ、木村をめぐる葉子の心境を顧みてみると、彼女は「惡黨」（二十一章・一九二頁）と「良心」（十九章・一七〇頁）との間で葛藤する姿を見せてもおり、留意されてくる。葉子は表面では倉地と結託して木村を騙していたが、そのような行為に対して心の底では罪悪感を覚えていた。

> 男の誇りも何も忘れ果て、捨て果てゝ、葉子の前に誓を立てゝゐる木村を、うまうま僞つてゐるのだと思ふと、葉子はさすがに針で突くやうな痛みを鋭く深く良心の一隅に感ぜずにはゐられなかつた。（十九章・一七〇頁）

葉子は木村を欺くことに対して良心の呵責を感じていたのである。凶夢に現われた木村の反転した眼が見つめていたものとは、その良心の呵責ではないのか。そのように考えてみたとき、異形の相貌をした木村を殺すという行為は、自分の良心を殺すということでもあることに気づかされる。葉子は自分の中に残っていた一抹の良心を自らの手で抹殺し、「惡黨」になるのである。

さて、このように見てきたとき、この凶夢が葉子にとって〈生きるための結婚／死に至る恋愛〉や〈良心／惡黨〉といった葛藤に苛まれつつ、決断を迫られる転換点となっていることが分かる。葉子の夢の変質をここに読み取っておきたい。かつて葉子の夢は恋愛によってもたらされるロマンチックなものとしてあった。しかし、本節で確認してきた通り、葉子の夢は呪詛や良心の抹殺を投影するものとして描かれている。それまではロマンチックな領域としてあった夢が、死という〈負〉の領域を抱え始めたのである。

4. 死への傾斜／３例目の「夢遊病者」

続いて、三例目の「夢遊病者」について見てみたい。この用例は、帰国後の葉子を描いた箇所に表出する。日本に帰国した葉子と倉地は同棲生活を始め、当初は良好な関係を保っていたものの、やがてその関係は悪化を辿ることになる。経済的にも二人の生活は困窮し始め、倉地はスパイ活動に手を汚すに至る。次に掲げるのは、その倉地のスパイ活動を知った葉子の心境である。

> 葉子は不思議なものを見せつけられたやうに茫然として潮干潟の泥を見、鱗雲で飾られた青空を仰いだ。昨夜の事が眞實ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が眞實なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが兩立しよう筈はない。……葉子は茫然としてなほ眼に這入つて來るものを眺め續けた。痲痺し切つたやうな葉子の感覺は段々恢復して來た。それと共に眩瞑を感ずる

程の頭痛を先づ覺えた。次で後腰部に鈍重な疼みがむくむくと頭を擡げるのを覺えた。肩は石のやうに凝つてゐた。足は氷のやうに冷えてゐた。昨夜の事は夢ではなかつたのだ……而して今見るこの景色も夢ではあり得ない……それは餘りに殘酷だ、殘酷だ。何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ。この景色の何處に自分は身を措く事が出來よう。葉子は痛切に自分が落ち込んで行つた深淵の深みを知つた。（三十三章・三〇二～三〇三頁）

葉子と倉地の生活は、不安定なものとなる。倉地には妻子がいて、葉子は愛人という待遇でしかなかった。倉地もまた、郵船会社を解雇され、生活の困窮からスパイ活動に身を委ねる。倉地からスパイ活動を告げられた翌朝、目覚めた葉子は、昨夜と変わらず自身を囲繞する風景を見て、「昨夜の事が眞實ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が眞實なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが兩立しよう筈はない」と自問自答している。この時の葉子は「眞實」と「夢」との間で二律背反の状態に陥っていると言える。倉地のスパイ活動は葉子にとって「殘酷」なショックであった。葉子はそれを受け入れることができずに眠りについたのであろう。しかし、目覚めた葉子は倉地のスパイ活動が夢の位相に置かれたものではなく、「眞實」の位相、即ち現実に起きた出来事であることを認識する。そして、葉子はこの現実から逃避しようにも、「この景色の何處に自分は身を措く事が出來よう」と、現実世界に自分の身の置き所が無くなってしまったという喪失感に見舞われるのである。留意すべきは、そういった葉子の心境が「何故昨夜を界にして、世の中は加留多を裏返したやうに變つてゐてはくれなかつたのだ」と記されている点である。つまり、ここに描かれているのは、夜の睡眠を境にして現実世界に居場所を失った葉子の姿なのである。そして、そのような葉子が反実仮想的に欲するのは現実を反転させた世界、すなわち夢となる。葉子にとって夢とは、現実逃避の為の場として要求されていると言える。このような葉子の在りようは次の叙述にも

うかがえる。

> 急に周圍には騒がしい下宿屋らしい雑音が聞え出した。葉子をうるさがらしたその黒い影は見る見る小さく遠ざかつて、電燈の周圍をきりきりと舞ひ始めた。よく見るとそれは大きな黒い夜蛾だつた。葉子は神がゝりが離れたやうにきょとんとなつて、不思議さうに居住まひを正して見た。何處までが眞實で、何處までが夢なんだらう……。（三十九章・三六五頁）

これは、倉地が先妻とよりを戻すのではないかと疑心暗鬼に駆られる葉子の姿である。ここでの葉子は「神がゝりが離れた」ような虚ろな状態にある。彼女は、倉地との関係が破綻に向かうかもしれないという実情を受け入れることができないでいる。このような実情が葉子の現実ということになろう。葉子はそのような現実から逃れるべく、「何處までが眞實で、何處までが夢なんだらう」と、〈眞實（＝現実）／夢〉という区分の無効化を試みてゆく。そうすることで、葉子は現実から夢の位相へと逃避しようとするのである。しかし、葉子にとって夢が逃避の場として機能することはない。なぜか。葉子が夢と現の間で混淆した状態、すなわち「夢遊病者」としてあるとき、実は彼女が向かうのは夢ではなく死だからである。

> 倉地が、死骸になつた葉子を見て歎かうが歎くまいが、その倉地さへ幻の影ではないか。雙鶴館の女將だと思つた人が、他人であつたやうに、他人だと思つたその人が、案外雙鶴館の女將であるかも知れないやうに、生きると云ふ事がそれ自身幻影でなくつて何んであらう。葉子は覺め切つたやうな、眠りほうけてゐるやうな意識の中でかう思つた。しんしんと底も知らず澄み透つた心が唯一つぎりぎりと死の方に働いて行つた。葉子の眼には一雫の涙も宿つてはゐなかつた。妙に冴えて落付き拂つた眸を靜かに働かして、部屋の中を靜かに見廻してゐたが、やがて夢遊病者のやうに立ち上がつて、戸棚の中から倉地の

寢具を引出して來て、それを部屋の眞中に敷いた。而して暫らくの間その上に靜かに坐つて眼を瞑つて見た。それから又立ち上つて全く無感情な顏付きをしながら、もう一度戸棚に行つて、倉地が始終身近かに備へてゐる短銃をあちこちと尋ね求めた。（三十九章・三六七頁）

これは、先に連接する場面であり、やはり倉地と先妻の復縁を疑う葉子の心境が描かれている。このような葉子の心境について、加藤幸子氏は、葉子が「激しい独占欲」に駆られていて、「倉地の妻子への嫉妬は妄想の域にまで達する」と指摘する[30]。実際に、倉地は先妻との復縁など考えてはおらず、その意味では葉子の嫉妬は妄想に他ならない。留意すべきは、そういった妄想を抱く葉子の心境が死へと傾斜していく点である。「覺め切つたやうな、眠りほうけてゐるやうな意識」の中で、倉地の存在を「幻の影」だと思い、更には「生きると云ふ事」自体も「幻影」だと考えた葉子の意識の向かう先は、「死の方」にある。また、葉子の行動に注目してみると、倉地の所有する「短銃」を探しているとあり、やはりその向かう先は「死の方」にある。こういった意識と行動をする葉子を本文では「夢遊病者」の語を用いて表現している。これは『或る女』における三例目の「夢遊病者」の用例となる。これもやはり覚醒と朦朧の混淆した意識を表していると解釈できるが、更に注目したいのは、そういった混淆した意識が死へと向かっていることである。つまり、「夢遊病者」に喩えられる葉子は、夢の世界に逃避するための場所を求めていくのではなく、死へと向かっているのである。

死へと傾斜していく葉子の姿は、やがて「夢遊病者」ではない状態でも観察されるようになる。

繪島丸の中で味ひ盡し嘗め盡した歡樂と陶醉との限りは、始めて世に生れ出

---

[30] 加藤幸子「女性作家による日本の文学史(11)有島はなぜ葉子を殺したか―『或る女』から読みとるもの」(『本の窓』第二五巻四号、二〇〇二年五月、四九頁)

た生甲斐をしみじみと感じた誇りがな暫らくは今の自分と結び付けていゝ過去の一つなのだらうか……日はかんかんと赤土の上に照りつけてゐた。油蟬の聲は御殿の池をめぐる鬱蒼たる木立ちの方から沁み入るやうに聞こてゐた。近い病室では輕病の患者が集つて、何かみだらゝしい雑談に笑ひ興じてゐる聲が聞えて來た。それは實際なのか夢なのか。それ等の凡ては腹立たしい事なのか、哀しい事なのか、笑ひ捨つべき事なのか、歎き恨まねばならぬ事なのか。……喜怒哀樂のどれか一つだけでは表はし得ない、不思議に交錯した感情が、葉子の眼から留度なく涙を誘ひ出した。あんな世界がこんな世界に變つてしまつた。さうだ貞世が生死の境に徨つてゐるのはまちがひやうのない事實だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出來事だ。（四十五章・四二四頁）

これは婦人病に侵された葉子が病室で自分の過去を思い出す条である。葉子は、かつて絵島丸の船中で倉地との恋愛において「歡樂と陶酔」を味わい尽くし、初めて「世に生まれた甲斐」を実感できたと回顧する。船上での生活は葉子にとって幸福の絶頂のようなものであった。しかし、そのような幸福は「今」の自分と結び付いている過去であろうかと疑問を呈していく。葉子はまた、病室で笑い興じている「輕病の患者」の声を聞き、この病院での生活が「實際なのか夢なのか」という混淆した思いにも駆られる。絵島丸の船中で倉地との恋愛に溺れていた自分と、この病室で「輕病の患者」の笑い声に苛まれている自分とを思い比べ、葉子は、「あんな世界がこんな世界に變つてしまつた」と慨歎する。ここでの「あんな世界」とは倉地との恋愛に溺れていた葉子の過去を指す。一方、「こんな世界」とは病魔に侵されて死に向かいつつある葉子の現在を指す。つまり、葉子は倉地との恋愛を過去の世界としつつ、その夢のような世界が現在は失われてしまったという喪失感に見舞われているのである。夢の世界に逃避できないという状況は依然として変わりがないが、留意すべきは葉子にとって現実が、もはやどこにも逃げ場を見出せないような次元のものに変質しているという点である。葉子は現在、婦人病に起因す

る病魔に侵されており、それは目を背けることのできない現実としてある。ここに描かれているのは、「夢遊病者」のような葉子ではなく、「婦人病」を患う葉子なのである。ここで、引用した本文の末尾にある「さうだ貞世が生死の境に徨つてゐるのはまちがひやうのない事實だ。自分の健康が衰へ果てたのも間違ひのない出來事だ」という一節に注目したい。葉子は衰え果てた自分の現状と生死の境を彷徨う妹貞世の病状とを引き比べ、いずれも「間違ひのない」事実／出来事として捉えている。これは、自分の置かれている現実を直視し、それが逃れようのないものであることを認識し、受け入れている姿に他あるまい。貞世と同じく、自分の身に死が迫りつつあるという現実と向き合うしか方途の無くなった葉子の姿をここに読み取っておく。

結論

『或る女』の葉子の精神の失調について、従来はヒステリー症と結びつけて論じられる傾向にあった。しかし、作品に表れた葉子の「ヒステリー」の初出場面を見てみると、そこでは夢と現の混淆した状態が描かれており、加えて、そういった状態に陥っている葉子のことを「夢遊病者」に喩えるかたちで描出してもいた。本稿ではこのような点に着目し、葉子の精神状態をヒステリー症と擦り合わせるのではなく、作品自体の表現としてある「夢遊病者」という切り口からその内実を具体化するべく論を展開してきた。また、考察を展開するにあたり、葉子の動線を指標にした。

乗船前、「夢」の用例は慣用句として用いられており、実体としての夢は作品に描かれていない。これは、この段階の葉子にとって夢の領域が必要ではなかったことを意味しよう。いわば葉子は現実世界の中だけに存在していたと言える。乗船中、葉子は倉地と出会ったことで夢を見ているかのような感覚にしばしば陥り、夢と現が混淆するようになってゆく。本稿ではこの現状を葉子の現実世界に夢の領

域が広がっていくことと解釈した。葉子にとって夢とは、恋愛によってもたらされたロマンチックな領域としてある。この段階の葉子は、「夢遊病者」（一例目、二例目）として規定されてゆく。このような葉子の夢に変質をもたらしたのが「凶夢」であった。葉子は現実的な生き方、すなわち木村との婚約を切り捨てたことで凶夢にうなされる。本稿ではこの現象を、夢の中に死のイメージをもたらす〈負〉の領域が侵蝕し始めたこととして解釈した。その結果、夢は現実逃避の時空として機能しなくなる。帰国後、倉地と共に歩む人生という夢の続きを期待した葉子であったが、彼女は現実と向き合わざるを得なくなる。こうあってほしいという想定と、そうではない現状、その二つが次第にずれてゆき、葉子は葛藤を抱えてゆく。そのような葉子に対して再び「夢遊病者」（三例目）という形容が施される。彼女は覚醒と朦朧の混淆した異常な精神状態と、そして病魔に侵された肉体とに追いつめられ、死を直視するしか術がなくなる。

以上のような考察を通じて、本稿では、『或る女』に表出する「夢遊病者」という語のイメージが、葉子の精神状態に即応して変化していることを明らかにしてきた。つまり、有島の用いる「夢遊病者」とは、社会通念上の「夢遊病者」をそのまま適用しているわけではなく、そこから乖離して、固有の意味を展開しているということになる。

【別表】『或る女』における「ヒステリー」の用例調査

No.	頁数	種類	備考
1	74	夢/現	疑問表現が付く（問題提起の本文）
2	243	比喩	比況の助動詞「やうに」が付く（泣く様子）
3	247	夢/現	疑問表現が付く（用例 1 の回想）
4	333	比喩	接尾辞「風な」が付く（泣く様子）
5	360	純然たるヒステリー症	疑問表現が付かない
6	410・16 行	ヒステリー	疑問表現が付かない（発作の様子）
7	410・19 行	ヒステリー	疑問表現が付かない（発作の様子）

※なお、上記の他に「ヒステリー」の派生語である「ヒステリック」は 3 例（142 頁、327 頁、420 頁）、「ヒステリカル」が 1 例（172 頁）あるが、それらは形容表現であり、比喩の種類に相当する。

第三章

『或る女』における葉子の「本能」

―「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島武郎の「本能」観との関連―

1. 問題提起

有島武郎は、『或る女』という作品で主人公の葉子を本能の赴くままに生きる女として描いていると言われている。例えば、大里恭三郎氏は、葉子が「本能のままに生きる激情型の人間」であると指摘する[1]。ここで言う「本能の赴くまま」というのは、自由奔放に生きるという意味であろう[2]。こういった意味で「本能」を捉えていくのは、いわば辞書通りの解釈であり[3]、おおむね妥当と言える。但し、葉子に関する「本能」の用例を見てみると、そういった「自由奔放に生きる」という意味からは乖離しているものもあり、注意を要する。ここで試みに、『或る女』の中で葉子に関して初めて「本能」という語が使われる箇所を見てみよう[4]。

> その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。(略)(母は)年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻掻くのを見ると、葉子の心に純粋な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽に他愛もなく酔ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ晴れしいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな

---

[1] 大里恭三郎「本主義者の破滅」(『「或る女」の世界』審美社、一九八七年、二月、七七頁)

[2] 石丸晶子氏は葉子について「幼いころから才はじけ、何ものにも囚われぬ奔放さをその性格の中に秘めて」いると捉えている(「本能的生活に賭ける―『或る女』の世界―」『世紀』一九七三年七月、四六頁)。試みに、「奔放」という語を『日本国語大辞典(第二版)』一二(小学館、二〇〇一年、一一月)で調べてみると、「常識や規範にとらわれないで、自分の思うままに振る舞うこと。また、そのさま。」とあり、これを適用すれば、葉子は「常識や規範」といった旧来の発想に従うのではなく、「自分の思うまま」すなわち、自身の感性やその時の衝動によって行動しているということになろう。

[3] 『日本国語大辞典(第二版)』(前掲注(2)に同じ)の「本能」の項目には、「一般に、生まれつきもっている性質・能力。多く、衝動的、感覚的なものをいう」という説明が記されている。

[4] 因みに、『或る女』の中で用いられた「本能」という語は全部で一八例有り、その内、男女の恋愛に関わる「本能」は一〇例で、葉子が主体となるものが九例、木村が主体となるものが一例となる。

日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。（二章・一三～一四頁）[5]

これは、葉子と木部という男性の恋愛の顚末を描いた場面である。従軍記者として名を博していた木部は、ある会食の席上、葉子と出会って一目惚れをし、二人は恋に落ちた。しかし、それを知った葉子の母親は、二人を引き裂こうとする。その母親の干渉に耐えかねて、木部は苦しむ。そして、そのように苦しむ木部を見た葉子の心には、男に対する「純粋な同情」と「無條件的な捨身な態度」が生まれ始める。ここに掲げられた葉子の男に対する心情や態度は、まるで男に奉仕する前時代的な女性像[6]そのものであり、決して「新しい女」とは言えない。

因みに、従来、葉子の造形をめぐって、果たして〈新しい女〉として描かれているのか、それとも、〈旧い〉女性像としての域を出ていないのではないかという二つの立場が提出されてきた。そのうち、葉子を「新しい女」と解する論は多い。例えば、葉子は「時代の『意図』と響き合っている」新しい女であるという解釈[7]や、当時の家父長制下の結婚に不向きな女性として読む解釈[8]、また、「男性中心主義の現実社会」を呪い、「男性中心の天皇制国家」に妥協しない女性であるという解釈[9]、「日本的な規範から外れる」新しい女であるという解釈[10]、あるいは、「自立的で革新的な『自己』と『生活』を求める時代的な女として読む解釈[11]、などが

---

[5] 『或る女』の本文は、『有島武郎全集』第四巻（筑摩書房、一九七九年一一月二〇日）により、章数・頁数を記した。なお、傍線は引用者による。以下同様。

[6] ここで言う「前時代的」とは、家父長制のもとに男性を優位に置き、女性はそれに従属する立場であることを是認するような意識のことを指す。

[7] 奥田浩司「「或る女のグリンプス」と坪内逍遥の「新しい女」―〈女〉の衝動性、無意識性をめぐって―」（『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月、二二頁）

[8] 中島礼子「『或る女』前史としての国木田独歩における女性像―「おとづれ」「第三者」「鎌倉夫人」と「或る女のグリンプス」をめぐって―」（『有島武郎研究』第八号、二〇〇五年三月、九～一一頁）

[9] 團野光晴「闘争としての快楽追求―「或る女」と大江健三郎の〈性的人間〉―」（『有島武郎研究』第九号、二〇〇六年三月、一五頁）

[10] 井上理恵「『或る女』上演を考える」（『有島武郎研究』第一二号、二〇〇九年九月、六頁）

[11] 日比嘉高「洋上の渡米花嫁―有島武郎「或る女のグリンプス」と日系アメリカ移民―」（『有島武郎研究』第一四号、二〇一一年六月、一一頁）

提出されてきている。それに対して、前時代的な「旧い」女性像の観点から葉子を検討したものとして、例えば、「家父長制と対決する戦士」としての葉子に「自己同化」して読むことができないという解釈[12]や、「女性の自立と自由」を求めた葉子の行為は、結局倉地との関係において「妻となり主婦となる家父長制的女性像」を次第に自ら身にまとうに他ならないという解釈[13]、などがある。

木部と交際する以前の葉子は、「自由らしく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てゝ行く事の出來る女の生活」（第六章・四二頁）こそが自分の本来の生き方であると考えていて、それを阻害するものについては「昔のまゝの女であらせようとするもの」（同頁）や、「古い良心」（同頁）と規定し、忌避していた。つまり、葉子は女性の自立を阻害するものについては時間軸の上で古い側に配置し、一方、男性に依存することなく自立して生きていく在り方を新しい側に置いていたのである。ところが、その葉子が木部との恋愛に際しては、男と並び立つのではなく、男に寄り添う心情や態度をとるようになっており、「新しい女」としての人物像は片鱗も無くなっている。つまり、ここには葉子の一つの転換点が窺えると言えよう。そして、有島武郎はこのような葉子の変貌を「女の本能」に目覚めたと表現しているのである。では、有島武郎のいう「本能」とはどのようなものなのだろうか。

ここで参考となるのが、有島武郎の「惜みなく愛は奪ふ」[14]という評論である。有島はこの評論の中で、「本能」という語を繰り返し使用しており、その用例数は管見によれば一四七例にのぼる。これほど多数の「本能」という語が使われているのは、有島がそれだけこの評論において「本能」を中心的な課題として扱っているということであろう。有島語彙としての「本能」を考察するにあたって同評論は看過できない文献であると言える。それゆえ、本稿ではまず、評論「惜みなく愛は奪

---

[12] 金井景子「女王の家政学―『或る女』と明治三十年代―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、四八頁）

[13] 中村三春「ジェンダーとレトリック―『或る女』というコンタクト―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、一〇三頁）

[14] 『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年一〇月、一二六頁～二一六頁

ふ」に展開された有島の「本能」観を把握し、それを踏まえつつ、作品『或る女』における「本能」の用例を分析する。そして、「本能」という語が葉子の人物造形にどのように関わっているかについて考察を展開する。

2. 評論「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島の「本能」観

初稿版「惜しみなく愛は奪ふ」は、大正六年（1917）六月一日発行の『新潮』第二六巻・第六号に発表された[15]。その後、同評論は大幅に増補され、大正九年(1920)六月五日刊行の『有島武郎著作集』第一一輯に「惜みなく愛は奪ふ」と改題されたうえで収録された[16]。なお、有島は大正七年（1918）一二月一〇日から大正八年（1919）二月二五日にかけて『或る女』の改稿に取り組んでおり[17]、両者の執筆時期は近接している。こういった点からも「惜みなく愛は奪ふ」と『或る女』の間に影響関係を想定することは可能であろう[18]。ここで、「惜みなく愛は奪ふ」の中で展開された論について概観しておこう。この評論は、端的に言えば、愛というものの本質を宗教的な自己犠牲ではなく、自己愛に求めようとしたものとなるが、それに付随して様々な思考が全二九章にわたって展開されている。

有島は、論を展開するにあたり、便宜上、人間の生活様式を三つに区分する。それらは、「習性的生活」、「智的生活」、「本能的生活」と名付けられている。「習性的生活」(habitual life）とは、「外界の刺戟をそのまま受け入れる生活」のことで、有島はそれを「石」に譬えている[19]。また、「智的生活」(Intellectual Life）と

---

[15] 佐々木靖章「解題」(『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年四月、五一九頁）

[16] 佐々木靖章「解題」(『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年一〇月、六六〇頁）

[17] 安川定男「解題」(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月、四五五頁）

[18] 亀井俊介「『本格小説』作家への道」(『世間に対して真剣勝負をし続けて―有島武郎』ミネルヴァ書房、二〇一三年一一月、一五二頁)、また、山田昭夫氏は、「惜みなく愛は奪ふ」を『或る女』の理論篇と位置づけている（「作品の展開」『有島武郎・姿勢と軌跡』右文書院、一九七九年七月、一〇三頁)。

[19] 「外界の刺戟をそのまま受け入れる生活を私は仮に習性的生活（habitual life）と呼ぶ。それは石の生活と同様の生活だ。石は外界の刺戟なしには永久に一所にあって、

は、「外界が個性に對して動きかけた時、個性はこれに對して意識的の反應をする」生活のことで、有島はそれを「反射の生活」とも呼んでいる[20]。そして、「本能的生活」(Impulsive Life) とは、「外界の刺戟によらず、自己必然の衝動」による生活のことで、有島はそれを「個性の緊張は私を拉して外界に突貫せしめる」と説明する[21]。従来、「惜みなく愛は奪ふ」に関わって「本能」が取り上げられる場合、専ら、この三つの生活区分に見える「本能的生活」が対象とされる傾向にあった[22]。但し、この「本能的生活」に関する叙述は、やや観念的であり、本稿で論議しようとしている男女の恋愛という局面にそのまま適用させるには、具体性を欠くとも言える。本稿で着目するのは、生活様式と関連する「本能」ではなく、男女の恋愛に関連する「本能」である。それがうかがえるのは、「惜みなく愛は奪ふ」の第二三章である。そこでは、有島が独自に「本能」という語を定義付けており、留意される。

> 男女の愛は本能の表現として純粋に近く且つ全體的なものである。同性間の愛にあつては本能は分裂して精神的（若し同性間に異性關係の假想が成立しなければ）といふ一方面にのみ表現される。親子の愛にしても、兄弟の愛にし

永い間の中にたゞ滅して行く。石の方から外界に対して動きかける場合は絶無だ。」(「惜みなく愛は奪ふ」一〇章、一五八頁)

[20] 「それを名けて私は智的生活（Intellectual Life）とする。この種の生活に於て、私の個性が始めて獨立の存在を明らかにして、外界との對立を成就する。それは反射の生活である。外界が個性に對して動きかけた時、個性はこれに對して意識的の反應をする。即ち經驗と反省とが私の生活の上に表れて來る。」(「惜みなく愛は奪ふ」一一章、一五九頁)

[21] 個性の緊張は私を拉して外界に突貫せしめる。外界が個性に向かつて働きかけない中に、個性が進んで外界に働きかける。即ち個性は外界の刺戟によらず、自己必然の衝動によって自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活（Impulsive Life）と仮称しよう。(「惜みなく愛は奪ふ」一二章、一六五頁)

[22] 例えば、石丸氏、前掲注２論文、宮野光男「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（二）―本文文関を中心にして（１）―」(『日本文学研究』第二四号、一九八八年一一月)、高原二郎「有島武郎の評論活動―『惜みなく愛は奪ふ』から「宣言一つ」へ―（有島武郎研究叢書第四集『有島武郎の評論』、右文書院、一九九六年六月、九～四一頁)、遠藤祐「『惜みなく愛は奪ふ』を読む」（有島武郎研究叢書『有島武郎の評論』、右文書院、一九九六年一〇月、一〇九～一二九頁)、などがある。

ても皆等しい。然し男女の愛に於て、本能は甫めてその全體的な面目を現して來る。愛する男女のみが眞實なる生命を創造する。だから生殖の事は全然本能の全要求によつてのみ遂げられなければならぬのだ。これが男女關係の純一無上の要件である。（二三章・二一〇頁）[23]

これによれば、有島武郎は人間の「本能」を「精神的」なものと、そして「生殖の事」を含んだ「全體的」なものとに分けて考えていることがわかる。これを単純化して説明すれば、「精神的」なものとは同性間の愛におけるもので、それは親子の愛とか兄弟の愛と同様の次元における愛ということになる。これらの愛は、あくまでも精神的なものに限定されており、「生殖の事」、つまり肉体的なものを含んではいない。これに対して、「全體的」なものとは男女間の愛におけるもので、それは精神的なものに加えて、「生殖の事」、つまり肉体的なものを含んでいるということになる。有島は、このような愛の各局面を「本能」という言葉を用いて説明しているのである。同性間にあっては、「本能」は分裂して、精神的という一方面にしか表現されていない。しかし、男女間において、「本能」は初めて精神的と肉体的という「全體的な面目」を現して来る。すなわち、精神的な本能は性差と無関係で、男女を問わずに成立する。一方、肉体的な本能は、男女の「愛」でしか成立しないのである。言い換えれば、男女の「愛」における「本能」とは霊肉一致の状態を求めるものとしてあるということになる[24]。これは有島にとって「男女關係の純一無上の要件」であり、一番理想的な姿である。有島武郎の説く「本能」は、精神と肉体という二つの要素の関係によって説明される概念であることが分かる。

---

[23] 「惜みなく愛は奪ふ」の本文は注８書により、章数・頁数を記した。

[24] 有島が「恋愛の極致は霊肉一致である」という考えを持っていることは、「読売新聞」（大正一二年四月二三日）に掲載された「貞操観念を解放せよ」に見える（山田昭夫・内田満『近代文学資料８　有島武郎（上）』桜楓社、一九七五年一月、一一一頁）。なお、霊肉一致論については、小坂晋「有島文学の性心理学的分析」（『文学・語学』、一九六一年三月、六三頁）に詳しい。また、奥田浩司氏は有島武郎の恋愛観について、「霊肉一致、恋愛至上主義」であると指摘する（「恋愛観」『有島武郎事典』有島武郎研究会編、二〇一〇年一二月、五四頁）。

以上に見てきたような有島の「本能」観は、果たして彼の小説『或る女』にどのような影響を及ぼしているのだろうか。具体的には、葉子と木部、そして葉子と倉地のそれぞれの恋愛の局面における「本能」を分析対象とし、それらが有島の考える「本能」観とどのような関係にあるかを考察する。

3. 木部との関係における「本能」

ここではまず、葉子と木部の恋愛の局面における「本能」を見てみることにする。その用例は、本稿の問題提起において取り上げた箇所であり、ここに再掲する。

> その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に対して兼ねてからある事では一種の敵意を持つてさえいるように見える母が、この事件に対して嫉妬とも思われる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云うべき境を通り越していた。世故に慣れ切つて、落付き拂つた中年の婦人が、心の底の動揺に刺戟されてたくらみ出すと見える殘虐な謀計は、年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。それを拂ひかねて木部が命限りに藻掻くのを見ると、葉子の心に純粹な同情と、男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽に他愛もなく醉ひ始めた。葉子はこんな眼もくらむやうな晴れ晴れしいものを見た事がなかつた。女の本能が生れて始めて芽をふき始めた。而して解剖刀のやうな日頃の批判力は鉛のやうに鈍つてしまつた。（二章・一三～一四頁）

先にも述べたように、これは作中における「本能」の初出場面であり、葉子と木部の恋愛が結婚というかたちに移行する直前の場面となる。ここで、木部との馴れ初めを振り返っておこう。二人が初めて出会ったのは、ある新聞社の従軍記者を慰労する会食の席上であった。この会食は、基督教婦人同盟の副会長をしていた葉子

の母が自宅で催したもので、その折に従軍記者として出席していた木部が葉子を目に留めたのである。この木部の一目惚れによって、二人は恋に落ちた。しかし、二人の恋愛は、他ならぬ葉子の母から妨害を受けることになる。母は、「嫉妬とも思われる程嚴重な故障」を持ち出し、二人の仲を引き裂こうとしたのである。木部は葉子を必死に守った。木部は「命限りに藻掻く」ように自分を犠牲にしてまで葉子を守ったのである。この時、葉子の心には「男に對する無條件的な捨身な態度が生れ始めた」とある。自分を犠牲にしてまで相手を守るという行為は、換言すれば、無償の愛であろう。あたかも葉子は、その木部の無償の愛に呼応するかのように自分の心の中に「無條件的な捨身な態度」を生成するのである。そして、作者有島は、そういった葉子の無償の愛の生成を「本能」として規定するのである。つまり、木部との恋愛によって芽生えた「本能」とは、木部に対する無償の愛という精神的なものだと言えよう。

> 木部はすぐ葉山に小さな隱れ家のやうな家を見付け出して、二人は睦まじくそこに移り住む事になつた。葉子の戀は然しながらそろそろと冷え始めるのに二週間以上を要しなかつた。（略）葉子を確實に占領したといふ意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱點を露骨に現はし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。（略）結婚前までは葉子の方から迫つて見たにも係らず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だつた彼れであったのに、思ひもかけぬ貪婪な陋劣な情慾の持主で、而もその慾求を貧弱な體質で表はさうとするのに出喰はすと、葉子は今まで自分でも氣が附かずにゐた自分を鏡で見せつけられたやうな不快を感ぜずにはゐられなかつた。夕食を濟ますと葉子はいつでも不満と失望とでいらいらしながら夜を迎へねばならなかつた。（二章・一四～一五頁）

これは葉子と木部が同棲を初めてから二週間も経たない頃の、葉子の心境描写である。ここでの葉子は一転して木部に失望し、結婚生活も不満を抱えたものとなっていく。この葉子の認識の転換については第一章でも論じたところであるが、本章で問題としている葉子の「本能」の〈精神／肉体〉の転換とも関わるため、その失望や不満がいかなるものであるかを再確認しておきたい。留意すべきは、木部に対する葉子の認識の変化である。結婚する前の葉子は、木部に対して「崇高と見えるまでに極端な潔癖屋」という認識を持っていた。これは、性的な関係を結ぶことに消極的な木部の態度を述べたもので、それを「崇高」と表現しているように、ここには葉子の肯定的な認識をうかがうことができる。ところが、結婚後の葉子は、木部に対して「取り所のない平凡な氣の弱い精力の足りない男」という認識を抱くようになる。これは、やはり同じく性に対する木部の態度を述べたものとなるが、ここではその表現が葉子の否定的な認識をかたどるものへと転換されている。木部に対する葉子の失望には、葉子の肉体的欲求という本能の不満があると推測される。また、結婚後の木部は葉子に「女々しい弱點」を露骨に現し始めたともあるが、この「女々しい弱點」とは、葉子にとって「貪婪な陋劣な情慾の持主で、而もその慾求を貧弱な體質で表はさうとする」ことであった。これも、木部の肉体的な魅力の欠落だと言える。つまり、葉子は木部との結婚生活において肉体的な面での欲求不満を募らせていくのである。

> 葉子と木部との間柄はこんな他愛もない場面を區切にしてはかなくも破れてしまつた。木部はあらんかぎりの手段を用ひて、なだめたり、すかしたり、強迫までして見たが凡ては全く無益だつた。一旦木部から離れた葉子の心は、何者も觸れた事のない處女のそれのやうにさへ見えた。（二章・一五頁）

これは葉子が木部と結婚して間もない頃に、早くも二人の関係が破綻してしまうという場面である。破綻の兆しを感じ取った木部は葉子をなだめすかしたり、脅

したり、あらゆる手段を尽くして関係の修復に努めた。しかし、葉子は木部のことには何の関心も示さなかったのである。一度、木部から離れてしまった葉子の心は、「何者も觸れた事のない處女」のようにさえ見えたとある。木部との恋愛において、葉子は当初、「純粹な同情」心を抱き、「男に對する無條件的な捨身な態度」を示していた。それを有島は「女の本能」とも称し、綴っていくのであるが、その本能を喚起したのは極めて精神的なものであったと言えよう。しかし、結婚生活を続けるや否や、葉子の中では肉体的な欲求不満が溜まっていく。そして、その欲求不満が主たる要因となって、木部との結婚生活が破綻していくのである。

4. 倉地との関係における「本能」～肉体的な側面を求める葉子～

木部との恋愛・結婚生活において肉体的な欲求の不満を抱いた葉子であったが、その後に出会う男性に対しては、いかなる本能的欲求を抱いていくのか。本節では、葉子が渡米する船中で出会った倉地という男性との恋愛模様について、とりわけその初期段階における「本能」の表出を分析対象とし、その内実として肉体的な側面を求めていく葉子像が見出されてくることを論じる。

> 「隋分長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」と云つてその船員は右手を延べて居留地の鼻を指した。がつしりした肩をゆすつて、勢よく水平に延ばしたその腕からは、強く烈しく海上に生きる男の力が迸つた。葉子は默つたまゝ輕くうなづいた、胸の下の所に不思議な肉體的な衝動をかすかに感じながら。（十章・七五頁）

これは、葉子が渡米のために乗船した絵島丸で、初めて倉地と言葉を交わす場面である。印象的なのは、倉地の肉体に関する描写である。「がつしりした肩」、「勢よく水平に延ばしたその腕」と続き、その「腕」からは「強く烈しく海上に生きる

男の力が逆つた」とある。これらの語りは、そのまま葉子の視線を表していよう。そして、倉地の肉体に目を注いだ葉子は、「胸の下の所に不思議な肉體的な衝動」を感じる。木部との恋愛・結婚生活と違い、葉子の倉地に対する感情は、倉地の逞しい肉体に呼応するかのような「肉體的な衝動」として始まるのである。

> 葉子は兎に角恐ろしい崖の際まで來てしまつた事を、而して殆ど無反省で、本能に引ずられるやうにして、その中に飛び込んだ事を思はない譯には行かなかつた。親類縁者に促されて、心にもない渡米を餘儀なくされた時に自分で選んだ道―兎も角木村と一緒にならう。而して生まれ代わつた積りで米國の社界に這入りこんで、自分が見付けあぐねてゐた自分といふものを、探り出して見よう。（一六章・一二九頁）

これは、米国へ向かう船中で葉子が倉地と肉体的な関係を結んだことについて内省する叙述である。留意すべきは、葉子が自分の境地を「崖の際」だと見ている点である。葉子は、両親がなくなって以降、一家の生活を担う責任を負ってきた。しかし、一家は経済的な困窮に見舞われ、立ち行かなくなる。その打開策として葉子が選んだのが、木村との結婚であった。木村という男は、米国に在住し、彼の地で実業家として活躍している人物である。葉子はその木村と婚約し、木村に縋ることで困窮した生活から抜け出そうとしたのである。但し、その選択は葉子が率先して選んだものではなく、親類縁者に促されて余儀なくされた選択であった。葉子の考えでは、生まれ変わったつもりで木村と結婚し、米国に自分の拠って立つ場所を見つけようとさえ思っているとある。全ては安住を求めての渡米の旅であったはずなのに、葉子は今、「崖の際」に立たされている。それは偏に倉地と肉体的な関係を持ってしまったことによる。そして葉子は、その「崖」から「本能に引ずられるやうにして」飛び込んでしまうのである。いったいどこへ、葉子は飛び込んだというのか。実はこの「崖の際」という語は、再度、同じく第一六章の本文に表れて

くる。

然し葉子はとうとう今朝の出來事に打突かつてしまつた。葉子は恐ろしい崖の際から目茶苦茶に飛び込んでしまつた。葉子の眼の前で今まで住んでゐた世界はがらつと變つてしまつた。木村がどうした。米國がどうした。養つて行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲ひ續けてゐた不安はどうした。人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつてゐた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。（一六章・一三三頁）

葉子が「崖の際」から飛び込んだ先とは、倉地との愛に溺れる蜜のような世界であった。そして、ここに先の引用文を照らし合わせれば、そういった世界に引きずり込んだものこそ、葉子の「本能」ということになる。つまり、葉子は木村との結婚生活という安定や、米国での生まれ変わった自分という未来を放棄して、肉体的な衝動に基づく倉地との愛欲に身を投じたのである。そして、そういった葉子の選択を、有島は「本能」という語で表現しているということになる。

こんな夢のやうな樂しさが他愛もなく一週間程は何んの故障も牽き起さずに續いた。歡樂に耽溺し易い、從つて何時でも現在を一番樂しく過ごすのを生まれながら本能としてゐる葉子は、こんな有頂天な境界から一歩でも踏み出す事を極端に憎んだ。（略）倉地も葉子に讓らない程の執着を以て葉子が捧げる杯から歡樂を飲み飽きようとするらしかつた。不休の活動を命としてゐるやうな倉地ではあつたけれども、この家に移つて來てから、家を明けるやうな事は一度もなかつた。それは倉地自身が告白するやうに破天荒な事だつたらしい。二人は、初めて戀を知つた少年少女が世間も義理も忘れ果てゝ、生命さへ忘れ果てゝ肉體を破つてまでも魂を一つに溶かし度いとあせる、それと同じ

熱情を捧げ合つて互々を樂しんだ。（二八章・二五二～二五三頁）

これは帰国後の葉子と倉地が苔香園という隠れ家で、一週間ほど二人きりの生活を送るという条である。「現在を一番樂しく過ごす」ことを生来の「本能」としている葉子にとって、倉地と一緒に暮らすことはまさに「有頂天な境界」にいる感覚であった。果たして葉子の「本能」にとって「有頂天な境界」とはいかなる境地であるのか。後続する文脈を参照してみると、倉地と葉子の生活の様子が描かれており、そこには、二人が「初めて戀を知つた少年少女」のように全てを忘れて「肉體を破つてまでも魂を一つ」に溶かしたいと焦り、「互々を樂しんだ」とある。二人は肉欲の歓楽に溺れる日々を送り、その耽溺する生活から「一歩でも踏み出す事」ができず、「現在」に留まり続けた。倉地との閉じられた隠れ家での生活において葉子が覚えた歓楽とは、肉体的なものであったに違いあるまい。その肉体的な歓楽に耽溺するなかで、ついにはその肉体さえも破って魂の一体化を希求する境地にまで辿り着く二人であったが、しかしそれは現実的には叶うものではなく、二人は焦る。その結果、二人は肉体的な次元での一体化を互いに楽しむほかはない。これが、葉子の「本能」が求めた境地ということになる。

5. 倉地との関係における「本能」～「女の本能」に領導される葉子～

倉地との恋愛関係を続ける葉子に転機が訪れる。この転機が「本能」とどのような関係にあるか、そして葉子の造形にどのように関わっているのかについて以下に見ていきたい。

兎も角も一家の主となり、妹達を呼び迎へて、その教育に興味と責任とを持ち始めた葉子は、自然々々に妻らしく又母らしい本能に立歸つて、倉地に對する

情念にも何處か肉から精神に移らうとする傾きが出來て來るのを感じた。それは樂しい無事とも考へれば考へられぬ事はなかつた。（三四章・三〇三頁）

これは葉子の倉地に対する感情が変化しつつあることを記した条である。葉子は、妹たちと一緒に暮らすようになり、次第に妹たちの教育について興味と責任を持つようになってきていた。そのような葉子の在りようは、「妻らしく又母らしい本能」に立ちかえった姿として描かれている。このうち、「母らしい本能」とあるのは妹たちに対する葉子の姿勢であることは文脈からも明らかである。因みに、葉子は最初の結婚相手である木部との間に定子という娘を儲けており、葉子は実際に母親という立場でもあるが、ここでは、愛子や貞世といった妹たちの母親代わりとしての葉子が焦点化していると捉えておく。直後に「立歸つて」とある点を考慮すれば、両親の死去後、葉子が妹たちの母代わりとなって面倒を見ることになったという渡米前の当初の立場に戻ってと解釈するのが妥当であろう。しかし、そういった葉子は、渡米中、専ら倉地との愛欲に溺れてしまっていたのであった。では、「妻らしく」とある点についてはどうか。ここで注目したいのは、葉子の倉地に対する「情念」が「肉から精神に移ろうとする傾き」を見せてきているとある点である。葉子と倉地が初めて出会った時のことを改めて思い起こしたい。当初、葉子は倉地の肉体的な魅力に惹かれ、そして、倉地と肉体的な関係を結んだことで、男女の恋愛において肉体的なつながりを優位に置く葉子像が描出されていた。しかし今、葉子の「本能」はそういった「肉」欲的なものから「精神」的なものへと移行しつつある。これは葉子の「本能」の転換点だと言えよう。顧みれば、葉子は木部との恋愛関係においても「女の本能」が芽生えるというかたちで精神的な側面での愛情の発露を見せており、それも一つの転換点と言えよう。果たしてこのような転換を葉子に促したものとは何か。それを考えるうえで参考になるのが次の叙述である。

歡樂ももう歡樂自身の歡樂は持たなくなつた。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴ふやうになつた。或時にはそれを思ふ事すらが失望だつた。それでも葉子は凡ての不自然な方法によつて、今は振り返つて見る過去にばかり眺められる歡樂の絶頂を幻影としてゞも現在に描かうとした。而して倉地を自分の力の支配の下に繋がうとした。健康が衰へて行けば行く程この焦燥の爲めに葉子の心は休まなかつた。全盛期を過ぎた伎藝の女にのみ見られるやうな、傷ましく廢頽した、腐菌の燐光を思はせる凄惨な蠱惑力を僅かな力として葉子は何所までも倉地を擄にしようとあせりにあせつた。然しそれは葉子の傷ましい自覺だつた。美と健康との凡てを備へてゐた葉子には今の自分がさう自覺されたのだけれども、始めて葉子を見る第三者は、物凄い程冴え切つて見える女盛りの葉子の惑力に、日本には見られないやうなコケットの典型を見出したらう。おまけに葉子は肉體の不足を極端に人目を牽く衣服で補ふやうになつてゐた。（三六章・三三〇～三三一頁）

ここには、葉子の体に病理的な異変が起き始めていることが記されている[25]。「歡樂」とあるのは、倉地との性行為を指す。葉子はその「歡樂」の後には必ず「病理的な苦痛」を伴うようになっていた。後にこの苦痛の原因は子宮の病[26]であることが判明するが、まだこの段階では明らかになっておらず、葉子の不安は様々なかたちで表されてゆく。焦燥感に襲われる葉子は、「全盛期を過ぎた伎藝の女」のように蠱惑力で倉地を繋ぎとめようとしている。「肉體の不足」を自覚する葉子は、人目を牽く衣服で自分の欠落した部分を補おうとする。その様子は、「コケットの典型」とさえ見られたとある。かつては倉地の肉体的な面を欲求した葉子であった

[25] 葉子の体の変調は前編から散見されるが、恒常的に病身となるのは明治三五年以降のこととなる。第三一章には「航海の初期に於ける非點の打ち處のないやうな健康の意識はその後葉子にはもう歸つて來なかつた。寒氣が募るにつれて下腹部が鈍痛を覺えるばかりでなく、腰の後ろの方に冷たい石でも釣り下げてあるやうな、重苦しい氣分を感ずるやうになつた。」（二八一頁）という叙述が確認される。

[26] 第三八章に、「醫師は手もなく、葉子の凡ての惱みの原因は子宮後屈症と子宮内膜炎とを併發してゐるからだと云つて聞かせた。」（三五六頁）という叙述がある。

が、今や彼女は子宮を病んでおり、それゆえに肉体的な面での欲求も満たすことができなくなってしまったのである。以上に見てきたような葉子の身体面の変化が、葉子の「本能」の比重を「肉から精神」へと移行させたと解しておきたい。しかし、そういった移行が意識のうえで行われたにもかかわらず、葉子は倉地との肉体的な関係を続けていく。

> 葉子も自分の健康が段々惡い方に向いて行くのを意識しないではゐられなくなつた。倉地の心が荒めば荒む程葉子に對して要求するものは燃え爛れる情熱の肉體だつたが、葉子も亦知らず識らず自分をそれに適應させ、且つは自分が倉地から同様な狂暴な愛撫を受けたい欲念から、先きの事も後の事も考へずに、現在の可能の凡てを盡して倉地の要求に應じて行つた。脳も心臓も振り廻はして、ゆすぶつて、敲きつけて、一氣に猛火であぶり立てるやうな激情、魂ばかりになつたやうな、肉ばかりになつたやうな極端な神經の混亂、而してその後に續く死滅と同然の倦怠疲勞。（三五章・三一九頁）

ここに描かれているのは倉地の肉体的な要求に応えようとする葉子の姿である。子宮の病に侵されつつある葉子は、次第に体調が悪化していくことを感じながらも、「先きの事も後の事も」考えずに倉地の「燃え爛れる情熱の肉體」的な要求に応じてしまう。倉地の要求に応じている最中の葉子は、「魂ばかりになつた」ような、「肉ばかりになつた」ような感覚に見舞われる。「魂ばかりになつた」とあるのは倉地との精神的なつながりを求める葉子の「本能」であり、一方、「肉ばかりになつた」とあるのは肉体的なつながりを求める葉子の「本能」であると解釈すれば、あたかもそれは「本能」が求める精神と肉体の両面における充足を表現しているかのようでもある。しかし、それは刹那的な錯覚に過ぎないことが「神經の混亂」という語に表されてもいる。その結果、葉子は「死滅と同然の倦怠疲勞」に陥ってしまうのである。本来であれば、子宮の病に侵された葉子は自分の身体を優先し、

倉地の強引な要求を断るべきところである。それが生物としての自己保存本能であろう。しかし、葉子は自分の身体を犠牲にしてまで倉地の要求に応えることを優先してしまうのである。先に見た通り、葉子は意識のうえで「肉から精神に移らうとする傾き」を見せていたはずである。その葉子が、なぜ苦痛を覚えながらも倉地との肉体的な関係を続けていくのか。この不可解な葉子の行動原理を考えるうえで参考となるのが有島武郎の残した書簡である。

> 何物も男性から奪はれた女性は男性に對してその存在を認めらるゝ爲めに女性の唯一の寶なる貞操を賣らねばなりませんでした。生殖に必要である以上の姪欲の誘引を以て男性を自分に繋がねばなりませんでした。然しこの不自然な妥協は如何して女性の本能の中に男性に對する憎惡を釀さないでゐられませう。男女の爭鬪はこゝから生れ出ます。同時に女性はまだ女性本來の本能を捨てる事が出來ません。卽ち男子に對する純眞な愛着です。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが今の女性の悲しい運命です。私はそれを見ると心が痛みます。「或る女」はかくて生まれたのです。[27]

これは、有島が石坂養平に送った書簡で、大正八年（1919）一〇月一九日に書かれたものである。序章、及び第一章でも取り上げたものであるが、着眼点が異なっており、ここに再掲する。引用した文章の末尾にある通り、ここには『或る女』の執筆意図に関わるものとして「女性の本能」が綴られている。これによると、女性が男性を繋ぎとめておくために「貞操」を提供したり、「姪欲の誘引」という手段を用いたりするのは女性にとって「不自然な妥協」であったため、必然的に男性に対する憎悪の感情が醸成され、そこに「男女の爭鬪」の契機が生じるとある。ここには「女の本能」の負の側面が指摘されていると言える。そして、この「女の本能」の負の側面が葉子にも投影されていると考えた時、先に提起した葉子の不可解な

[27] 石坂養平宛書簡（『有島武郎全集』第一四巻、筑摩書房、一九八五年六月、一一八頁）

行動原理も理解することが可能となるのではないか。すなわち、葉子は有島の説く「女の本能」の負の側面に沿うかたちで倉地に身体を提供し、それによって倉地を繋ぎとめようとしているのである。なお、有島の書簡を顧みると、男性に身体の提供を余儀なくされることで生じる「憎惡」がある一方で、女性には男性に対して「純眞な愛着」を持つ本能があるとも説かれている。そして、この憎悪と愛着という「二つの矛盾した本能」が女性には備わっており、その本能の相剋が「女性の悲しい運命」であると捉えられている。評論「惜みなく愛は奪ふ」で展開された「本能」論が〈精神／肉体〉という二項対立を通じて男女間における「純一無上の要件」を説いたものであるのに対し、石坂養平宛書簡に記された「女の本能」観は専ら女性の側に視点を据えたものとなっており、しかもその見据えた先には「悲しい運命」が置かれているのである[28]。同じ「本能」を論じたものでありながら、両者のベクトルは異なっており、前者が形而上学的な理想論[29]だとするならば、後者は悲観的な女性論と言ってもよい。葉子の造形がその悲観的な女性論である「女の本能」によって解釈が可能である以上、その行く末も「悲しい運命」として定められていると言えよう。

> 日は經つけれども倉地から本當に何んの消息もなかつた。病的に感覺の昂奮した葉子は、時々肉體的に倉地を慕ふ衝動に驅り立てられた。葉子の心の眼は、倉地の肉體の凡ての部分は觸れる事が出來ると思ふ程具體的に想像された。葉子は自分で造り出した不思議な迷宮の中にあつて、意識の痺れ切るやうな陶醉にひたつた。然しその醉が醒めた後の苦痛は、精神の疲弊と一緒に働いて、葉子を半死半生の堺に打ちのめした。（四六章・四三一頁）

---

[28] 樋口康一郎氏は、『或る女』を「葉子が悲劇的な運命を辿ることで近代社会の批判となっているようなテクスト」であると指摘する（「『或る女』の男性学―『或る女』における日本的家父長制とジェンダー―」『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月、二五頁）。

[29] 因みに上杉省和氏は、評論「惜みなく愛は奪ふ」について、「言葉の概念規定や論理の展開には、かなり強引で無理なところが散見される」と、この論が実態から乖離した恣意的な傾向を持つものであることを指摘している（『有島武郎事典』有島武郎研究会編、二〇一〇年一二月、九〇頁）。

これは子宮の病が悪化し、ついに病院で手術を受けることになった葉子の様子である。入院して以降、倉地からは何の消息も無い。病的に感覚の興奮した状態に陥った葉子は、肉体的に倉地を欲求する衝動に駆られる。その衝動は、倉地の肉体の全ての部位に触れることができるかと思うほど、リアルな想像であった。そして、葉子はその過去の肉体的な歓楽の思い出によって構築された「迷宮」の中で陶酔に浸る。しかし、その陶酔から目覚めた後に葉子は苦痛に襲われる。先に引用した本文では、やはり倉地との肉体的な交わりによって刹那的な恍惚感を得るも、事後に「死滅と同然の倦怠疲労」に陥る葉子の姿が描かれていた。ここでは、想像の世界で倉地との肉体的な交わりを果たし、陶酔に浸るも、その後に「精神の疲弊」に陥る葉子の姿が描かれている。どちらの場面も葉子の帰着する地点は同じく「疲労」や「疲弊」であるが、前者の場面が肉体的な次元での軌道であるのに対し、後者の場面は精神的な次元での軌道であるという差異がそこには見て取れる。そして、その帰着点は「半死半生の堺」ということになる。「本能」に従って肉体と精神の両方の充足を求めた葉子は、そのいずれをも手に入れることができず、結果として「本能」の充足は果たされぬまま、「半死半生の堺」に追い込まれることになるのである。

結論

『或る女』の主人公早月葉子の造形について、本能の赴くままに生きる「新しい女」として描かれていると解する向きがある。しかし、本稿の問題提起で掲げたように、最初の結婚相手となった木部に対する葉子の心情や態度は、まるで男に奉仕する前時代的な女性像そのものであり、決して「新しい女」とは言えない。但し、本稿で補助線としたのはそういった「古い／新しい」女という二項対立の軸ではなく、有島武郎の「本能」観である。有島は、前時代的な女性の相貌を見せ始めた葉

子を「女の本能」に目覚めた女性として描いていく。果たしてこの「本能」とはいかなるものであるのか。本稿ではこのような問題意識のもとに、有島語彙としての「本能」に着目し、この語が葉子の人物造形にどのように関わっているかについて検討を加えてきた。

葉子に関連して用いられている「本能」には二つのものがあるといえる。一つは、有島が「惜みなく愛は奪ふ」で展開した男女間の愛に見られる「本能」であり、もう一つは、有島が石坂養平宛の書簡で説いた「女の本能」である。葉子の恋愛遍歴を辿るうえで、木部から倉地へと恋愛対象が推移していく経緯については、「惜みなく愛は奪ふ」に見られる「本能」論がガイドラインとして有効に機能している。「本能」の求めるものを〈精神／肉体〉という二項対立で捉えていく有島の論に導かれるかのごとく、葉子は恋愛相手に精神や肉体の充足を求め、あるいはその欠落を補完しようとする。一方で、このようなガイドラインから乖離していく葉子の在りようも観察される。その契機となっているのが葉子の身体の変調であった。葉子は子宮に病を抱えたことで、肉体的な側面に充足を得られなくなってゆく。その結果、〈精神／肉体〉という単純な二項対立の関係で葉子の位相を捉えることはできなくなるのである。葉子は、恋愛相手との肉体的な関係に苦痛を覚えながらも、その関係を維持するために自身の肉体を提供し続けなければならないという状況に追い込まれてゆく。このような矛盾葛藤する葉子の位相は、石坂養平宛の書簡において説かれた「女の本能」の負の側面に即応したものとなっている。果たして有島の説く「女の本能」は、女性全般に適用され得る普遍的なものと言えるであろうか。これは極めて有島に固有の女性観と言うべきものであると論者は考えている。

このように見てくると、有島武郎は前時代的な価値観を葉子に与え、それを「本能」として背負わせていることが分かる。男性に従属することを「本能」であるかのように担わされた葉子は、その足枷をはめられたまま人生を歩むしかない。そういった女性の人生の軌跡は「悲しい運命」を描いてゆく。ここに有島の女性に対する偏見を見て取ることも可能であろうが、論者は、これが有島の生きた時代におけ

る女性の限界であったと解しておきたい。

第四章

『或る女』におけるコケットとしての葉子像

1. 問題提起

文学作品の作者が自作について語るということは、ある種のリスクを負うことにもなるのではないか。なぜなら、読者はその作者の発言に縛られて作品を享受せざるを得なくなるからである。読者によって様々な解釈が可能であったはずの作品は、作者によって一元化された意味へと収斂してしまう。しかし、有島武郎はそういったリスクを顧みず、自作について言及する機会を度々設けている。本稿で取り上げるのも、そういった自作を語る有島の発言の一端である。

次に掲げるのは、有島が浦上后三郎[1]に宛てた書簡の一節である。ここには、有島が『或る女』で何を描こうとしたかについての執筆意図が記されており、興味深い[2]。

> 「或女」で私が讀者に感銘して欲しいと思つたものは、現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさといふ事でした。女は男の奴隷です。彼女は男に據る事なしには生存の權利を奪はれてゐます。其結果（或る思想家がいみじく言ひあてたやうに）その無一物の境地から唯一つ男を籠絡すべき武器（戰慄すべき兜器―性慾的誘惑―自然の法に背いた機能の逆用）を用ゐる事を強ひられました。（傍書）―この事は葉子のみならずその小説に出て來る凡ての女性に對して

[1] 浦上后三郎は大正―昭和時代のドイツ文学者で、明治三十年一二月一日に生まれた。第二早稲田高等学院教授をへて早大教授となる。浦上は早稲田大学予科入学後、同級生達の影響を受けて書いた小説「灯」を『新愛知新聞』の懸賞小説へ応募し、それが有島（正宗白鳥・島崎藤村とともに選者をつとめた）の「一番柔らかく若い者達を劬はるやうな採点」による「百点」のおかげで、二等に入選した。その御礼に自宅を訪れて接した人柄に感激し、私淑することとなる（上牧瀬香・中村成里（翻刻）、「『有島武郎全集』未収録・有島武郎の浦上后五三郎宛書簡―白樺派文学館所蔵資料―」、『有島武郎研究』第一六号、二〇一三年六月、八五頁）。

[2] この書簡は「女性の自立やジェンダーの問題への、著者による自作解説として貴重な資料」である（上牧瀬香「浦上后三郎」、『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月二〇日、三〇〇頁）

も顧慮されてゐる積りです―そこから人間の男女關係の悲劇が胎胚したのだと思ひます。而して遺傳はその惡癖を增大し、增大した惡癖は本然的に女性の中に男性に對する衝動的な復讐心を釀成し、それが本能的な男性に對する憧憬愛着の情とからみ合つて複雜的な復讐、復讐的な執着を生んで行きます。是れは今の世の中に存在する最も悲しい悲劇の一つであらねばなりません。

（「浦上后三郎宛」大正八年十月八日付）[3]

この書簡によると、有島は『或る女』を通して読者に女性の「運命の悲劇的な淋しさ」[4]という感銘を与えようと企図していたことが分かる。女性の運命を悲劇的な淋しさとして捉える有島の感覚はどのようにしてもたらされるものであるのか。試みにそれを辿ってみると、次のようになろう。まず、男と女は対等な関係ではなく、女は男の「奴隷」であり、生殺与奪の権利を男に握られた存在である。そして、そのような従属的な立場に置かれた女が唯一、男を「籠絡」しようとしたときに用いることのできる武器が「性慾的誘惑」であるという。この「性慾的誘惑」は「惡癖」として女性の間で相伝され、やがて男性に対する「復讐心」を醸成する。一方、女性は本能的に男性に対して「愛着の情」も持っている。その「愛着の情」と「復讐心」は複雑に絡み合い、その結果として、世の中のもっとも「悲しい悲劇」が生じてくる。以上は、『或る女』の執筆意図を説明するものとしてこの書簡に記されたものであるが、これはそのまま、作家有島の女性観を窺わせるものともなっていよう。

ここで、この浦上宛書簡に書かれた『或る女』の執筆意図に関して言及している先行研究を顧みておきたい。安川定男氏は、女主人公葉子の倉地への愛着、執着に

---

[3] 『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月三〇日、一一四頁）。なお、傍線は引用者による。

[4] 因みに、『或る女』の女性の悲しい運命を描こうとする有島武郎の執筆意図は石坂養平宛書簡（大正八年十月九日）や講演録「文學は如何に味わふべきか」（『女學世界』大正八年十一月―十二月）、あるいは古川光太郎宛書簡（大正十年九月十八日）などにもうかがえる。

注目し、その愛着の根底には、「強烈な自我意識」のもたらす反逆心、復讐心があったと述べている[5]。江頭太助氏は安川氏の論に疑義を呈しつつ、女を男の奴隷として捉えている点、そして、それゆえに女性が性欲的誘惑という武器の使用を強いられるという点が、トルストイの『クロイツェル・ソナタ』からの影響であると指摘する[6]。このトルストイに着想を得たとされる女の武器を、コケットリーとして捉え直したのが中村三春氏である。中村氏は、瀬沼茂樹氏が『或る女』の主人公早月葉子の造形として挙げた「自我に目覚めた近代女性」と「娼婦性」という特徴[7]に賛同しつつ、「娼婦性」とはコケットリーに根差すものであると説く。更に、中村氏は、浦上宛書簡に準拠して、『或る女』の物語とは「『性的誘惑』としてのコケットリーを、葉子が母親佐や周囲からの『遺伝』のうちに習得して用いた結果、『増大した悪癖』となった自らを破滅に導く過程であった」と規定した。そして、浦上宛書簡に書かれた執筆意図と『或る女』の物語とが即応していることをもって、「有島の構想はかなりの程度に実現した」と説くに至る[8]。

さて、ここで留意すべきは、先に引用した浦上宛書簡には次の文章が連接しており、そこでは、作家有島の執筆意図と作品の形象の関係についても述べられている点である。

> 私はさう思索しました。而して私はそれに對して心が動かされました。或る程度までの醇化をしました。然しその醇化が不足であつた事が、恐らくはあの作を私の期待を裏切つて硬化してゐます。
>
> （前掲・「浦上后三郎宛」大正八年十月八日付））

---

[5] 安川定男「『或る女』論―浦上宛書簡をめぐって―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月、七四頁）

[6] 江頭太助「『クロイツェル・ソナタ』との比較考察―『或る女』の研究視点―」（『有島武郎の研究』、朝文社、一九九二年六月、一一五頁）

[7] 瀬沼茂樹「有島武郎」（『日本近代文学大事典』第一巻、日本近代文学館編、講談社、一九七七年十一月十八日、五九頁）

[8] 中村三春「媚態と狂気　『或る女』におけるコケットリーの運命」（『言葉の意志　有島武郎と芸術史的転回』、有精堂、一九九四年三月四日、一八五頁）

有島は自分の執筆意図について、ある程度までの「醇化」をしたが、その「醇化」が不足していたため、『或る女』は「私の期待を裏切って硬化」したという作品観を持っている。つまり、作家有島は自分の意図したことをすべて、自分の作品『或る女』の中に託すことができていないということになる。この作家と作品の関係をどう捉えたらよいか。自分の創り出した作品といえども、そこには作者の意図しなかった領域が胚胎してしまうということであろうか。ここに掲げた有島の記述に従えば、有島が執筆時に構想した「性慾的誘惑」の使用を強いられる女性像、即ちコケットの具現化は頓挫したということになる。

本稿では、以上のような問題意識のもとに、まずは浦上宛書簡に記された有島武郎の女性観について再検討する。そして、そのような女性観の実践としてある葉子のコケットリーが、どのように「或る程度の醇化」を果たし、また、「硬化」してしまったのかを明らかにする。

2. 浦上宛書簡に記された有島の女性観の形成

『或る女』の葉子は女の性が男性に対して巧みな「武器」になることを知る女性であるという指摘がある[9]。このような性的な武器を使用する葉子像は、浦上宛書簡に記された有島の「性慾的誘惑」という武器を強いられる女性観に相当するのではないか。但し、ここで留意すべきは、有島のそういった女性観を語る文脈において「或る思想家がいみじく言ひあてたやうに」という一節が後に続いている点である。つまり、有島の女性観は自分の経験に基づいて形成されたものではなく、「或る思想家」の提言に即したものであったのである。この「或る思想家」とは誰を指すのか。参考になるのが小玉晃一氏の論である。小玉氏によれば、有島は「最も西欧的な知性の作家で、漱石や鷗外、藤村などのように東洋への回帰、日本への回帰

[9] 江種満子「有島武郎の女性論」(『立教大学国文』、二〇〇八年三月、四五頁)

があまり見られない珍しい作家といえる」という[10]。本節ではこういった指摘を踏まえつつ、西洋の思想家としてトルストイとイプセンの二人を取り上げ、彼らの女性観が有島に与えた影響について考察する。

2.1　トルストイの『クロイツェル・ソナタ』との関係性

まずは、有島とトルストイの関係について確認しておこう。特に注目したいのはトルストイの『クロイツェル・ソナタ』と有島の関係である。例えば、江頭太助氏は、有島の精神形成史上の「告白文」である「リビングストン伝・第四版序言」と『クロイツェル・ソナタ』との間に共通点を見出し、その共通点として抽出される結婚観や男女観が『或る女』の後編の主題へと繋がっていくと論じる[11]。また、三田憲子氏は、「有島に男女を肉欲の「争闘」関係と把握して見せたのはトルストイの『クロイツェル・ソナタ』である」と指摘している[12]。そうであれば、同じく『或る女』の主題に言及している浦上宛書簡においても『クロイツェル・ソナタ』との関係性を見出すことができるのではないか。それを検証するための端緒として、有島がトルストイの作品に傾倒していたことを示す資料を掲げておく。

> 一、聖書。二、トルストイ諸作。三、クロポトキン諸作。四、ホイットマン詩集。五、ベルグソン「時間と意志の自由と」
>
> 一、よりは愛を　二、よりは人の心を　三、よりは正しき生活を　四、よりは性格の力　五、よりはよき考へ方を學びました。
>
> （「余の愛讀書と其れより受けたる感銘」、『中央文學』、大正八年四月一日）[13]

---

[10] 小玉晃一氏「有島武郎と西洋―イプセンにも触れて―」（有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』、右文書院、一九九六年七月、一四頁）
[11] 前掲注６論文
[12] 三田憲子「有島武郎の女性問題評論」（有島武郎研究叢書第四集『有島武郎の評論』、右文書院、一九九六年六月、一三六頁）
[13] 『有島武郎全集』第七巻（筑摩書房、一九八〇年四月二十日、三八四頁）

これは、大正八年四月一日発行の『中央文学』第三年第四号に掲載された愛読書アンケートに対する回答である[14]。有島は回答の中で、「一」として聖書を挙げ、続く「二」としてトルストイの諸作を挙げている。有島とホイットマンの関係についてはよく知られているところであるが、そのホイットマンの詩集は「四」に位置しており、有島がトルストイ文学にどれほど傾倒していたかをうかがうことができよう。更に資料の二段落目に目を移すと、そこにはそれぞれの番号に相当する書物から何を学んだかが記されている。それによれば、「二」のトルストイ諸作から有島は「人の心を」学んだことになる。

従来、有島の『或る女』とトルストイ文学との関係については、専ら『アンナ・カレーニナ』からの影響について論じられる傾向にあった[15]。本稿で注目したいのは江頭氏の論でも取り上げられていた『クロイツェル・ソナタ』である。この『クロイツェル・ソナタ』という作品は、不貞の妻を殺した男の告白を描いた小説である。作品では、男の告白を主軸としながら、男女関係、結婚問題、性欲問題が俎上に載せられ、批判が展開されていく[16]。有島はこの作品から「人の心」のどのような点を学び取り、自らの女性観を形成していったのであろうか。

> ところが、今日、婦人は男の所有しているこの権利を剝奪されています。で、この権利に対する代償として、女は男の肉感に働きかけ、その肉感を通して男を征服し、結局、表面的には男が選択するように見えるけれど、そのじつ女が選択するようにしてしまうのです。一度この方法を会得すると、それを濫用して、人々にたいして恐ろしい権力を獲得するのです。

---

[14] 佐々木靖章、「解題」、前掲注 13、五五〇頁

[15] 例えば、小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』―比較対比研究序説―」(『岩手大学教育学部研究年報』第二六巻、一九六六年一二月、一九頁～三二頁)、柳富子「『或る女』考―有島のトルストイ受容に寄せて―」(有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』、右文書院、一九九六年七月、六五頁～八八頁)、などがある。

[16] 「解題」(米川正夫訳『クロイツェル・ソナタ』、岩波書店、一九二八年九月、一七二頁)

（『クロイツェル・ソナタ』九、四一頁）[17]

これはトルストイの『クロイツェル・ソナタ』第九章の中に見られる一節である。この引用文によると、現在、女性は男性に権利を奪われており、その代償として、女性は肉感に頼りながら男性を征服するしかないとある。そして、女性はこの方法を濫用し、男性に対して恐るべき権力をふるうに至るという。ここに展開されている論理は、有島が浦上宛書簡の中で説いた、「無一物の境地」に置かれた女性は、男性を籠絡するためには「性慾的誘惑」を武器として用いるしかないという女性観と同様であろう。因みに、『クロイツェル・ソナタ』の中には男性の肉感を利用する女性について、次のような記述もある。

> 女はわれわれの肉感に働きかけ、われわれをその網の中へ捕えることによって、復讐をしているのです。ええ、みんなそのためです。女は自分で自分を、男の肉感に働きかける恐ろしい武器と変じてしまつたので、男は落ちついて冷静に女に対することが出来ない。
>
> （『クロイツェル・ソナタ』九、四二頁）

トルストイは、女性が男性の肉感に働きかけるという武器を使って男性を「網の中」に捕らえるとし、それは女性の男性に対する復讐であるとも説く。こういった女性像は、やはり有島が書簡の中で説く、女の「性慾的誘惑」は、やがて男に対する「復讐心」を醸成するという考え方と即応するものであろう。また、同じく書簡の中で有島は「女は男の奴隷です」とも説いている。この女性を奴隷として見なす有島の女性観についても、やはり『クロイツェル・ソナタ』第十四章に、「女は依然としてああいう卑屈で淫蕩な女奴隷ですし、男は依然としてああいう淫蕩な奴隷所有者なのです」（六四頁）とあって、同様の記述を見出すことができる。この

[17] 前掲注 16、四一頁

ように見てくると、有島が浦上宛書簡に記した「或る思想家」とは、トルストイのことである可能性が考えられる。ただ、トルストイが『クロイツェル・ソナタ』で展開した女性観は、必ずしも固有のものであるとは限らない。実は、同様の女性観を展開している作家にイプセンがおり、その影響の可能性も捨てがたい。次に、そのイプセンの影響について考えてみる。

2.2　イプセンの女性観との関係性／受容の可能性

有島がイプセンの作品と出会ったのはハーバード大学に留学していた頃と推測される。留学中の明治三十九年（1906）にはイプセンの訃報に接し、「イブセン雑感」を執筆している[18]。明治四十年（1907）四月に帰国した有島は、日本でのイプセンブームに直面する。当時、日本ではイプセンの戯曲の翻訳が相次いでいた[19]。この影響もあって劇作家としてのイプセンの名が広く知られていく。しかし、有島が影響を受けたのはイプセン劇というよりは、そこに込められた思想や考え方であったという小玉晃一氏の指摘がある。小玉氏は「劇作家としてのイプセンよりはむしろ思想家」であると説く[20]。有島はイプセンに関するエッセイを七篇ほど書いている[21]。また、イプセンの思想の影響が見られる小説として『或る女のグリンプス』があるとも説かれてきた。『或る女のグリンプス』は『或る女』前編の下敷きとなった作品であるが、例えば、長谷川泉氏は、有島が発表し続けてきたイプセンに関する論考の延長線上に『或る女のグリンプス』が執筆されたと捉えて

---

[18] 「イブセン雑感」の刊行は、明治四十一年（一九〇八）四月十日発行の『文武會々報』第五十三号の誌上でのこととなる。但し、執筆にとりかかったのはイプセンの死（一九〇六年五月二十三日）の直後と想定されている（瀬沼茂樹「解題」『有島武郎全集』第一巻、筑摩書房、昭和五十五年八月三十日、七一八頁）。

[19] 井上理恵「イプセン」（前掲注２、二九五頁）

[20] 前掲注 10、二三頁

[21] 例えば、『有島武郎全集』には『ブランド』（第一巻所収）、『イブセン雑感』（第一巻所収）、『イブセンの末流』（第七巻所収）、『イブセンの仕事振り』（第八巻所収）、『イブセン研究』（第八巻所収）、『近代生活の解剖―《イブセンの見たる婦人問題》―』（第八巻所収）、『一つの提案』（第八巻所収）がある。

いる[22]。また、山田昭夫氏は、イプセンの『ヘダ・ガブラー』と『海の夫人』について、それらが『或る女のグリンプス』の主人公田鶴子の造形の「有力な触媒作品」であると論じる[23]。奥田浩司氏も同様に有島のヘダに対する理解が田鶴子の造形に反映されていると指摘する[24]。これら諸氏の説くように『或る女のグリンプス』がイプセンの影響下にあるとするならば、その改作となった『或る女』にも当然のことながらイプセンの思想の投影を見て取ることは可能なはずである。本稿ではこのような前提のもとに、その『或る女』の執筆意図を記した浦上宛書簡の文面にもイプセンの思想がうかがえることを以下に検証する。

本稿が注目するのは、「一つの提案」と題するエッセイの次の条である。

> 現在の社會生活に於て、貞操といふことは男性に對してよりも女性に對して特に嚴しくあてはめられてゐる。結婚によらずして一度童貞を破つた女性は、結婚の權利をすら亡失したものゝやうに考へられてゐる。それほど女性に對して社會は貞操の重んずべきを敎へながら、多數の女性をして貞操を賣物にさせて恬然として知らぬ顏をしてゐるのだ。貞操を強ひるのも、それを賣物にさせるのも、男性に取って都合がいゝからだと解釋するより解釋のしやうがないではないか。
>
> （「一つの提案」、二三六頁）[25]

これは、大正九年九月一日発行の『女性日本人』第一巻第一号に掲載された評論の一節である[26]。有島はこの評論の冒頭で「『イブセンの仕事場から』といふ本が

---

[22] 長谷川泉「有島武郎とイプセン」（『有島武郎研究』、本多秋五・瀬沼茂樹編、右文書院、一九七二年一一月一〇日、一五九頁）

[23] 山田昭夫「或る女」（『鑑賞　日本現代文学　第10巻　有島武郎』角川書店、一九八三年七月、一五一頁）

[24] 奥田浩司「『或る女のグリンプス』における〈母性〉―イプセン受容を補助線として―」（『有島武郎研究』八巻、二〇〇五年三月、一九頁）

[25] 『有島武郎全集』第八巻（筑摩書房、一九八〇年十月二十日、二三六頁）

[26] 佐々木靖章「解題」（前掲注25、六六五頁）

ある」と書き出し、末尾の段落で「四十年も前にイブセンが道破したことを繰返さねばならぬ私は少し馬鹿だ」と記しており、この評論の全体がイプセンへのオマージュであることを隠さない。引用した部分も当然のことながらイプセンの思想を翻案したものとなろう。その主張とは即ち、現在の社会において貞操が重視されるのは男性より女性の方であるということ。また、婚姻によらずして貞操を失った女性は結婚の権利すら失うということ。社会は女性に貞操を重んじるべきことを教える一方で、多数の女性に貞操を売物とさせているということ。つまり、女性は貞操を強いられたり、それを売物とさせられたりしているのだが、それは男性にとって好都合だからだと解釈される、ということになる。ここには、女性の貞操が男性の都合によって売物へと転化していく論理を見出すことができよう。ここで浦上宛書簡を顧みておくと、その中にある「男を籠絡すべき武器（戰慄すべき兜器―性慾的誘惑―自然の法に背いた機能の逆用）」という一節は、この「一つの提案」で示された「売物」に相当すると言える。

さて、「性慾的誘惑」という武器を用いる女性に対して、男性はいったいどのような態度を示すのか。これについても「一つの提案」の中に参考となる部分を見出すことができる。

> 男性は知らず識らず女性に對して侮辱者となる（私自身が屢それであることを意識する。女性を男性の奴隷であるとして取扱はうとする誘惑は、既に血液の中に傳へられて私の心にも存在してゐる。私は自分自身それを恐れるのだ。……）女性は知らず識らず男性を呪詛するか、その被征服者となつて甘んずる。
>
> （「一つの提案」、二三六頁）

有島は、男性は無意識のうちに女性を侮辱する者となり、また、女性を奴隷として扱ってしまうと説く[27]。それに対して、女性も無意識のうちに男性を呪詛し、

[27] 因みに、有島の「女性を男性の奴隷である」という考え方は、「イブセンの研究」（『大

その被征服者となることに甘んじると言う。つまり、女性は男性との間に奴隷や被征服者といった従属的な関係を結ばざるを得ない立場に置かれているというのが有島の女性観である。有島はまた、書簡の中で、女性は「性慾的誘惑」を武器として使う一方で、復讐心をも醸成すると述べていた。女性が抱く復讐心というのも、ここに見てきた奴隷や被征服者といった立場の者に固有の心的機制と言える。

> 斯様に現代に於ても猶男子萬能の社會である。當時は推して知る事が出來る。一體人間は男子と女子とから成立つものであつて、人間社會は男と女に公平無私でなくてはならぬ筈だ。イブセンは斯る事から男女關係が亂れ、社會に幾多の悲劇が存在する事を見てとつた。
>
> （「近代生活の解剖―《イブセンの見たる婦人問題》―」、『淑女畫報』大正九年二月一日）[28]

これは大正九年二月一日発行の『淑女畫報』第九巻第二号「讀物」欄の冒頭に掲載された有島の講演録の一節である[29]。この講演で、有島はイプセンの男女関係および婦人問題に関する思想を紹介する。イプセンは現代が「男子萬能」の社会であることを看破し、そのような社会は不公平なものであると説く。また、人間は男性と女性から成立つものゆえ、男女も対等的な関係になるべきだと主張する。更に、このようなアンバランスな男女関係は社会の「幾多の悲劇」を生むと捉えている。イプセンの言う男女関係に関する社会の悲劇とは、有島が説く、女性の男性に対する愛着と憎悪の絡み合う「悲しい運命」に相当すると言えよう。

このように見てくると、有島の浦上宛書簡で書かれた女性観は、トルストイやイプセンの女性観に影響を受けたものであることがわかる。なお、有島は自らの女性観を述べる文脈において「或る思想家」に言及していたが、その思想家が誰を指す

學評論』大正九年二月一―三日）にもある。

[28] 前掲注 25、四七三頁

[29] 佐々木靖章「解題」（前掲注 25、六九七頁）

のかについては明らかにしておらず、また、そのことに触れる研究も管見には入ってこない。本稿では、この「或る思想家」に該当する人物としてトルストイとイプセンの二人がその可能性を持つと提案しておく。

3. コケットリーという視点

さて、本稿の問題提起で触れたようにトルストイに着想を得たと考えられる有島の「男を籠絡すべき武器」は、中村三春氏によってコケットリーとして捉え直されていた[30]。本稿でも、このコケットリーという視点について検討を加えてみたい。コケットリーを女性の性戦略として積極的に意味を見出したのは、ドイツ出身の哲学者ゲオルク・ジンメルであった。

> コケットリーはむしろ、それが対象とする人物に、イエスとノーの不安定な遊戯、承諾の回り道であるかもしれない拒絶、その後ろに、背景として、可能性として、威嚇として、取り消しが立っている承諾とを、感じさせなければならない。コケットリーはあらゆる最終的な決定において終わる。そしてその技巧の絶頂は、コケットリーが最終的決定状態にいつでもその対蹠物によって均衡をとらせる用意をととのえて赴いてゆく、最終的決定状態に近いところであらわれる。女性が実際に狙いを定めている別の男性に媚態をしめすために、一人の男性「と」媚態遊戯にふけるとき、「と」の二重の意味に含まれている独特な意味深さがあきらかになる。すなわち、「と」は、相関関係の、一方では道具を、他方では相手を示している、―それはあたかも、同時に反作用、相互関係を生むことなしに一人の人間をたんなる手段にすることはできないかのようである。そして、さしあたりは肉体的な、しかし第二には心的な意味をもつ一つの事実が、対等に雑り合ってコケットリーの色調をなすイエスとノ

[30] 中村三春氏、前掲注 8 論文

一のもっとも直接的な共同をしめしている。[31]

これは、「コケットリー」と題するジンメルのエッセイからの引用である。ジンメルは女性が男性に示す媚態の在りようを「イエスとノーの不安定な遊戯」、すなわち「承諾」と「拒絶」の間で最終的な決定を保留し続ける技巧として説明する。女性は男性に対し、承諾の姿勢を見せる一方で拒絶の可能性をもうかがわせる。あるいはまた、拒絶の姿勢を見せながらも承諾の可能性をうかがわせる。そういった曖昧な態度が男性にとっては媚態として映り、そこに引き寄せられてゆくのである。ここで、有島の浦上宛書簡を振り返ってみると、「籠絡すべき武器（戰慄すべき兜器―性慾的誘惑―自然の法に背いた機能の逆用）」とあって、これがジンメルの言うコケットリーに相当するものと考えられるのだが、留意すべきは手紙のこの条に「この事は葉子のみならずその小説に出て來る凡ての女性に對しても顧慮されてゐる積りです」という傍書がある点である。有島は女性を造形するにあたってコケットリーという性戦略があることを意識しており、しかもその性戦略のために「男女關係の悲劇」が胚胎するという構図を描いていたのである。果たして有島は、ジンメルの説くような〈承諾／拒絶〉の間で最終的な決定を保留し続ける女性像を葉子に適用しているのか。典型的な場面をここで見ておきたい。

葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるやうだつた。葉子はそれまで多くの男を可なり近くまで潛り込ませて置いて、もう一歩といふ所でつき放した。戀の始めにはいつでも女性が祭り上げられてゐて、ある機會を絕頂に男性が突然女性を踏み躪るといふ事を直覺のやうに知つてゐた葉子は、どの男に對しても自分との關係の絕頂が何處にあるかを見ぬいてゐて、そこ

[31] 『ジンメル著作集７　文化の哲学』、円子修平・大久保健治（訳）、白水社、二〇〇四年一〇月一日、一〇五頁）。なお、なお、ジンメルの「コケットリー」論の初出は一九〇九年五月一一日付、及び十二日付の新聞『Der Tag』で、「Psychologie der Koketterie」と題として掲載された。その後、ジンメルの著書『Philosophische Kultur, gesammelte Essais』（一九一一年）に収録された。

に來かゝると情容赦もなくその男を振捨てゝしまつた。さうした捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分達の獣性を恥ぢるやうに見えた。（二章・一二頁）[32]

これは、葉子が無名の男たちとどのような恋愛をしてきたかについての叙述である。葉子には、男が何を欲しているかを見通すことができた。葉子の恋愛戦略とはいかなるものか。彼女はまず、男を自分の近くまで引き込んでおく。そして、「もう一歩といふ所」まで近づけておいて、つき放すという行動に出る。彼女はどの男に対しても自分との関係の絶頂がどの地点にあるかを見抜いており、そこに来かかると情け容赦なくその男を捨ててしまった。このような葉子の恋愛戦略はジンメルの説く「イエスとノーの不安定な遊戯」、「承諾」と「拒絶」の間で最終的な決定を保留し続けるコケットリーに相当すると言えよう。ジンメルはまた、そのような曖昧な女性の態度が男性にとっては媚態として映るとも説いている。

ここで、葉子の様々な媚態の在りようを観察してみることにしよう。果たして葉子の媚態は、ジンメルの説くコケットリーの定式とどのような関係にあるのか。

十五の時に、袴を紐で締める代りに尾錠で締める工夫をして、一時女學生界の流行を風靡したのも彼女である。その紅い唇を吸はして首席を占めたんだと、嚴格で通つてゐる米國人の老校長に、思ひもよらぬ浮名を負はせたのも彼女である。（二章、一一頁）

これは、葉子が十五歳の時に経験した出来事を記した部分である。同年代の女学生たちが袴を紐で締めているのに対し、葉子は一人、尾錠で袴を締めるという工夫をしていた。やがて多くの女学生たちが葉子の工夫を真似て尾錠を付けるように

[32] 『或る女』の本文は、『有島武郎全集』第四巻（筑摩書房、一九七九年一一月）により、章数・頁数を記した。なお、引用文中に施した傍線は引用者による。以下同様。

なったとある。この逸話は、葉子の先進性を物語るものだと言える。しかし、葉子の先進性は、彼女を集団の中心に据えるような展開にはならない。葉子が女学校で主席という位置を得ても、すぐにその根拠を疑う嘘が流されてしまうのである。その嘘とは、葉子の媚態が外国人の老校長を誘惑したに違いないというものであり、葉子の才能による先進性は、結局、葉子の媚態へと回収されてしまうのである。葉子の先進性は容易に媚態へと転換されるものであり、集団の中心に彼女の存在を据えるものとして機能するのではなく、むしろ逸脱していく方向へと作用するのである。

> 一秒の躊躇もなく男のやうな口調で葉子はかう小さくつぶやいた。「構ふものか」さう思ひながら葉子は事務長の眼使ひに無頓着に、快活な足どりでいそいそと田川夫妻の方に近づいて行つた。それを事務長もどうすることも出來なかつた。葉子は三人の前に來ると輕く腰をまげて後れ毛をかき上げながら顔中を蠱惑的な微笑みにして挨拶した。田川博士の頬には逸早くそれに應ずる物やさしい表情が浮ばうとしてゐた。（十七章・一三六頁）

これは葉子が渡米する船の中で示した仕草の描写である。乗客の田川博士の前で葉子は媚態を示す。傍らには男女の関係を結んだばかりの倉地がいて、その倉地は葉子に来るなという目配せをする。しかし、葉子はそれに敢えて無頓着を装い、軽やかな足取りで田川博士のもとへ近づいて行く。そして、軽く腰をまげて後れ毛をかき上げながら「蠱惑的な微笑み」を顔中に浮かべて挨拶をした。すると、田川博士の頬には「逸早くそれに應ずる物やさしい表情」が浮かぶ。葉子の媚態に田川博士が籠絡された瞬間である。ここで、先に掲げたジンメルの見解を顧みておきたい。ジンメルは、コケットリーが「最終的決定状態に近いところであらわれる」とし、「女性が実際に狙いを定めている別の男性に媚態をしめすために、一人の男性『と』媚態遊戯にふけるとき、『と』の二重の意味に含まれている独特な意味深さ

があきらかになる」と説いていた。すなわち、女性は最終的な決定を男性に与えるようなことはせず、自分のものになったという実感を男性に与えないために、別の男性との恋愛の可能性を示そうとするという。その時、女性のコケットリーは発動する。葉子が倉地の面前で田川博士に媚態を示していくのもそういったコケットリーの在り方を踏襲していると言えるのではないか。

葉子の媚態は、実は作品を通して効力を発揮し続けるわけではない。次に掲げる場面は、葉子の媚態が男性を惹きつけるものとしては機能していかない事例である。

> 倉地は口を尖らして顎を突き出しながら、どしんと足を擧げて疊を踏み鳴らした。葉子はそれでも我慢した。而してボタンを拾つて立ち上ると倉地はもうワイシャツを脱ぎ捨てゝゐる所だつた。
>
> 「胸糞の悪い……おい日本服を出せ」
>
> 「襦袢の襟がかけずにありますから……洋服で我慢して下さいましね」
>
> 葉子は自分が持つてゐると思ふ程の媚びをある限り眼に集めて歎願するやうにかう云つた。
>
> 「お前には頼まんまでよ……愛ちやん」
>
> 倉地は大きな聲で愛子を呼びながら階下の方に耳を澄ました。葉子はそれでも根かぎり我慢しようとした。（三十八章・三五四頁）

葉子は米国に上陸せず、そのまま日本に戻って倉地との同棲生活を送っていた。ここに掲げたのは同棲生活の中で二人が喧嘩した場面である。倉地に叱られた葉子は反発せずに我慢し、そして「自分が持つてゐると思ふ程の媚び」をある限り眼に集めて歎願するように倉地を宥める。しかし、倉地は大きな声で「お前には頼まんまでよ……愛ちやん」と言う。ここでは、葉子のありったけの媚びが倉地には通用せず、空振りに終わってしまう。倉地の関心は、もはや葉子にはなく、葉子の妹

である愛子の方に移っていたのである。葉子はそれを分かっていながらも、我慢しようとする。かつて葉子の周りにいた男性たち、すなわち無名の恋愛相手、外国人の老校長や田川博士などの男性たちは皆、葉子の媚態に魅了された。葉子は葉子で、そういった男性たちを押したり、引いたりして、恋愛の駆け引きを上手に使っていた。しかし、ここで描かれている葉子は、倉地という一人の男性だけに執着し、彼の要求に合わせて行動するばかりである。このような葉子の姿は、ジンメルの説いた「イエスとノーの不安定な遊戯」というコケットリーの定義から逸脱しているのではないか。葉子にはもはや不安定な遊戯を展開する余裕はない。彼女は専ら倉地との安定的な関係を求めて献身的に振る舞い、我慢を重ねていく。

4. 醇化しえぬコケットとしての葉子像

果たして有島がジンメルの「コケットリー」論を読んでいたかは不明である。有島が「コケット」の語を用いているのは『或る女』の後編であり、その執筆時期は大正八年（一九一九）四月一日から五月二十六日となる。その当時、ジンメルの翻訳者としては木下杢太郎が知られており[33]、木下は雑誌『白樺』第一巻第八号（一九一〇年一一月）にもジンメルに関する論考（「寫眞版の RODIN とその聯想」[34]）を寄せているので有島がジンメルを知っていた可能性は否定できない。但し、管見では有島のテクストからジンメルの名前を見つけることができないため、本稿ではその関係を不明とするにとどめておく。但し、『或る女』の中には「コケット」という語が二例使われている。一つは葉子に関係する用例であり、もう一つは比喩表現としての用例である。後者の用例について今は措くとして、本稿で注目したいのは、葉子に関係する次の「コケット」の用例である。

---

[33] 赤井正二「木下杢太郎の思想展開におけるジンメルの芸術論」（『立命館産業社会論集』第四七巻第三号、二〇一一年一二月二〇日）

[34] 当該論文は、『木下杢太郎全集』第八巻（岩波書店、一九五一年六月二〇日）に所収されている。

歡樂ももう歡樂自身に歡樂は持たなくなつた。歡樂の後には必ず病理的な苦痛が伴ふやうになつた。或時にはそれを思ふ事すらが失望だつた。それでも葉子は凡ての不自然な方法によつて、今は振り返つて見る過去にばかり眺められる歡樂の絶頂を幻影としてゞも現在に描かうとした。而して倉地を自分の力の支配の下に繋がうとした。健康が衰へて行けば行く程この焦燥の爲めに葉子の心は休まなかつた。全盛期を過ぎた伎藝の女にのみ見られるやうな、傷ましく廢頽した、腐菌の燐光を思はせる凄慘な蠱惑力を僅かな力として葉子は何所までも倉地を擄にしようとあせりにあせつた。然しそれは葉子の傷ましい自覺だつた。美と健康との凡てを備へてゐた葉子には今の自分がさう自覺されたのだけれども、始めて葉子を見る第三者は、物凄いほど冴え切つて見える女盛りの葉子の惑力に、日本には見られないやうなコケットの典型を見出したらう。おまけに葉子は肉體の不足を極端に人目を牽く衣服で補ふやうになつてゐた。（三十六章・三三〇～三三一頁）

これは、葉子が子宮病に罹った際に、倉地との関係を省みている場面である。葉子にとって、倉地との肉体的な関係はすでに歓楽ではなく、必ず病理的な苦痛が伴うものとなっていた。そういった辛い状況にあってもなお、彼女は依然として倉地を自分に繋ぎとめておこうとする。健康が衰えていけばいく程、葉子は焦燥感に駆られてしまい、心は休まらなかった。彼女は「全盛期を過ぎた伎藝の女」のように、蠱惑力を僅かな力として倉地を虜にしようと焦る。引用した本文によれば、そのような葉子の姿は客観的には「コケットの典型」として映っているだろうとある。しかし、この構文の持つ真意は、葉子の内実が「コケット」から懸け離れているというところにある。葉子の肉体は病魔に襲われて美と健康が損なわれてしまった。そして、彼女はその肉体の不足を補うために敢えて人目をひく衣服を着ていた。子宮病に罹った葉子の実体は女性としての肉体的な魅力を喪失しており、その実体を

衣服で偽装することでかろうじて「コケットの典型」としての外見を保っていたのである。

ここで浦上宛書簡の内容を振り返って見てみたい。有島は女性を造形するにあたってコケットリーという性戦略があることを意識し、「性慾的誘惑」の使用を強いられる女性像を描こうとした。最初、葉子は確かに有島の執筆意図によって作品の世界でコケットとして生きていた。彼女は、手に入りそうで入らないという絶妙な距離感を維持し、男性たちを惹きつけていたのである。しかし、前節で確認したような倉地に叱られても我慢を重ねていく葉子像や、本節で取り上げた倉地を虜にしようと焦る葉子像の実体は、果たしてコケットと言えるであろうか。葉子の外見は依然としてコケットの体裁を維持していても、その内実は乖離してしまっていることを読み取っておきたい[35]。

おわりに―檜山京子宛書簡に記された有島の葉子像

有島武郎は、『或る女』において「性慾的誘惑」を武器として男を籠絡しようとする女性像を描くという執筆意図を持っていた。その「性慾的誘惑」を、中村三春氏はコケットリーとして捉え直した。中村氏はまた、「有島の構想はかなりの程度に実現した」という評価を下してもいる。ところで、中村氏の言う「かなりの程度」とは、どれくらいの実現度を指しているのだろうか。このような疑問を抱いてしまうのも、実は有島自身が執筆意図の実現度について疑念を呈していたからである。すなわち、浦上宛書簡において有島は、コケットを描くという執筆意図について、

[35] なお、本節で取り上げた場面は『日本国語大辞典（第一版）』（小学館、一九七四年三月一日）の「コケット」の項目で森田草平の『媒煙』（一九〇九年）、広津和郎の『死児を抱いて』（一九一九年）、網野菊の『妻たち』（一九三八年）の用例と共に出典として挙げられている。ところが、『日本国語大辞典』の「第二版」（小学館、二〇〇一年五月二〇日）では、坪内逍遥の『春迺屋漫筆』（一八九一年）と勝屋英造『外来語辞典』（一九一四年）の用例が新たに加えられる一方で、有島の『或る女』の用例だけが出典の中から外されている。このような現象からも、この場面の「コケット」が本来的な用法としては認定し得ぬ、揺れを含んだ逸脱的なものであることが証されよう。

ある程度までの醇化をしたが、その醇化が不足していたため、『或る女』は自分の期待を裏切って硬化したという作品観を披瀝していたのである。有島の述べる「醇化」や「硬化」とは、具体的にはどのような現象であるのか。ここで参考になるのが、有島が残した次の書簡である。

> 尚云ひ残した所を附加へますれば葉子が祖先から本能的に傳へられた姪亂の血（男を征服せんとする女の強大なる武器）を働かせる所には如何にも非人間的な惡魔性の心があらはれてゐますが、其他の方面に於て彼女が矢張人間であるといふ點です。人間の弱味と強味とを持つた人間であるという點です。あの書物の讀者は往々にしてその點を見遁してはゐないかと思ひます。
>
> （「檜山京子宛」、大正九年九月二十九日）[36]

これは大正九年九月二十九日に有島が檜山京子に宛てた書簡の一節である。この書簡は『或る女』の刊行後に有島が書いたものである。書簡で有島は『或る女』の葉子に言及し、彼女の淫乱の血は、遺伝によるものであること、そして、その淫乱の血とは、男を征服しようとする女の武器であることを説いている。この女の武器こそは、本論で論じてきたコケットリーに他あるまい。有島はコッケトリ―の発動要因として「非人間的な惡魔性の心」があると述べつつ、一方で、葉子については「矢張人間である」と述懐している。果たして、葉子が人間であるという有島の規定はどのような意味を持っているのだろうか。有島は葉子のことを「人間の弱味と強味を持つた人間である」と指摘している。つまりこれは、葉子がコケットリーを最後まで貫き通せるような「非人間的な惡魔性の心」を持つ人物ではなく、弱みと強みを持つ一介の「人間」でしかないということではないのか。

葉子はある局面ではコケットリーを発揮して男性を籠絡する強みを持っている

---

[36] 『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月三〇日、一一〇頁）

が、それを一貫して持ち続けることができず、別の局面ではコケットリーを発揮できないという弱みを抱えた人物として形象されているのである。これは、浦上宛書簡に披瀝された有島の、執筆意図をめぐる醇化と硬化の関係に対応するものとして解することができよう。葉子はコケットリーという「非人間的な悪魔性の心」を持つ女性に徹することができず、すなわち男性を征服するのではなく、男性に服従してしまうという弱みを持つ女性になってしまった。それが「人間」としての葉子の在りようであり、そこに葉子の限界もあるということになる。葉子がコケットとしての人物像から最終的に乖離していくのも、葉子を「非人間」としてではなく、弱みと強みを持つ「人間」として描くことしかできなかったという有島の書簡の文面と対応した現象なのである。コケットを描こうとした有島の執筆意図は、ある程度まで醇化できたが、途中で失速し、彼の構想とは異なるかたちで硬化してしまった。これは結局、有島が葉子を「非人間」として形象することができず、「人間」としてのリアリティを担保するかたちでしか彼女を描けなかったということであろう。その「人間」としてのリアリティを忠実に描こうとした時、葉子の人物像は当初の構想から乖離していったのである。

第五章

『或る女』における堕落する葉子像の形象

―有島武郎の人生観―

1. 問題提起

『或る女』の主題とは何か。この問題に対して、例えば笹渕友一氏は、主題の中核は「自我の解放、確立という近代精神史的、浪漫的問題にある」としている[1]。また、外尾登志美氏は有島が「破滅に積極的な意義を意図した」と指摘し、『或る女』の主題である「暗い力」が「時代の不合理をあらわにすると同時に、人間が本来持っている力を知らしめる」として、そこに「時代の旧弊への反発」を見て取る[2]。笹渕氏の「自我の解放」や、外尾氏の「旧弊への反発」といった主題の読み取りは、『或る女』の主人公である葉子のイメージを〈新しい女〉像として結ぶことに寄与していると言えよう。但し、ここで留意すべきは作者有島武郎が企図していた葉子の造形、乃至は『或る女』の主題である。

> 三月に発表する「或る女」は、日本に於ける覚醒期の初めに現はれた女で衝動は感じてゐながら、如何にして動くかを知らず男子と自分との調和を知らないために、<u>堕落した煩悶する悲劇的径路</u>を書いて見ようとしたのです。（談）
>
> （「読売新聞」大正八年三月三日）[3]

これは有島武郎が『或る女』の後編執筆前に読売新聞に載せた談話である[4]。この談話において有島は『或る女』の主題について触れている。有島は、「堕落した煩悶する悲劇的」な女の人生を描こうとしていたのである。有島は、単に「日本に

---

[1] 笹渕友一「『或る女』の主題―有島武郎研究―」（東京女子大学「比較文化研究所紀要」、第一七巻、一九六四年六月、二八頁）

[2] 外尾登志美「『或る女』の主題「暗い力」」（「日本文学」、一九七八年九月、五七頁）

[3] 「現代作家の取扱ふ小説中の女性」、『有島武郎（上）』、山田昭夫・内田満（著）、桜楓社、一九七五年一月、三一頁。なお、引用文中に施した傍線は引用者による。以下、本稿における引用文中の傍線はこれに同じ。

[4] 有島武郎は一九一九年四月一日から『或る女』後編の執筆を始め、同年五月二六日に脱稿に至った。翌六月一六日に『或る女』後編は発行されたということになる（『有島武郎全集』第四巻、解題、安川定男執筆、筑摩書房、一九七九年一一月、四五八頁）。

於ける覚醒期の初めに現れた」進歩的な女、即ち、旧弊から解放された〈新しい女〉を描こうとしたわけではない。『或る女』に描かれているのは、そういった〈新しい女〉が社会や男性との折り合いをつける術を知らず、その結果、「堕落し」「煩悶する」悲劇的な人生を歩むしかなくなるという理路なのである。では、堕落する女性の人生を描くことにいかなる文学的主題があるというのであろうか。ここで参考になるのが有島自身によって書かれた『或る女』の広告文である。

> 畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。若しその底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢てこの冒険を企てた……著者
>
> （『新潮』大正八年四月）[5]

この広告文において、有島は『或る女』の執筆にあたって「醜にも邪にも」ぶつかってみようという覚悟を持っていたことがわかる。続く文脈には「その底」という語があり、注目される。「醜」や「邪」といったものは、〈美／醜〉や〈正／邪〉という二項対立の劣位に置かれるものと言える。有島は、そういった劣位の概念として「醜」や「邪」があることを自覚していたのであろう。それゆえ、「その底」という底辺を表す表現を用いているのである。有島は、社会通念上は劣位、もしくは底辺に置かれる「醜」や「邪」と向き合うために、「その底」にまで降りていく冒険を企てたのである。そして、「その底」に何があるのかを読者に訴えるために『或る女』を書いたということになる。有島は、この冒険にあたって「その底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならない」と説いている。これは、「その底」にまで降りて行けば「人生の可能」が肯定されるという展望を逆説的に述べた文にほかならない。つまり、「醜」や「邪」とぶつかり、堕ちる所まで堕ち

---

[5] 「〔『或る女』廣告文〕」（『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年六月、三八三頁）

て行った底、即ち突き当りに「人生の可能」が開かれてくるはずだと、有島は説いているのである。このような有島の人生観は特異なものであると言えよう。それは、有島と同じく白樺派に属する長与善郎の次のような人生観と見比べると一目瞭然であろう。

> 今の世では何人も人道主義を輕蔑する資格を持たない。尊重すべきである。正義が世にもつと勢力を獲て來た時には人道主義はさう必要はなくなるであらう。人道主義は正義を目的とする。正義は眞の意味での平等、自由、を欲し不正義に對する人類の意志の審判である。併し正義は人類の理想ではない。人類はそれ以上のものに憧れる。啻に不正がない許りでなく、平等であり、自由である許りでなく、更に善であり、美であるより絶對的な、より積局的に幸福である超時間的な境涯を求める。[6]

これは、人道主義に立つ長与善郎の文章である。長与は、「正義」「善」「美」というものに価値を見出し、それを求めるところに人間の理想や幸福があると説く。このような価値観、乃至、人生観は、この文章が寄稿された雑誌『白樺』を拠点として活動する作家たちに共有されているものでもあった[7]。こういった長与に代表される白樺派の人生観を顧みれば、「醜」や「邪」といった概念は忌避すべきものあることが窺われる。そして、「堕落」という語もまた、人生の失敗や脱落としてあり、目指すべき目的としてあるわけではない。しかし、有島は、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」の底に目指すべき「人生の可能」があると考えていたのである。

ところで、この「人生の可能」について、それをどう解釈するべきかをめぐって立場の相違が見られる。例えば、野島秀勝氏は「〈人生の可能〉があると信じて行

---

[6] 長与善郎「再び人道主義について」(『白樺』一九一七年八巻六号、一〇二頁)

[7] 本多秋五によれば、「長与の言葉は、人道主義というものに対する『白樺』派の解釈、ひるがえっては『白樺』派の人道主義的主張そのものの公約数的表現であったとみなされていい」(「『白樺』と人道主義」『「白樺」派の文学』新潮社、一九六〇年九月、一三一頁)という。

きついたところに、それを全的に否定する虚無を見出すという『或る女』創作のアイロニー」があると指摘している[8]。石丸晶子氏は、有島が追求した本能的生活は「『或る女』において、それ自体としてはこの人生に価値も可能性も有してはいない」と述べる[9]。また、馬場和子氏は、「醜」や「邪」にぶつかり、その戦いに敗れた葉子の「人生の可能」は否定された事になると述べている[10]。こういった否定的、あるいは消極的な捉え方をする諸論に対し、肯定的に捉えている立場もある。例えば、笹渕友一氏は、作者自身のロマンティシズムとして「人生の可能探求という主体的な意欲」があると指摘する[11]。福田準之輔氏も笹渕氏の論に同調し、「可能な生の極限」を求める主人公として『或る女』の葉子を捉えようとしている[12]。また、山田俊治氏も、葉子の「生に執着」する姿が描かれたことで、その根本において「人生の可能」が否定されずに残されたと説く[13]。

このように先行研究は「人生の可能」という文言をめぐってそれを否定的、消極的に捉える立場と、それを作品の主題として肯定的に認める立場とに分かれている。論者も、そういった「人生の可能」について重視すべきという点は各氏に賛成する。但し、本稿の目的は、作品の主題として「人生の可能」が追求されているか否かを検証することにとどまるものではない。本稿では更に、堕落の先に「人生の可能」を見出すような特異な人生観を有島がどのように形成していったのかを分析し、そして、この特異な人生観と『或る女』の主人公早月葉子の形象がどのような関係にあるのかを明らかにしたい。

---

[8] 野島秀勝「詩への逸脱―有島武郎論〈最終回〉―」(「文学界」、一九六五年二月、八五頁)

[9] 石丸晶子「『或る女』論」(「国語と国文学」、一九七三年七月、一一頁)

[10] 馬場和子「『或る女』の主題をめぐって」(「国文白百合」六号、一九七五年三月、三八頁)

[11] 笹渕氏、前掲注1、二八頁

[12] 福田準之輔「『或る女』の位相」(「國文學解釈と教材の研究」、學燈社第二二巻一〇号、一九七七年八月、一二八頁)

[13] 山田俊治「『或る女』の方法と主題―葉子の生の行く片」(『有島武郎「或る女」を読む』、青英舎、一九八〇年十月、一一二頁)

2. 制度としてのキリスト教に対する有島の反応

有島武郎の特異な人生観の形成過程を追究するにあたって、キリスト教との関係は看過できないであろう[14]。本節では、有島がキリスト教とどのような関わりを持っていたかについて、有島が書き残した各種の記事や講演録などの周辺資料を手掛かりに具体化してみたいと思う。考察の端緒として、まずは次の資料を見てみたい。

> その時だ、森本君が突然私の生活の中に這入つて來たのは。或る日私を誘つて—その日は今でも忘れない、雨のそぼ降る陰鬱な日だつた—附屬農場の奥の糧秣小屋の中で、牧草の中に臥ころびながら、君が告白した所によれば、君は以前から私に眼をつけてゐたのださうだ。而してある機會にふと私のした事が私を胸友として君に選ばしめたのださうだ。君はその日宗教的探究の道伴れになれと、私に勸めた。その熱意は私を動かした。私は決心してそれを承諾した。而してその日から私の宗教的生活は廻轉した。
>
> (「第四版序言〔『リビングストン傳』序〕」、『東方時論』、大正八年二月一日—四月一日)[15]

これは、有島と森本厚吉の共著『リビングストン傳』の第四版のために「序言」[16]として書かれた文章の一節である。ここには、有島の「教會を脱せる所以」が

---

[14] 有島とキリスト教の関係を論じたものとして、川鎮郎「有島武郎とキリスト教—研究史的に—」(有島武郎研究叢書第七集『有島武郎とキリスト教』、右文書院、一九九五年八月、三六頁)がある。川氏によれば、有島の思想・精神の形成にキリスト教が大きな役割を果たしたという。

[15] 『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年六月、三六六頁

[16] 「第四版序言〔『リビングストン傳』序〕」は、当初「「リビングストン傳」の後に」と題して大正八年(一九一九)二月一日—四月一日発行の『東方時論』第四巻第二号—第四号(二月—四月)に掲載された。その後、「第四版序言」と改題し、大正八年六月十五日発行の『リビングストン傳』(第四版、警醒者書店刊)に収録された(『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年六月、解題、五四八頁)。

披露されている[17]。それゆえ、彼とキリスト教の関係を考察するにあたっては見過ごせない文献と言える。有島はこの文中で、森本からキリスト教への入信を勧められた時のことを回想している。この当時、有島と森本は共に札幌農学校で学ぶ学生であった。森本は既にキリスト教の信者であり、ある雨の降る日に有島を農場の奥にある小屋へ誘い出し、キリスト教への入信を迫ったとある。その勧誘は「宗教的探究の道伴れになれ」というもので、有島は森本の熱意に動かされ、その勧誘を承諾した。この一件を契機として有島武郎の「宗教的生活」は始まる。

> 尚此時基督教ハ始めて小子之心中ニ出來り殊ニ小子が眞に朋友とたのむ一人（森本と申し前年出京致居候人）之一生懸命なる助力によりて此ニ斷然基督教ヲ信する一人と相成るべく決心仕候
>
> 此決心ハ如何なる事ありとも決して變更仕間敷基督ニ生死を捧申候
>
> さりとて世之所謂基督信者と相成候心得ハいささかも無之彼等ハ却而小子之大敵ニ御坐候
>
> （「有島祖母・両親宛」、明治三十二年二月二十一日）[18]

これは明治三十二年二月二十一日に祖母と両親へ宛てた書簡の一節である。書簡の内容によると、有島が親友と考えている森本の一生懸命な助力により、キリスト教に入信する決心がついたということ、そして、その決心はいかなる事があっても決して変更することはなく、キリストに自分の人生を捧げるつもりであるということ、これは世間の人が所謂キリスト教信者になるのとは異なり、並大抵の決心ではないということ、などが綴られている。この書簡においても、有島がキリスト教に入信するうえで森本が大きな役割を果たしていることが分かる。但し、先ほどの資料との違いは、ここでは有島が主体的にキリスト教への入信の決意を表明し、

---

[17] 「竹崎八十雄宛」大正九年一月十七日（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月、一三頁）

[18] 『有島武郎全集』第十三巻（筑摩書房、一九八四年六月、一四頁）

それが強い信念として語られている点である。なお、川鎮郎氏はこの書簡を送った日が有島のキリスト教入信の時点であると指摘する[19]。但し、川氏の説く入信はあくまでも有島の内面で起きた信仰心の動きを捉えたものであり、外形的にはこれより二年後の入会式をもって有島の入信時とすることになる[20]。

> 會員ヘハ洗禮式ヲ行ハス入會式ヲ以テ會員ト爲スハ洗禮式ヲ司トル者ナキヲ以テ一時ノ便宜ニ由リ執行スル旨ヲ以テセリ
>
> （「札幌獨立基督教會　日誌〔抄〕」、明治三四年三月廿四日）[21]

これは、有島が書いた明治三十四年三月二十四日付の日誌の一節である。この日、有島は札幌独立基督教会の会員になった。札幌独立基督教会では、内村鑑三の提唱する洗礼・聖餐廃止主義に則り、入会式をもって信者と認定する方式をとっており、有島もその方式に準じて洗礼式を受けずに、入会式の執行によりキリスト教信者となったのである。有島が洗礼式を受けなかったことについて、佐古純一郎氏は、聖書の客観的な裏づけとなる洗礼を受けず信仰が成り立つものではないとして、これを有島の信仰上の重大な問題と指摘している[22]。この指摘に対しては、笠原芳光氏による反論があり、問題は洗礼という形式の有無ではなく、信仰の主体的把握とその不断の確認という内実の有無であるという[23]。有島の入信時をどこに特定するかという論議は、ここに紹介した諸論以外にも多く見られるが、本稿で重視したいのは、そういったキリスト教との始まりの曖昧さが、この後の有島の信仰心の揺れを象徴しているかのように映っている点である。有島がキリスト教を

---

[19] 川鎮郎「有島武郎における『神義論』的懐疑の成立」（日本文学研究資料叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月、一七七頁）

[20] 上杉省和「有島武郎のキリスト教入信とその周辺―新資料による覚え書き―」（『国語国文研究』三一、北海道大学国語国文学会、一九六五年九月）

[21] 『有島武郎全集』別巻（筑摩書房、一九八八年六月、三八三頁）

[22] 佐古純一郎「信仰」（『近代日本文学の倫理的探究』、審美社、一九六六年七月、二五八頁）

[23] 笠原芳光「背教の論理―有島武郎の場合―」（『キリスト教社会問題研究』、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、一九七二年三月、八六頁）

棄教する源泉をその始発の在り方に求めるという発想は佐古氏と同様のものとなるが、佐古氏が洗礼に着目しているのに対し、本稿では入信時の不特定性に着目しており、その点で佐古氏とは立場を異にする。

ここで実際に有島の信仰心の揺れを見てみよう。

> 『お前は本當の信仰上の變身を經驗してはゐない』――是れがこの一年間に於ける私の思索の最後の斷案だつた。信仰を受け入れて以來私にはどれ丈けの變化が來たらう。（略）私の持つてゐる善根は――若しありとすれば、それは生れたときから持つてゐた其儘の善根だつた。何物も附加へられてはゐなかつた。而して惡種の根も亦一つとして拔去られてゐるのはなかつた。基督の言行から倫理の鞭韃を受けて自分の生活が向上してゐるのを惡いといふのではないが、それ丈けでは信仰の人といふ事は出來ぬ。基督の言行が生み出された其力の源に私も瞑合するのでなければ畢竟凡ての事は徒事だ。さう思はずにはゐられなくなつた。此自覺は私に取つては恐ろしい打撃だつた。
>
> （「第四版序言〔『リビングストン傳』序〕」、『東方時論』、大正八年二月一日―四月一日）[24]

これは、先に見た『リビングストン傳』の「序言」の一節で、有島がアメリカへの留学中に彼の心境に起きた事を綴った部分である。有島は、明治三十六年八月に渡米し、クエカー宗の正統派の学校でキリスト教の教育を受けていたのだが、その留学生活が一年を過ぎた頃に、彼は自身がキリスト教によって何も変化してはいないことに気づき、それを「恐ろしい打撃」と自覚する。有島は、善悪に対する自身の根源的なものについて、それは生まれた時のままであり、何一つ後から付け加えられたり、あるいは抜き去られたりはしていないということに気づく。有島は、キリスト教の教えを受け、自分の生活が向上しているという自覚を持つが、そのよ

[24] 前掲注 16、三七〇～三七一頁

うに一方的に利益を享受するだけでは本当の信仰とは言えないのではないかと考えている。そして、有島は、キリスト教の教えが生み出された力の根源に自分も一体化しなければすべての事は無駄に終わるとも言っている。しかし、有島はそのような一体化を果たすことが自分には出来ていないと自覚し、「打撃」を受けたのである。

> 心の空虚が空虚として遂に消え去らないのはあまりにも當然のことだ。外的には他の信者よりもいとど敬虔らしく而して一層まめやかなふうで聖像の前に額づき跪いた私ではあるが、それはただ單にそれらしくでありそんなふうであつたといふに過ぎなかつたのだ。そこで私は基督教信者としての私を棄てた。
>
> （「卽實の生活と宗教」、『新家庭』、大正十一年十一月一日）[25]

これは、『新家庭』に掲載された有島の談話録の一節である。ここには、有島がキリスト教の信仰を捨てた動機の一端がうかがえる。有島はキリスト教を本心から信仰できない自分に対して不信感を募らせ、「空虚」感に苛まれるようになっていた。空虚感に襲われた有島は、外的には他の信者よりも「敬虔らしく」「まめやかな」体裁で聖像の前にぬかづき、ひざまづいた。ここで留意すべきは、有島のそういった態度や敬意は「單にそれらしくでありそんなふう」であったという、いわば形式的なものであったという点である。彼は自分の信仰が形式的なものであるということを認識し、動揺する。形の上ではキリスト教信者としての生活を維持していたが、内面ではキリスト教信者であることへの懐疑と苦悩が深刻化していく。そして、ついに有島はキリスト教を棄てることにしたとある。ここには、かつて祖母と両親宛ての書簡でキリスト教入信への決意を綴った有島の姿は片鱗も無い。有島が信仰心というものに疑念を抱き、それを単なる形式的なものと捉えている

[25]『有島武郎全集』第九巻（筑摩書房、一九八一年四月、三〇四頁）

ことは次の資料にもうかがえる。

> 制度としての宗教に對しては自分は全然同情もなく共鳴も持つてゐない。一つの信念は何時でも或る形式によつて表はされようとする傾向と要求とを持つてゐるものではあるが、その信念が信念として何處までもその生命力を持ち續けるためには、絶えず形式によつて付き纏はれることからそれ自身を解放しつゝ進まねばならない。

（「反キリスト教問題より一般宗教批判へ」、『讀賣新聞』、大正十一年五月二日）[26]

これは大正十一年五月二日発行の『讀賣新聞』に掲載された有島の宗教批判についての談話筆記である。有島武郎は「制度としての宗教」に対して同情もなく共鳴もしていない。彼は伝統的制度、組織に対する根本的な不信を表明している[27]。更に有島は、信念が生命力を持ち続けるためには、絶えず「形式によつて付き纏はれること」から自身を解放しなければならないと説く。この「形式によつて付き纏はれること」とは制度としての宗教を指すと見てよい。ここには、形式的なもの、即ち宗教という制度から自身を解放しようとする有島の姿が読み取れる。再度、『リビングストン傳』の「序言」を顧みておきたい。

> 私はこの告白文の初めの方で、自分の性慾と信仰との間に始終苦しんだと書いてゐる。…（略）…私達は子孫を設ける爲めに、祭壇に捧げ物をするやうな心持ちで夫婦の交りをしたか。私は斷じて否と答へなければならない。この切

---

[26] 前掲注 25、二二三頁

[27] 有島が制度としての宗教に否定的な見解を持っていることは、講演録「ホイットマンに就いて」からもうかがえる。そこでは、キリスト教における「舊教」と「新教」の闘争の歴史に触れつつ、「基督教會の罪惡史は舊教全盛時代を以て終りを告げてゐるように考へる傾きがありますが、私は決してさうだと思ひません。基督新教會もひとつのインスティテュションであつて見れば、制度といふものが持つ自らな弊害は免れることが出來ないのです」（「ホイットマンに就いて」、『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月、五三七頁）と、宗教が制度としてあるがゆえに抱え込む弊害を指摘している。

實な實際の經驗が私のやうな遲鈍な頭にも純靈的といふやうな言葉の内容の空虚と虚僞とを十分に示してくれる結果になつた。私は苦しんだ。何んとかしてこんな堕落した考へ（その時私はさう思つてゐた。）から自分を救ふ爲めに出來るだけの事をして見ようとさへした。…（略）…結婚生活に這入つてから私は益々神聖な教會へは出席する事が出來なくなつた。…（略）…私は森本君にも相談せず、妻にも告げずに、突然一枚の退會届を私の靈の誕生地なる獨立教會に送る事にした。

（「第四版序言〔『リビングストン傳』序〕」、『東方時論』、大正八年二月一日—四月一日）[28]

これは自己の性欲と信仰との葛藤に苦しむ有島武郎の心境である。有島は明治四十二年（1909）四月、神尾安子と結婚した[29]。夫婦生活を経験した彼は、人間が本来性欲を持つ存在であることを認識する。そして、霊（精神的な男女関係）と肉（肉体的な男女関係）という二元論的な発想において専ら霊を重んじる「純靈的」という言葉の「空虚」と「虚僞」を感じ取る。クリスチャンとして歩む人生と、人間としての本来的な欲求に従う生活との間で葛藤を抱え込んだわけである。この時の有島は、性欲に傾きつつある自己を「堕落」と捉え、その性欲から自己を救おうとした。これはクリスチャンとして生きる側の価値観に立った見方である。しかし、有島はさんざん迷った挙句に自分の欲求に従って行動する生活を選び、明治四十三年五月、「退會届」を「靈の誕生地なる獨立教會」に送って背教者となるに至る。

有島武郎の背教の原因に関する論考は多く提出されている。川鎮郎氏は、「神義論」的な懐疑という視点から背教の動機を説明する[30]。北原照代氏は、予定説の

---

[28] 前掲注 16、三七七頁～三七九頁
[29] 杉田智美「有島安子」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月、二九〇頁）
[30] 川氏、前掲注 14、三七頁

教義に懐疑を抱くことが信仰への離反の原因だと論じる[31]。小玉晃一氏は、形式と偽善に対する有島の嫌悪感を指摘する[32]。これらは、キリスト教に対する有島の不信感を指摘する論として括ることができよう。一方、有島の性欲に注目する論もある。上杉省和氏は、「人間性解放」の時代思潮に目覚めた有島が「霊肉二元(『聖書』と性欲)」の相剋を抱え込むと論じる[33]。橋本雅子氏は、「清浄」への憧れと「肉欲」という堕落に落ちた自分への軽蔑との交錯が信仰を手放す理由の一つであったと説く[34]。あるいは、西洋との接触に注目する論もある。西垣勤氏は、ピーボディによるホイットマンとの出会いや金子喜一によるアナーキズムとの出会いが背教の原因となったと論じている[35]。石丸晶子氏は、ニーチェが有島の信仰崩壊に関わっていると論じている[36]。ここに挙げた諸論は管見に入った限りであり、この他にも、背教の原因を複数の組み合わせとして捉える論者もいるであろう。但し、これらの理由の根本にあるのは、本節で見てきたような有島の「形式によつて付き纏はれることからそれ自身を解放しつゝ進まねばならない」という思想なのではないか。本稿では制度から自己を解放するためという動機を背教の原因として重視しておきたい。制度としての宗教から解放された有島が次に目指したのは文学であった。次節では、その文学へと転向していく有島の様子について見ていくことにする。

---

[31] 北原照代「ユニテリアン受容を背景とした有島の信仰実態の検証」(『有島武郎研究』第二十三号、二〇二〇年五月、五一頁)

[32] 小玉晃一「有島武郎・アメリカ時代管見」(有島武郎研究叢書『有島武郎とキリスト教』第七集、右文書院、一九九五年八月、一〇六頁)

[33] 上杉省和「有島武郎と札幌独立基督教」(有島武郎研究叢書『有島武郎とキリスト教』第七集、右文書院、一九九五年八月、六五頁)

[34] 橋本雅子「ホイットマン・キリスト教・有島武郎」(『ホイットマン研究論叢』(27)、二〇一一年九月、一二頁)

[35] 西垣勤「過去をどうみつめるか―「『リビングストン伝』第四版の序」をめぐって―」(『有島武郎論』、有精堂、一九七八年六月、六三頁)

[36] 石丸晶子「有島武郎におけるニーチェ―離教そして「本能的生活」構築の支柱として―」(『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月、七頁)

3. 背教から文学へ、その実践としての葉子の形象

信仰上の悩みを抱え込んだ有島は、アメリカ滞在中において、文学という道に接近していた[37]。そして、日本に帰国した三年後には、明治四十三年四月一日発行の『白樺』の創刊に参加し、文学活動を始める[38]。因みに、前節で見てきた有島のキリスト教の背教、即ち、彼が札幌独立基督教会に退会届を出したのは同年の五月のことである。制度としての宗教から自身を解放しようとした有島は、なぜ文学の道へと入っていったのか。この問いを考えるうえで参考となるのが次の資料である。

> 文學が供給するものは、その後に潜んで働いて居る衝動の生き生きした姿の表現であります。此の衝動卽ち本能こそは、私共人間の生命の中軸をなすものであつて、然もその姿は私達の日常生活の混亂によつて晦まされ、容易に把握することの困難なものであります。夫れを文學は朧げながら有機的な姿の儘で、私達の目の前に現れしめようとするのです。かくして、人は現在の道德、習慣、制度を超越した赤裸々な氣持ちで、この本能の力に觸れ、そこに生命の躍進を促すべき暗示を純粹な形に於て受取る事が出來るのです。これのみが文學の有する目的であり、價値であります。
>
> （「生活と文學」、『文化生活研究』、大正九年五月十日―十年四月十日）[39]

これは通信教育を目的とする月刊雑誌『文化生活研究』に掲載された有島の講演

---

[37] 菊地弘「文芸観」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版社、二〇一〇年一二月、五二頁）

[38] 瀬沼茂樹によれば、『白樺』が創刊後、有島は「ヨオロッパ留学から帰った弟生馬とともに同人に加わり、『白樺』を舞台として文学的出発をした」（瀬沼茂樹「結婚前後の有島武郎―教授時代のうち」、『有島武郎研究』、瀬沼茂樹・本多秋五編、右文書院、一九七二年一一月、四一頁）という。

[39] 『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月、三八六頁

録の一節である[40]。ここには有島の文学観がうかがえる。有島にとって、文学とは人間の奥底に潜んでいる衝動を表面化するものとして捉えられている。この衝動とは「本能」のことだと言い換えられているが、しかし、その本能は日常生活の混乱によって晦まされていて、容易に把握できるものではないとある。この日常生活とは、後続する文脈によれば「道徳、習慣、制度」ということになる。普段はそういった諸制度によって抑圧されている本能が、文学においては解放されるというのが有島の考え方である。有島はこの制度からの解放こそが文学の目的であり、価値であると説く。有島は文学の力によれば人間が制度から解放されると考えている。先にも述べたように、有島がキリスト教を離れようとしたのは制度としての宗教に不信を抱いたためであった。それゆえ彼は、そういった制度から自身を解放するための手段として文学を選び、その道へと歩む方向を転換したのである。果たして、文学へと転向した有島の心境はどのようなものであったのか。ここで再び『新家庭』に掲載された有島の談話録を開いてみたい。

> 私はやがて文藝の道へ歩みを始めた。私はそこで始めて私の凡てを、即ち内も外もしつくりと抱擁されたが、それは基督教信者であつた自分とは全く反對の自分を見出したことによつて、大きな喜悦であり歡喜であつた。あの以前の堪へ難い空虚が寸分の隙間もなく滿たされたことによつて、私は私の一切を以て文藝上の思索をふかめ創作をいそしんだ。
>
> （「即實の生活と宗教」、『新家庭』、大正十一年十一月）[41]

これはキリスト教を離れた後の有島の述懐である。背教者としての有島は「文藝の道」を歩み始め、そして、キリスト教信者であった自分と全く「反對の自分」を見出すことになった。文学への転向を決意した有島は、かつてはキリスト教からも

---

[40] 佐々木靖章「解題」、前掲注 26、六七四頁
[41] 前掲注 25、三〇四頁

たらされていた「空虚」感が満たされ、「文藝」上の思索を深めるようになり、文学創作に取り組んでいく。ここで重視すべきは、有島が文学創作に取り組む自分のことを、クリスチャンとは「反對の自分」であると捉えている点である。つまり、有島はキリスト教のアンチテーゼとして文学があるという認識を持っているのである[42]。この認識を考えるうえで参考になるのが次の資料である。

> ユダヤの國の律法とは卽ちその時代の道德として見られるが、その道德によれば姦淫せる者は罪として罰せられた。けれども姦淫せる女が基督の前に跪いて懺悔と悔い改める心からその罪の裁きを乞ふ時、基督はその罪は購へるものとした。
>
> （「卽實の生活と宗教」、『新家庭』、大正十一年十一月一日）[43]

これは、同じく『新家庭』に掲載された有島の講演録の一節である。ここには姦淫に対するキリスト教の考え方が紹介されている。それによると、キリスト教では姦淫した女が「罪」を自覚し、その裁きを乞う時、キリストはその「罪」を贖えるものとしている。これは言い換えれば、姦淫とは本来、「罪」となる行為に他ならないということであろう。なお、有島が〈姦淫の女〉というモチーフに執着していたことが宮野光男氏によって指摘されている。宮野氏はこの〈姦淫の女〉が、『或る女のグリンプス』の主人公田鶴子の原型であるとも述べている[44]。その田鶴子を原型としているのが、『或る女』の主人公葉子であることを踏まえれば、有島は自作の文学において〈姦淫の女〉というモチーフを繰り返し採用しているとも言える。これはつまり、キリスト教の価値観において否定されるべき存在の〈姦淫の

---

[42] 石丸晶子によると、『或る女』をはじめとする作品群は有島がキリスト教の人間観と倫理思想のアンチテーゼを樹立することへ向かう道を示しているという（「有島武郎の文学世界とキリスト教」、『キリスト教研究』第三七号、二〇二〇年四月、四〇頁）。

[43] 前掲注 25、三〇六頁

[44] 宮野光男「『或る女』論（一）―田鶴子と〈Ego〉―」（『有島の文学』、桜楓社、一九七四年六月、一四七頁）

女〉に対し、有島は文学的モチーフとして価値を見出しているということであろう。ここに、キリスト教と有島文学との間における対抗的な価値観の構図を見出しておきたい。なお、『或る女のグリンプス』はその後『或る女』前編へと改稿され、主人公の田鶴子も葉子へと名を変える。改稿された『或る女』では更に後編が書き足され、主人公の女性の人生も展開を見せることになっている。そして、この後編に相当する部分においても有島は、引き続き〈姦淫の女〉というモチーフを採用している。

> 葉子は自分の不可犯性（女が男に對して持つ一番強大な蠱惑物）の凡てまで惜しみなく投げ出して、自分を倉地の眼に娼婦以下のものに見せるとも悔いようとはしなくなつた。二人は、傍眼には酸鼻だとさへ思はせるやうな肉慾の腐敗の末遠く、互に淫樂の實を互々から奪ひ合ひながらずるずると壊れこんで行くのだつた。（三十四章・三〇四頁）[45]

これは、『或る女』の後編に描かれた下船後の葉子と倉地の密会の様子である。ここには、葉子の心境が語られている。葉子は、木村という婚約者を裏切り、倉地という妻帯者との生活を選んだ。しかし、そういった二人の同棲生活は世間からの批判の目に堪えなければならないものであった。その二人が初めて旅行をすることになり、日常生活から解放される。これはつまり、「道徳、習慣、制度」からの解放に他ならない。二人は、本能という衝動に身を委ねるかのように淫楽の一晩を過ごした。葉子は自分の「不可犯性」の全てを倉地の前に曝け出し、その結果、自分が倉地の眼に「娼婦以下」のものとして映ったとしても構わないとさえ思うのであった。この「不可犯性」は、女性が男性に対して持つ一番強大な蠱惑物であると付言されているが、これは即ち女性の貞操を指すと言えよう。貞操とは、性的な純

[45] 『或る女』の本文は、『有島武郎全集』第四巻（筑摩書房、一九七九年一一月）により、章数・頁数を記した。以下同様。

潔を保つことである。とりわけそれを女性に要求するのは社会が作り上げた制度と言ってよい。つまり、女性が貞操を守るべきであるという考え方は、制度による抑圧なのである。このような前提に立ったとき、「娼婦」という存在が別の意味を持ち始めてくるのではないか。いわば、娼婦とは女性に貞操を要求するような制度から解放された存在の象徴なのである。そして、葉子はその娼婦以下の位相に自己を置く。これは、単なる下方への自虐的な比喩としてあるだけでなく、制度からどれだけ解放されているかを喩える表現ともなっているのである。

社会階層の下方に生きる女性、特に貞操を売って生活する女性に目を向ける葉子の在りようは他の箇所にも見られる。

> 倫理學者や、教育家や、家庭の主權者などもその頃から猜疑の眼を見張つて少女國を監視し出した。葉子の多感な心は、自分でも知らない革命的とも云ふべき衝動の爲に的もなく揺ぎ始めた。葉子は他人を笑ひながら、而して自分をさげすみながら、眞暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覺なく迷ひ入つて、仕舞に驀らに走り出した。誰れも葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を教へてくれる人もなかつた。偶ま大きな聲で呼び留める人があるかと思へば、裏表の見えすいたぺてんにかけて、昔のまゝの女であらせようとするものばかりだつた。葉子はその頃から何所か外國に生れてゐればよかつたと思ふやうになつた。あの自由らしく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てゝ行く事の出來る女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外國人の良心といふものを見たく思つた。葉子は心の奥底でひそかに藝者を羨みもした。日本で女が女らしく生きてゐるのは藝者だけではないかとさへ思つた。（六章・四二頁）

これは、学生時代の葉子を描いた叙述である。葉子の周囲には「倫理學者や、教育家や、家庭の主權者」といった大人たちがいて、彼女を監視していた。彼らは、

葉子を「昔のまゝの女」にしようとする者ばかりであった。つまり、葉子を古い制度で束縛しようとしていたのである。葉子はその制度に縛られるのを嫌い、外国人に生まれればよかったと思う。葉子の憧れる外国の女性は「自由らしく」見える生活を送り、男性と肩を並べて対等に生きている存在なのであった。そして、そのような外国の女性と同様の立場の存在として俎上に載せられてくるのが「藝者」である。葉子は「藝者」を否定的な存在として蔑視するわけではない。むしろ、羨望の眼差しで仰ぎ見ている。更には、日本という社会で女性として自立できているのは「藝者」だけだとさえ思う。葉子にとって「藝者」とは、古い制度から解放された「自由らしく」見える存在なのである。

さて、ここに見てきた「娼婦」や「藝者」という女性たちは、いわば〈姦淫の女〉であろう。社会制度の側からは貞操を売って生きる蔑視すべき存在となるが、葉子は彼女たちに価値を見出していく。葉子が見出した価値とは何か。それは、制度から解放された生き方を実践しているということになろう。これが、葉子を通じて『或る女』で展開された〈姦淫の女〉に対する肯定的な価値付けである。そして、それはキリスト教に対抗する文学の側からの価値観の提示ということになる。

ここで、参考として有島自身が〈姦淫の女〉に対してどのような認識を持っていたかについて顧みておきたい。

> 女性は唯一の女性美卽ち本能を男子の前に提供した。男子はそれを飽くことなく何處まで篡つた。その結果、女性本來の自然さが失はれて仕舞つた。その甚だしい結果は藝妓、娼妓、密淫賣婦となつて現はれた。女性は仕方なしに必要以上に性慾的になつて行つた。墮落せずにはゐられなくなつた。
>
> （「本能を篡れた女性」、『婦女世界』、大正十年一月一日）[46]

これは『婦女世界』に掲載された有島の講演録の一節である。有島は女性が自身

[46] 前掲注 39、五一二頁

の唯一の価値である女性美を男性に提供するとしつつ、一方で、男性はその女性美を飽くことなく奪うと説く。その結果、女性本来の自然さが失われてゆき、ついには「藝妓、娼妓、密淫賣婦」になるとも言う。そして、こういった男女の関係性を背景として、女性は「必要以上に性慾的」になり、「堕落」せざるをえなくなると述べる。このような有島の考え方を『或る女』の葉子に当てはめてみた時、〈姦淫の女〉である葉子もまた、「藝妓、娼妓、密淫賣婦」といった女性と同じく「堕落」への道を歩むことになることが予測されてくる。次節では、この「堕落」への道を歩む葉子について検討を加えていく。

4. 堕落する葉子像

考察の端緒として、「堕落」についての用例を簡単に確認しておきたい。『或る女』において、「堕落」の語は全部で八例ある。いずれも後編の部分に表出する。言葉の用例だけで考えれば、葉子の堕落は後編から始まるということになろう。但し、葉子の人生が堕落へと転じる予兆は前編の部分に見出すことができる。それを象徴的に表しているのが「崖の際」という表現である。

> 何時の間にか葉子は一番近しい筈の人達からもかけ離れて、たつた一人で崖の際に立つてゐた。そこで唯一つ葉子を崖の上に繋いでゐる綱には木村との婚約といふ事があるだけだ。そこに踏みとゞまればよし、さもなければ、世の中との縁はたちどころに切れてしまふのだ。世の中に活きながら世の中との縁が切れてしまふのだ。木村との婚約で世の中は葉子に對して最後の和睦を示さうとしてゐるのだ。葉子に取つて、この最後の機會をも破り捨てようといふのはさすがに容易ではなかつた。木村といふ首桎を受けないでは生活の保障が絶え果てなければならないのだから。（十一章・八五頁）

これは、葉子がアメリカへ向かう絵島丸の船中で過去を回想している場面である。葉子の脳裏に浮かんでいるのは周囲の人々が離れていってしまい、いつの間にか孤立してしまった自分の姿である。彼女は一人で「崖の際」に立っていた。かろうじて葉子を崖の上に繋いでいる綱は木村との婚約であった。アメリカに行って木村と結婚すれば、葉子は幸せな生活を過ごすことができる。しかし、木村と結婚しなければ、葉子と世の中との縁は全部切れてしまうのである。因みに、木村との結婚は親類縁者たちの勧めるものであった。両親を失い、経済的に逼迫しつつあった葉子は、いわばお金のために木村との結婚に応じざるを得なかったのである。ここに綴られている葉子の心境は、木村との結婚以外に選択肢が無いという追い詰められたものとなる。但し、これらはあくまでも回想の中での話となる。留意すべきは、この時点で葉子は倉地という男性と出会い、恋愛関係に陥ってしまったということである。

> 然し葉子はとうとう今朝の出來事に打突かつてしまつた。葉子は恐ろしい崖の際から目茶苦茶に飛び込んでしまつた。葉子の眼の前で今まで住んでゐた世界はがらつと變わつてしまつた。木村がどうした。米國がどうした。養つて行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲ひ續けてゐた不安はどうした。人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつてゐた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分獨りに得さへすれば……。今まで知らなかつた、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！（十六章・一三三頁）

これは、絵島丸の船中で倉地と肉体関係を結んだ後の、葉子の心境である。葉子は、木村との婚約、妹たちや娘の定子の養育、生活の不安、そして自尊心などを放り投げ、「木葉微塵」に無くなってしまったと感じている。注目したいのは、倉地と関係を結んでしまったことについて、「崖の際」から飛び込むと表現している点

である。葉子が世の中、即ち社会で生きていくには木村との結婚しか選択肢は無かったはずであった。こういった状況において、葉子はその選択肢を放棄する。この放棄は社会制度からの逸脱に他ならない。その逸脱は「崖の際」から下方へと落ちていくものとしてイメージされている。しかし、葉子はその落下を悲観的には捉えていない。倉地を得ることで社会から受けるであろう「屈辱」も「蜜」と思おうとする。屈辱というものは、本来、受け入れ難いものであるはずだ。ところが葉子はそれを「甘い」と形容し、あえて甘受していく姿勢を見せる。このような葉子の転倒した発想は、先に見てきた「娼婦」や「藝者」に対する葉子の価値観に通じるものと言える。但し、このような葉子の発想は、社会制度の側からは到底受け入れられるものではない。なお、この社会制度側の人物として作品に描かれているのは葉子の婚約者である木村となる。ここで、その木村が見つめる葉子の生き方を見てみよう。

> 縱令貴女にどんな過失どんな誤謬があらうとも、それを耐へ忍び、それを許す事に於ては主基督以上の忍耐力を持つてゐるのを僕は自ら信じてゐます。誤解しては困ります。僕が如何なる人に對してもかゝる力を持つてゐると云ふのではないのです。唯貴女に對してゞす。貴女は何時でも僕の品性を尊く導いてくれます。僕は貴女によつて人がどれ程愛し得るかを學びました。貴女によつて世間で云ふ<u>堕落とか罪惡とか</u>云ふ者がどれ程まで寛容の餘裕があるかを學びました。而してその寛容によつて、寛容する人自身がどれ程品性を陶冶されるかを學びました。僕は又自分の愛を成就する爲めにはどれ程の勇者になり得るかを學びました。（三十章・二六九～二七〇頁）

これは木村が葉子宛に書いた手紙文の一節である。倉地との関係を選んだ葉子を木村は「過失」と「誤謬」を犯す人であると断じる。更に木村は、葉子を「堕落」や「罪惡」という語で捉えていく。こういった木村の筆致からは、葉子のとった行

動が決して肯定視されるものではないことがうかがえる。これらは社会制度に則った価値観による評定と見てよい。しかし、木村はまた、クリスチャンとしての相貌を見せてもいる。彼は「主基督」以上の忍耐力をもって、そのような否定されるべき葉子のことを全て受け入れ、彼女の「堕落」と「罪悪」を許そうとしていく。それを許容するか否かについては措くとして、いずれにしろ「堕落」や「罪悪」というものは否定されるべきものに違いはあるまい。第三者の客観的な視点、即ち社会制度から捉えた葉子の姿は「堕落」した人物として映ってくるということになる。では、葉子自身はこの「堕落」ということをどのように捉えているのか。

> 然し葉子の心の底には何所かに痛みを覺えた。散々木村を苦しめ拔いた揚句に、なおあの根の正直な人間をたぶらかしてなけなしの金を搾り取るのは俗にいう「つゝもたせ」の所業と違つてはいない。さう思ふと葉子は自分の堕落を痛く感ぜずにはゐられなかつた。（三十章・二七五頁）

これは木村の手紙を読んだ葉子が「堕落」を自覚する場面である。帰国後、倉地と同棲生活を送っていた葉子であったが、彼女は破談後も木村から資金援助を受けていた。葉子はそのことについて呵責を覚える。そして、木村を利用して生活する自分のことを「堕落」という語で表現する。ここにおいて、自身を堕落する人物であると捉える葉子像が形象されるに至る。これまでに見てきた葉子であれば、「娼婦」「藝者」「屈辱」などと同様に、この「堕落」という否定的な生き方も転倒した発想によって肯定的な価値づけをするところである。ところが、この「堕落」という語をめぐっては、そういった転倒が見られない。

> 堕落と云はれようと、不貞と云はれようと、他人手を待つてゐては迚ても自分の思ふやうな道は開けないと見切りをつけた本能的の衝動から、知らず識らず自分で選び取つた道の行手に眼も眩むやうな未來が見えたと有頂天になつ

た繪島丸の上の出來事以來一年もたゝない中に、葉子が命も名も捧げてかゝつた新しい生活は見る見る土臺から腐り出して、もう今は一陣の風さへ吹けば、さしもの高樓ももんどり打つて地上に崩れてしまふと思ひやると、葉子は屢々眞劍に自殺を考へた。（三十九章・三六二頁）

これは倉地との恋愛が破局を迎えた際の葉子の心境である。「堕落」と言われても、「不貞」と言われても、葉子は世間からの批判を無視して、自分の本能に従って倉地との恋愛に溺れていた。しかし、その「有頂天」となった恋愛生活は一年も経たないうちに破綻してしまった。葉子にとって、自分の人生は未来の展望が見えず、ついに自殺を考えることになる。葉子の堕落する人生は結局破滅を迎えることになったのである。当初、葉子は娼婦や芸者という姦淫の女の生き方に価値を見出し、そのような制度から解放された生き方を肯定していた。一方、経済的な原因で木村と結婚するという選択肢を選ばざるを得なかった。しかし、倉地と出会った後、葉子は木村との婚約を裏切り、「本能的の衝動」から娼婦や芸者の生き方を実践し、即ち、制度から逸脱するという道を歩んでいた。その時、社会的批判を浴びる葉子は自分の屈辱を甘受していた。ここに見てきた娼婦や芸者という姦淫の女に対する肯定視や、世間から受ける屈辱を甘んじて受け入れることなど、いずれも社会の反対側に立っている転倒した発想である。

そもそも、なぜ葉子はこのような転倒した発想を持っていたのか。これは本稿の問題提起において取り上げた有島武郎の「醜」や「邪」、あるいは「堕落」にこそ目指すべき「人生の可能」があるという人生観と同じ見立てなのであろう。言い換えれば、葉子の転倒した発想の淵源には、有島のこの特異な人生観というテーゼがあるということである。そして、そのテーゼに従って堕落する人生を選んだ葉子であったが、しかし葉子はその人生に活路を見出せず、ついには自殺を考えるまでに追い詰められてしまう。ここでの葉子は、自分の堕落をこれまでのように転倒した発想によって肯定視することはない。これをどのように捉えたらよいか。有島の構

想した「堕落」を、葉子は実践できてはいないということになる。『或る女』という作品における主人公葉子の到達した形象は、作者有島の特異な人生観から乖離していると言えよう。

結論

本稿の冒頭で触れたように、有島武郎は『或る女』において「堕落した煩悶する悲劇的」な女の人生を描くという執筆意図を持っていた。更に有島は、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」にこそ目指すべき「人生の可能」があるという構想のもとに『或る女』を書くという「冒険」を企ててもいたのであった。このような発想を仮に有島の人生観と措定した場合、この人生観は特異なものだと言えよう。それがいかに特異であるかは、有島の所属した白樺派の作家たちの人生観と比べてみればよい。白樺派では、「正義」「善」「美」といったものを求めるべきであるという人生観が標準的なものとして共有されていた。有島はそういった標準的ものから外れる人生観を『或る女』において展開しようと企てたということになる。

従来、この有島の特異な人生観に基づく「人生の可能」について、それが『或る女』という作品ではどのように主題化されているかという観点から論じられる傾向にあった。本稿においてもこの「人生の可能」をめぐって論を展開してきたが、しかし、本稿ではそれが主題たり得るか否かを検証するにとどまらず、有島の特異な人生観がどのように形成されていったのかについても論及した。その際に着目したのは、有島とキリスト教との関係であった。森本厚吉の勧誘を受けて入信した有島は、その後、留学先のアメリカでキリスト教に順応できない自分の姿に悩み、空虚感に襲われることになる。形の上ではキリスト教信者としての生活を維持していたが、内面ではクリスチャンであることへの懐疑と苦悩が深刻化する。この懐疑と苦悩は、やがて制度や組織といったものに対する不信につながり、ついには背教へと至る。こういった有島とキリスト教との関係から、論者は、宗教という制度

から自身を解放しようとする有島の姿を読み取った。

制度としての宗教から解放された有島が向かった先は文学であった。そして、有島は文学の力によって人間が制度から解放されることを訴えた。有島にとって文学は、制度というものを介してキリスト教と対立的な関係に置かれているということが分かる。この〈宗教／文学〉という対立的な関係が顕著に表れているのが〈姦淫の女〉に対する価値づけである。キリスト教の価値観では否定される〈姦淫の女〉に対し、有島は文学的な価値を見出していく。この点を検証するうえで本稿が取り上げたのは、娼婦や芸者といった貞操を売って生きる女性たちの存在である。『或る女』の主人公葉子は、社会制度上は蔑視される存在となる娼婦や芸者たちの生き方を羨望し、そのような〈姦淫の女〉の生き方を実践しようとしていた。堕落と言われても、不貞と言われても、葉子は世間からの批判と蔑視を全て「甘い屈辱」と受け止めようとしていた。

葉子のこのような転倒した発想は、有島の堕落の底に「人生の可能」があるという特異な人生観に通じるものだと言える。そして、葉子は『或る女』において有島が企てた通りに堕落へと突き進んだ。しかし、堕落した葉子はそこに「人生の可能」を見出すことはなかった。彼女は倉地との生活に将来的な展望を見出せず、命を絶とうと考えるところまで追い詰められる。本来、堕落する葉子の形象は有島が文学を通して実践しようとした制度からの解放であり、それは彼の特異な人生観の縮図でもあったはずである。ところが、葉子が最終的に到達した堕落する女としての形象は、決して解放されたものであったり、可能性の開かれたものであったりはしない。ここに、有島の特異な人生観からの乖離を読み取っておきたい。有島が文学において実践しようとした人生観、即ち、堕落の底に「人生の可能」があるという人生観は、『或る女』という作品では貫徹することができなかったということになる。果たしてそれを阻んだものとは何であろうか。もし、現実には堕落が「人生の可能」を開くことなどあり得ないということであれば、それはリアリズム[47]によ

[47] 有島武郎の文学をリアリズムという観点から評価したのが正宗白鳥や本多秋五である

って作品の最終局面が締め括られたということになる。葉子の人物形象においてリアリズムを追求した結果、葉子はまさに生きた一人の女性として自立し始め、作者有島の操る人形であることから乖離していったのである。

ことについては序章・「1.1 有島武郎という人物」で詳述した。

終　章

本研究は、有島武郎の『或る女』に描かれた葉子像の形象を考察するうえで、有島の女性観に着目し、両者の関係について解明しようとしたものである。有島の女性観を考察するにあたって、本研究が注目したのは彼の書き残した書簡、日誌、講演録、評論、広告文などの周辺資料である。有島はしばしば、これらの周辺資料において独自の価値観や観点を披露しているが、時としてそこには転向や自家撞着が見られる。そういった有島の思想の様相が作品の人物像にどのように投影され、あるいは乖離しているのか。従来の研究では、ともすると有島の残した言説をそのまま作品のガイドラインとして適用する傾向にあった。すなわち、有島の女性観がそのまま『或る女』の葉子に適用されているという理解である。しかし、本研究では、葉子の造形は有島の女性観が忠実に投影されたものではなく、作品に固有のものとして自律的に描かれているという見解を得るに至った。『或る女』における葉子という登場人物は、テクストが紡がれていく過程で有島の女性観から乖離し、固有の生として自立していく。これが本研究の明らかにした葉子像の形象である。

1. 葉子の持つ両義性的な在り方

本研究は、『或る女』における主人公早月葉子像の形象について考察を展開し、その過程で、葉子は二つの価値観の間で揺れ動いている人物として描かれていることが判明した。その揺れ動く葉子像を摘出してみると概ね次のようになる。

第一章「『或る女』におけるアンビバレントな葉子像―石坂養平宛書簡を手掛かりとして―」では、〈憎悪／愛着〉という二つの相反する感情の間で揺れ動く葉子像を読み取った。有島は、石坂養平宛の書簡において、女性には憎悪と愛着という二つの矛盾した本能があるというテーゼを導き出し、それを『或る女』の創作意図として示している。ということは、葉子の造形にも、この二つ矛盾した本能が関わっていると想定される。このような仮説のもとに葉子像の形象を検討した結果、本

章では、葉子が憎悪と愛着という二つの相反する感情を、男性たちに対してだけではなく、母や妹といった女性たちに対しても抱く人物として造形されていることを明らかにした。

第二章「『或る女』における「夢遊病者」としての葉子像―「ヒステリー」を端緒として―」では、「夢遊病者」という語に注目し、〈夢／現〉の間で混淆する葉子像について考察した。葉子は、乗船を契機として夢と現の区分が曖昧となり、「夢遊病者」と形容されていく。やがて帰国し、船を降りた葉子は、倉地と共に歩む人生という夢の続きを期待した。しかし、彼女は現実と向き合わざるを得なくなる。こうあってほしいという想定と、そうではない現状、その二つが次第にずれてゆき、葉子は葛藤を抱える。彼女は夢と現の混淆した異常な精神状態と、そして病魔に侵された肉体とに追いつめられ、次第に死へと傾斜していく様相を呈することになる。以上が本章の読み取った葉子像の形象である。

第三章「『或る女』における葉子の「本能」―「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島武郎の「本能」観との関連―」では、有島語彙としての「本能」に着目し、この語が〈精神／肉体〉という二項対立を揺れ幅としつつ葉子の人物造形に関わっていることを論じた。葉子の恋愛遍歴を検証すると、木部から倉地へと恋愛対象が推移していく経緯については、「惜みなく愛は奪ふ」に見られる「本能」論がガイドラインとして有効に機能していることが分かった。すなわち、「本能」の求めるものを〈精神／肉体〉という二項対立で捉えていく有島の発想と、その発想に導かれるかのごとく、恋愛相手に精神や肉体の充足を求める葉子像が描かれているという見解を得るに至った。

なお、第四章「『或る女』におけるコケットとしての葉子像」、及び、第五章「『或る女』における堕落する葉子像―有島武郎の人生観―」は、二つの価値の間で揺れ動く葉子像の形象というものが、作者有島の思想の揺れに通じるものであることを論じた。その具体的な内容については次節で詳述する。

2. 有島武郎の女性観

2.1　二元論的な発想と葉子像の形象の関係

前節では、葉子の持つ両義的な在り方について総括した。なぜ、葉子が二つの価値観の間で揺れ動く人物として描かれているのか。この問題を考えるにあたって、本研究が注目したのは有島の二元論的な発想であった。有島は、二元論的なフレームのなかで女性を位置付けようと試みていたことが、書簡をはじめとする周辺資料からうかがえた。本研究では、そういった有島の二元論的な発想が、『或る女』という作品において実践されつつも、完遂されずに終わっていく様相を見出した。以下に、その具体的な内容を確認しておく。

第一章では、有島の説く「本能」や「男女闘争」といった観念的なキーワードが、〈男／女〉という二項対立を基盤として発想されたものであることを指摘した。そのような発想のもとに造形された葉子であったが、彼女は男と女という関係に限定してアンビバレントな状況に陥るのではなく、女性との関係においても同様の状況に陥ることを本章では読み取った。すなわち、葉子の〈憎悪／愛着〉という感情の在りようは、対象人物毎に異なる様相を呈しており、一律に有島の女性観が適用されるものではないということが明らかになったのである。

第二章では、有島が十九世紀のフランス文学で流行したヒステリーに傾倒し、その実践として『或る女』の葉子をヒステリー症に罹った女として描こうとしたが、それが〈夢／現〉という二つの次元の混淆した状態として形象されていることを指摘した。そして、そのような状態に陥っている葉子の姿は、むしろ「夢遊病者」という規定のほうが相応しいものであることを論じた。

第三章では、有島が「惜みなく愛は奪ふ」の中で展開した「本能」論に着目し、それが〈精神／肉体〉という二項対立に基づいていることを指摘した。それを踏まえつつ、この語が葉子像の形象にどのように関わっているかについて検討を加え

た。その結果、恋愛相手に精神や肉体の充足を求める葉子の姿が読み取れる一方で、このようなガイドラインから乖離していく葉子の在りようも観察された。その契機となっているのが葉子の身体の変調であり、葉子は子宮の病を抱えたことで、肉体的な面での充足を得られなくなってゆくのである。〈精神／肉体〉という単純な二項対立の関係で葉子の「本能」の位相を捉えることはできなくなり、ここに矛盾葛藤する葉子の姿を読み取ることが可能となる。

第四章では、有島の女性観の実践としてある葉子のコケットリーに着目し、その具体的な様相について論を展開した。有島は、『或る女』を執筆するにあたり、「性慾的誘惑」を武器としながら男を籠絡する女性像を描こうとしていた。この構想は、第一章で論じたものと同じく、男と女の関係を闘争という関係で捉えようとする有島の二元論的な発想の一環としてある。そして、有島はそういった発想のもとに葉子の人物造形を企画したのである。本章で着目したのは、その執筆意図が、ある程度まで「醇化」したが、その「醇化」が不足していたため、当初の期待を裏切って「硬化」したという作品観を有島が書簡で述べていた点である。有島は西洋由来の女性観に触れたことで、それを自身の女性観として醸成していった。しかし、彼の作品ではそれを十全なかたちで実践し得なかったことになる。本章ではこの現象について、檜山京子宛書簡を参照しつつ、有島が葉子を「人間」として忠実に描いていった結果、その人物像が自立してゆき、当初の構想から乖離していったという見解を得るに至った。

第五章では、有島の特異な人生観の形成に注目し、そして、この特異な人生観と『或る女』の葉子像の形象がどのような関係にあるのかを考察した。有島は『或る女』において「堕落した煩悶する悲劇的」な女の人生を描くという執筆意図を持っていた。更に有島は、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」にこそ目指すべき「人生の可能」があるという特異な人生観を『或る女』において展開しようと企てた。本来、「醜」や「邪」、「堕落」といったネガティブな概念は「人生の可能」というポジティブな展望と結び付くものではない。しかし、有島はそれらを半ば強引に結び付け

た。本研究では、そのような有島の特異な人生観の形成にキリスト教との関わりが影響していることを指摘した。有島は、留学中、キリスト教に順応できない自分の姿に悩み、空虚感に襲われる。この懐疑と苦悩は、制度や組織といったものに対する不信につながり、ついには背教へと至る。そして、制度としての宗教から解放された有島が向かった先は文学であった。有島にとって文学は、制度というものを介してキリスト教と対立的な関係に置かれているのである。この〈宗教／文学〉という対立的な関係が象徴的に表れているものとして、本章では〈姦淫の女〉に注目した。キリスト教の価値観では否定されるべき〈姦淫の女〉に対し、有島は文学的な価値を見出していく。その価値を実践しているのが他ならぬ『或る女』の葉子である。葉子は、社会制度上は蔑視される存在となる娼婦や芸者たちの生き方を羨望し、〈姦淫の女〉の生き方を肯定していく。葉子のこのような転倒した発想は、有島の、堕落の先に「人生の可能」があるという特異な人生観に通じるものだと言える。しかし、堕落した葉子はそこに「人生の可能」を見出すことはなかった。

2.2　有島語彙の固有性

さて、本研究では、有島の言葉の固有性についても考察を展開した。有島が用いる言葉とは、社会通念上の言葉の意味から、微妙にずれるところがある。以下に、その考察の結果を確認しておきたい。

第二章では、「ヒステリー」や「夢遊病者」といった言葉に注目し、夢と現の間で混淆する葉子像が形象されていることについて論じた。一般的な「ヒステリー」の概念は精神が失調した状態を指すものとしてある。しかし、有島語彙としての「ヒステリー」には、疑似的なものと純然たるものという二つの用法がある。本章では、その二つのうちの疑似的な「ヒステリー」という用法について注目した。そして、その用例を分析した結果、疑似的な「ヒステリー」の症状とは、夢と現の混淆した状態として描かれているということを見出した。そのような疑似的な「ヒス

テリー」の状態に陥っている葉子の姿は、むしろ「夢遊病者」という規定のほうが相応しいものであると考えられる。さらにまた、「夢遊病者」という語の用例についても検討を加え、そのイメージが、葉子の精神状態に即応して変化していることを明らかにした。有島の用いる「ヒステリー」や「夢遊病者」とは、社会通念上の概念をそのまま適用しているわけではなく、そこから乖離して、固有の意味を展開しているということになる。

第三章では、有島語彙としての「本能」に着目し、〈精神／肉体〉という二つの概念の間で揺れ動く葉子像の形象について考察した。従来は、葉子を本能の赴くままに生きる女として理解する傾向にあった。ここで言う「本能の赴くまま」というのは、自由奔放に生きるという意味である。しかし、有島は独自に「本能」という語を定義づけていた。有島語彙としての「本能」には二つのものがある。一つは、有島が「惜みなく愛は奪ふ」で展開した男女間の愛に見られる「本能」であり、もう一つは、有島が石坂養平宛の書簡で説いた「女の本能」である。有島の使っている「本能」という概念は社会の一般的な概念と違い、多義的であると論じた。

第五章では、有島の用いた「堕落」「醜」「邪」という語に注目し、彼の特異な人生観と葉子像の形象との関係を明らかにした。白樺派では、「正義」「善」「美」といったものを求めるべきであるという人生観を標準的なものとし、作家たちの間で共有されていた。こういった白樺派の人生観を顧みれば、「醜」や「邪」といった概念は忌避すべきものであることが窺える。「堕落」という語もまた、人生の失敗や脱落としてあり、目指すべき目的としてあるわけではない。しかし、有島は、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」の底に目指すべき「人生の可能」があると考えていた。有島の人生観と世間の一般的な考え方、あるいは白樺派の作家たちとの間には齟齬があり、社会通念上から乖離していったという見解を得るに至った。

有島は女性について語る時、しばしば書簡や広告文などの周辺資料において「女の本能」「女性の悲しい運命」「女性の運命の悲劇的淋しさ」というフレーズを用いている。そして、『或る女』の葉子を造形するにあたり、「ヒステリー」「夢遊病者」

「コケット」「堕落」などの表現を用いていた。男性である有島が女性を主人公とする小説を執筆するという場合、そこには経験に照らした実感が描写されるのではなく、異なる性を持つ側の価値観、すなわち、有島という男性の「女性観」が投影されることになる。その女性観は有島の先入観、固有観念、偏見といったものにまみれている可能性があるのではないか。しかし、有島のそういったステレオタイプの観念的な女性観は、作品において十分に「醇化」することはなかったと言える。『或る女』の葉子の人生を通じて逆照射されてくるのはここに述べてきたような有島の女性観の固有性である。

3. 結論

有島の二元論的な発想は作品『或る女』において、十全なかたちで実践することはできなかった。果たしてそれを阻んだものとは何であろうか。本研究ではこの問いに対し、有島は結局、実際の人間が抱く情念や情動に即して作品を紡いでいったからであると結論づけた。当初、有島の念頭にあった構想、それは有島の思想と言ってもよい。その思想は、作品を執筆する動機として機能し、有島は作品を自らの思想の実践の場として捉え、具体的には葉子を造形していった。しかし、その過程で葉子は一人の女性として、また、人間としてリアリティを持ち始めてゆく。それを本研究では作者有島から自立していく姿として捉えた。このように考えてくると、有島の『或る女』という作品は、リアリズムによって最終局面が締め括られたということになる。なお、作品において人物が自立していくという現象は、作品の文脈が作者有島の構想から乖離していくということでもある。葉子像の形象がリアリズムによって支えられているものであると考えた場合、そういった葉子から乖離していく有島の構想とは、いわばリアリズムに反する要素を持つものであったということが逆照射されてくるのではないか。それを本研究では、有島の女性観の固有性として捉えることになる。

付　録

第二章　付録資料

『或る女』における「夢」の用例調査

	章（頁）	関係者	内容	夢、現	夢遊病者	悪・凶夢	備考
1	二章・13頁	葉子、木部	夢のような初恋				
2	三章・19頁	葉子、木部	夢から目覚めた				汽車で木部と再会した時の気持ち
3	五章・30頁	葉子、古藤	夢のように見開いた				古藤を見た様子
4	五章・33頁	葉子	夢中になる				母の初七日、ビールを飲んだ葉子
5	六章・41頁	愛子	半分夢中				
6	八章・55頁	演説をしている人	夢中になる				
7	八章・56頁	木部	実行力の伴わない夢想家				
8	八章・58頁	葉子	夢中になる				神様への織物を作りたい
9	八章・59頁	葉子	夢よりも果敢ない目論見				神様を喜ばせる
10	十章・74頁	葉子、若者	夢とも現ともない	○			
11	十章・74頁	葉子、若者、倉地	夢遊病者		○		倉地のことが初めて思い出される
12	十章・74頁	葉子、倉地	夢みるような眼を見開いた				
13	十章・74頁	葉子、倉地	夢ではない				現実に戻る葉子
14	十一章・83頁	葉子	パセティックな夢				旅情を感じる葉子
15	十一章・83頁	葉子	過去を夢のやうに繰り返す				
16	十一章・83頁	葉子、木部	夢心地				
17	十一章・84頁	葉子、倉地	夢現の境から目覚める	○			
18	十一章・84頁	葉子	夢想家				
19	十二章・95頁	葉子	夢のようだった				
20	十三章・102頁	葉子	夢とも現とも知れない錯覚	○			小さい時からの癖
21	十三章・102頁	葉子	夢遊病者		○		
22	十三章・102頁	葉子	夢幻界				様々な事を考えていた葉子
23	十三章・104頁	葉子	夢心地				
24	十三章・104頁	葉子	現実、夢幻	○			倒錯する現実と夢幻
25	十三章・105章	葉子、倉地	夢の中から人を見る				
26	十三章・108頁	葉子	夢中になる				
27	十五章・121頁	葉子	夢心地				
28	十六章・128頁	葉子	夢もない深い眠り				倉地と肉体関係を結んだ後の気持ち
29	十六章・132頁	葉子	悪夢			○	
30	十七章・146頁	葉子、定子	夢を思い出す				定子のことを思い出す
31	十八章・149頁	葉子	夢のように味わう				
32	十八章・156頁	葉子	夢にも思わなかった				米国に行きたいと思う夢が叶える
33	二十一章・192頁	葉子、木村	恐ろしい夢			○	木村を殺す夢
34	二十一章・193頁	葉子、木村	恐ろしい凶夢			○	前篇の終わり
35	二十二章・198頁	葉子	夢のような長い航海				
36	二十四章・222頁	愛子、貞世	夢にも人の言う事を受け取る				妹たちは葉子の噂を聞く
37	二十六章・237頁	葉子、倉地	悪夢から幸福な世界に目覚める			○	
38	二十六章・238頁	葉子	夢心地				
39	二十六章・241頁	葉子、倉地	夢想していた幸福				
40	二十六章・241頁	葉子	夢心地				
41	二十七章・246頁	葉子	夢ばかり眠りに陥る				倉地の夫婦関係をを妄想する葉子
42	二十七章・246頁	葉子	夢の暗示				寂しさが募る
43	二十七章・250頁	倉地、葉子	夢心地				
44	二十八章・252頁	葉子、倉地	夢のような楽しさ				
45	二十八章・256頁	葉子	夢にも思ってはいなかった				倉地は首になる
46	三十二章・280頁	葉子	夢にも思い出すまい				

47	三十三章・302頁	葉子	真実、夢	○			交錯する真実と夢
48	三十三章・302頁	葉子	真実、夢	○			
49	三十三章・303頁	葉子	昨夜の事は夢ではない				
50	三十三章・303頁	葉子	今見るこの景色も夢ではない				
51	三十六章・334頁	葉子、倉地	夢中				
52	三十九章・365頁	葉子	どこ真実で、どこ夢なのか	○			倉地は先妻とよりを戻すことを疑う葉子
53	三十九章・365頁	葉子	夢になる				
54	三十九章・367頁	葉子	夢遊病者		○		
55	三十九章・368頁	葉子	夢				
56	三十九章・369頁	葉子	夢				
57	四十章・379頁	葉子	悪夢から目覚めた			○	
58	四十一章・389	葉子、貞世	夢から目覚めた				貞世が発熱した
59	四十二章・391頁	葉子、貞世	夢にも現にも思いもかけなった	○			貞世が腸チブスと診断された
60	四十三章・401頁	貞世	夢にも貞世を襲って気はしない				
61	四十三章・401頁	貞世	夢現の間を彷徨う	○			
62	四十三章・406頁	貞世	悪夢			○	
63	四十三章・407頁	葉子	夢から目覚めた				
64	四十三章・409頁	葉子	夢中				
65	四十四章・417頁	葉子	夢のようだった				
66	四十五章・424頁	葉子	実際なのか夢なのか	○			病室で過去を思い出す葉子
67	四十五章・425頁	葉子	夢の中にいる女ではなかった				
68	四十六章・430頁	葉子、愛子	悪夢			○	
69	四十七章・433頁	葉子	夢にも経験しない事				死に向かう葉子
70	四十八章・441頁	葉子	夢かなぞのように眺め続けた				
71	四十九章・452頁	葉子	夢中				

第三章　付録資料

男女間における葉子の「本能」の用例調査					
	資料（章・頁数）	関係者	比重（精神的／肉体的）	内容	備考
1	〈資料1・7〉第二章・13～14頁	葉子と木部	精神的	木部との恋愛　転換点	
2	〈資料10〉第十六章・129頁	葉子と倉地	肉体的	肉体的な本能の喚起	
3	〈資料11〉第二十四章・217頁	葉子と倉地	肉体的	肉体的な興奮を覚えた葉子	
4	〈資料12〉第二十八章・252頁	葉子と倉地	肉体的	隠れ家での感覚　家の中に閉じこもる	
5	〈資料13〉第三十三章・296頁	葉子と倉地	肉体的（精神の解放）	旅先での感覚　家の外へ出かける	
6	〈資料14〉第三十四章・303頁	葉子と倉地	精神的	葉子の転換点	
7	〈資料15〉第三十八章・356頁	葉子と倉地	精神的	疑心暗鬼の葉子	
8	〈資料16〉第三十九章・362頁	葉子と倉地	精神的	自殺を考えた葉子	
9	〈資料17〉第四十七章・434頁	葉子と倉地	精神的	倉地との恋愛生活　破綻	
10	〈資料18〉第三十六章・334－335頁	葉子と倉地			防衛本能
11	〈資料19〉第四十章・400頁	葉子と倉地			自尊心

その他の「本能」の用例調査				
	資料（章・頁数）	本能の主体	内容	備考
1	〈資料20〉第十一章・85頁	葉子	葉子の回想	「本能的生活」に近似した事例
2	〈資料21〉第十四章・109頁	田川夫人	嫉妬心	
3	〈資料22〉第十四章・110頁	田川夫人	嫉妬心	
4	〈資料23〉第十四・114頁	岡	男性の本能	
5	〈資料24〉第三十号章・318－319頁	外国人	葉子に魅力されること	
6	〈資料25〉第三十五章・321頁	葉子	嫉妬心	
7	〈資料26〉第四十章・376頁	木村	恋する男性の本能	

参考文献一覧

序章

＊「浦上后三郎宛」『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月三十日）
＊本多秋五「解説」、及び瀬沼茂樹「年譜」（『日本の文学 27　有島武郎・長与善郎』、中央公論社、一九六七年三月）
＊川上美那子「金子喜一」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月）
＊伊藤佐枝「波多野秋子」、『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月）
＊野間広「有島武郎」（『日本の思想家』、光書房、山本健吉編、一九五九年一一月）
＊正宗白鳥の「有島武郎」（『作家論（二）』、創元社、一九四二年一月））
＊本多秋五「有島武郎論」（『「白樺」派の文学』、新潮社、一九六〇年九月）
＊安川定男「有島武郎文学の魅力」（『国文学解釈と鑑賞』第五四巻、至文堂、一九八九年二月）
＊安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）
＊西垣勤「『或る女』研究史素描」（『有島武郎論』、有精堂、一九七一年六月）
＊福田準之輔「『或る女のグリンプス』―その成立について―」（近代日本文学作家研究叢書『有島武郎研究』、瀬沼茂樹・本多秋五編、右文書院、一九七二年一一月）
＊山田昭夫「或る女」（『鑑賞日本現代文学 10 有島武郎』、角川書店、一九八三年七月）
＊内田満「『或る女』後編の成立―自筆原稿による二、三の考察」（『日本近代文学』第三十二集、一九八五年五月）
＊江頭太助「『或る女』研究の基本問題」（『文学・語学』八、一九五九年三月）
＊山田俊治「『或る女』前編の改稿問題―葉子の形象について―」（『文芸と批評』

第五巻第一号、一九七九年二月）
＊上杉省和「『或る女』論」（『有島武郎―人とその小説世界』、明治書院、一九八五年四月二〇日）
＊蒲生芳郎「『或る女』論―『或る女のグリンプス』と『或る女』後編の関係―」（『宮城学院女子大学基督教文化研究所・研究年報』第九・十合併号、一九七七年三月）
＊鳥居明久「『或る女のグリンプス』から『或る女』後編へ―古藤を手がかりとして」（『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、青英舎、一九八〇年十月一五日）
＊山田俊治「『或る女』の方法と主題―葉子の生の行く方」（『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、青英舎、一九八〇年十月一五日）
＊蒲生芳郎「有島武郎『或る女』論序説―前・後編屈折の問題に関する試論―」（『宮学院女子大学基督教文化研究所・研究年報』第六・七合併号、一九七三年九月）
＊鎌倉芳信「『或る女』論―モデル問題を中心に」（『日本文学』、一九七四年一一月一〇日）
＊山田昭夫「『或る女』の素材」（『鑑賞日本現代文学 10 有島武郎』、角川書店、一九八三年七月）
＊西垣勤「『或る女』論―前編の構造について」（『有島武郎論』、有精堂、一九七一年六月）
＊有島武郎研究叢書第七集『有島武郎とキリスト教』（有島武郎研究会編、右文書院、一九九五年八月）
＊有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』（有島武郎研究会編、右文書院、一九九六年七月）
＊奥田浩司「或る女のグリンプスと坪内逍遥の「新しい女」―〈女〉の衝動性、無意識性をめぐって―」（『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月）
＊中村都史子「坪内逍遥の静かなるフェミニズム―講演「近世劇に見える新しき

女」（『日本のイプセン現象』、九州大学出版会、一九九七年六月）
＊渡邊澄子「『青鞜』運動史」（『「青鞜」を読む』、新・フェミニズム批評の会編、東洋印刷株式会社、一九九八年十一月一六日）
＊江種満子「有島武郎の女性論」（『文教大学国文』三七巻、二〇〇八年三月）
＊中島礼子「『或る女』前史としての国木田独歩における女性像―「おとづれ」「第三者」「鎌倉夫人」と「或る女のグリンプス」をめぐって―」（『有島武郎研究』第八号、二〇〇五年三月）
＊井上理恵「『或る女』上演を考える」（『有島武郎研究』第一二号、二〇〇九年九月）
＊日比嘉高「洋上の渡米花嫁―有島武郎「或る女のグリンプス」と日系アメリカ移民―」（『有島武郎研究』第一四号、二〇一一年六月）
＊金井景子「女王の家政学―『或る女』と明治三十年代―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房）
＊中村三春「ジェンダーとレトリック―『或る女』というコンタクト―」（『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月）
＊「石坂養平宛」（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月）
＊山田昭夫「有島武郎の作品と人」（『鑑賞　日本現代文学』、角川書店、一九八三年七月）
＊「二つの道」（『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年四月）
＊川鎭郎「有島武郎」（『新研究資料現代日本文学　第一巻　小説Ⅰ・劇曲』、明治書院、二〇〇〇年三月）
＊「惜みなく愛は奪ふ」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月）
＊安川定男「『或る女のグリンプス』」（『有島武郎論』、明治書院、一九六七年一一月、増補版、一九七八年五月）
＊内田満「有島武郎の創作方法（下）―『石にひしがれた雑草』から『或る女』へ

—」（『同志社国文学』一一号、一九七六年二月）
＊山田昭夫「有島文学の基本構図」（『有島武郎・姿勢と軌跡』、右文書院、一九七九年七月）
＊石丸晶子「有島武郎」（『日本現代文学研究必携』、三好行雄編、學燈社、一九八三年七月）
＊片山礼子「有島武郎『或る女』の「なつかしさ」—本能的生活—二元化から一元化へ—」（『有島武郎研究』十号、二〇〇七年三月）
＊譚仁岸「思想と実生活」の対立とその止揚—正宗白鳥、小林秀雄、有島武郎を中心に—」（『神戸女学院大学論集』第六七巻一号、二〇二〇年六月）
＊岡本道雄「有島武郎の自殺とキリスト教—近代日本思想史の一断面—」（『神戸女学院大学論集』九巻、一九六三年四月）
＊西垣勤「『或る女』論」（『白樺派作家論』、有精堂、一九八一年四月）
＊上杉章和「『或る女』論」（『有島武郎—人とその小説世界—』、明治書院、一九八五年四月）

第一章

＊安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）
＊金子景子「ジェンダーとセクシャリティ」（中山和子・江種満子・藤森清編『ジェンダーの日本近代文学』翰林書房、一九九八年三月）
＊「石坂養平宛」（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月）
＊三田憲子「有島の男女観に立脚した作品読解を」（総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月）
＊山田俊治「他者に生きた葉子／『或る女』のジェンダー機制」（総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月）
＊中村三春「媚態と狂気—『或る女』におけるコケットリーの運命」（中村『言葉

の意志　有島武郎と芸術史的転回』、有精堂、一九九四年三月）
＊江種満子「有島武郎女性論」（『文教大学国文』、二〇〇八年三月）
＊『或る女』（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月二〇日）
＊鎌倉芳信「『或る女論』―モデル問題を中心に―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月）
＊「黒沢艮平宛」（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月）
＊兵頭かおり「木部孤笻と運命観―第三十七章を中心に―」（『有島武郎『或る女』を読む』、紅野敏郎編、青英舎、一九八〇年一〇月）
＊本多秋五「有島武郎論」（『白樺派の文学』、新潮社、一九六〇年九月）
＊外尾登志美「或る女の構造―無秩序の軌跡とその証―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月）
＊菅谷敏雄「『或る女』論―境域から〈海〉へ―」（『有島武郎研究』、有島武郎研究会、一九七七年三月）
＊安川定男「『或る女』論―浦上宛書簡をめぐって―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月）
＊石丸晶子「『或る女』論」（「国語と国文学」東京大学国語国文学会七月号、一九七三年七月）
＊竹腰幸夫「『或る女』論―母、葉子、愛子をめぐって―」（日本文学研究資料『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月）
＊大石修平「『或る女』の形象組織」、（日本文学研究資料叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月）
＊江種満子「愛/セクシュアリティ―『或る女』の場合―」（有島武郎研究叢書第六集、『有島武郎　愛/セクシュアリティ』、右文書院、一九九五年五月）
＊生井知子「有島武郎論―その女性像をめぐって―」（『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、一九九一年四月）

第二章

＊安川定男「解題」(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月)

＊石井直志「夢イメージの世紀末　精神病理の世紀末　《ヒステリー》考―『ボヴァリー夫人』から『或る女』まで」(『國文學　解釈と教材の研究』、學燈社、一九九五年九月)

＊本多秋五「有島武郎論」(『「白樺」派の文学』新潮社、一九六〇年九月)

＊川上美那子「『或る女』について(二)―後篇世界の意味」(日本文学研究叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月)

＊小西由里「『或る女』におけるヒステリー」(『近畿大学日本語・日本文学』第四巻、二〇〇二年三月)。

＊朴美姪「有島武郎『或る女』におけるヒステリー:葉子の破滅を中心に読み直す」(『九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究』二一、二〇一七年一二月)

＊江頭太助「『或る女』研究の視点―H・エリスの『性の心理学的研究』の影響―」(『有島武郎の研究』、朝文社、一九九二年六月)

＊山本芳明「ヒステリーの時代―『或る女』序説―」(『学習院大学文学部研究年報』第三六輯、一九九〇年三月)

＊江種満子「愛／セクシュアリティ―『或る女』の場合―」(『《有島武郎研究叢書》第六集　有島武郎　愛／セクシュアリティ』右文書院、一九九五年五月)

＊坪井秀人「『或る女』のマッド・シーン」(総力討論『ジェンダーで読む「或る女」』、中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月、後に『性が語る』名古屋大学出版、二〇一二年二月に所収)

＊小坂晋「有島文学の性心理学的分析」『文学・語学』第一九号、一九六一年七月、後に、『白樺派文学』日本文学研究資料叢書、有精堂出版、一九七四年八月に再録)

＊『或る女』(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月)

＊『明暗』(『夏目漱石全集』第九巻、筑摩書房、一九八八年六月)
＊『夢遊病者彦太郎の死』(『江戸川乱歩全集』第一巻、平凡社、一九三一年六月)
＊宮本和歌子「江戸川乱歩『夢遊病者彦太郎の死』における一人二役関係」『京都大学國文學論叢』三九号、二〇一八年四月)
＊『カインの末裔』(『有島武郎全集』第三巻、筑摩書房、一九八〇年六月)
＊江種満子「『或る女』論―「夢幻」と「屈辱」をめぐって」(日本文学研究叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月)
＊西垣勤「『或る女』論―前篇の構造について―」(『有島武郎』、有精堂、一九七一年六月)
＊高橋世織「乗り物のなかの葉子―＜しぐさ＞の解読」(『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、星雲社、一九八〇年一〇月)
＊篠崎秀樹「葉子の『運命』観―木村への執着」(『有島武郎「或る女」を読む』、紅野敏郎編、星雲社、一九八〇年一〇月)
＊外尾登志美「『或る女』前編の内部構造―内部衝動と世間的幸福との間の不安」(『有島武郎―「個性」から「社会」へ―』、右文書院、一九九七年四月)
＊川上美那子「『或る女』について(一)」(日本文学研究叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月)
＊加藤幸子「女性作家による日本の文学史(11)有島はなぜ葉子を殺したか―『或る女』から読みとるもの」(『本の窓』第二五巻四号、二〇〇二年五月)

第三章

＊大里恭三郎「本主義者の破滅」(『「或る女」の世界』審美社、一九八七年、二月)
＊石丸晶子「本能的生活に賭ける―『或る女』の世界―」『世紀』一九七三年七月)
＊『或る女』(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月二〇日)
＊金井景子(「女王の家政学―『或る女』と明治三十年代―」『総力討論　ジェンダ

ーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月）
＊中村三春氏（「ジェンダーとレトリック―『或る女』というコンタクト―」『総力討論　ジェンダーで読む「或る女」』中山和子・江種満子編、翰林書房、一九九七年一〇月）
＊奥田浩司「「或る女のグリンプス」と坪内逍遥の「新しい女」―〈女〉の衝動性、無意識性をめぐって―」『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月）
＊中島礼子「『或る女』前史としての国木田独歩における女性像―「おとづれ」「第三者」「鎌倉夫人」と「或る女のグリンプス」をめぐって―」『有島武郎研究』第八号、二〇〇五年三月）
＊團野光晴「闘争としての快楽追求―「或る女」と大江健三郎の〈性的人間〉―」『有島武郎研究』第九号、二〇〇六年三月）
＊井上理恵「『或る女』上演を考える」『有島武郎研究』第一二号、二〇〇九年九月）
＊日比嘉高「洋上の渡米花嫁―有島武郎『或る女のグリンプス』と日系アメリカ移民―」（『有島武郎研究』第一四号、二〇一一年六月）
＊「惜みなく愛は奪ふ」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年一〇月）
＊佐々木靖章「解題」（『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年四月）
＊佐々木靖章「解題」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年一月）
＊安川定男「解題」（『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月）
＊亀井俊介「『本格小説』作家への道」（『世間に対して真剣勝負をし続けて―有島武郎』、ミネルヴァ書房、二〇一三年一一月）
＊山田昭夫「作品の展開」（『有島武郎・姿勢と軌跡』右文書院、一九七九年七月）。
＊宮野光男「有島武郎著作集第十一輯『惜みなく愛は奪ふ』を読む（二）―本文文関を中心にして（１）―」（『日本文学研究』第二四号、一九八八年一一月）
＊高原二郎「有島武郎の評論活動―『惜みなく愛は奪ふ』から「宣言一つ」へ―（有島武郎研究叢書第四集『有島武郎の評論』、右文書院、一九九六年六月）
＊遠藤祐「『惜みなく愛は奪ふ』を読む」（有島武郎研究叢書『有島武郎の評論』、

右文書院、一九九六年一〇月）
＊山田昭夫・内田満『近代文学資料８　有島武郎（上）』桜楓社、一九七五年一月）
＊小坂晋「有島文学の性心理学的分析」（『文学・語学』、一九六一年三月））
＊奥田浩司「恋愛観」（『有島武郎事典』有島武郎研究会編、二〇一〇年一二月）
＊「石坂養平宛」（『有島武郎全集』第一四巻、筑摩書房、一九八五年六月）
＊樋口康一郎「『或る女』の男性学―『或る女』における日本的家父長制とジェンダー―」（『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月）
＊上杉省和「惜みなく愛は奪ふ」（『有島武郎事典』有島武郎研究会編、二〇一〇年一二月）

第四章

＊上牧瀬香・中村成里（翻刻）、「『有島武郎全集』未収録・有島武郎の浦上后五三郎宛書簡―白樺派文学館所蔵資料―」（『有島武郎研究』第一六号、二〇一三年六月）
＊上牧瀬香「浦上后三郎」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月）
＊「浦上后三郎宛」（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月三十日）
＊『有島武郎全集』第十四巻（筑摩書房、一九八五年六月）
＊安川定男「『或る女』論―浦上宛書簡をめぐって―」（日本文学研究資料叢書『有島武郎』、有精堂、一九八六年三月）
＊江頭太助「『クロイツェル・ソナタ』との比較考察―『或る女』の研究視点―」（『有島武郎の研究』、朝文社、一九九二年六月）
＊瀬沼茂樹「有島武郎」（『日本近代文学大事典』、日本近代文学館編、講談社、一九七七年十一月）
＊中村三春「媚態と狂気　『或る女』におけるコケットリーの運命」（『言葉の意志

有島武郎と芸術史的転回』、有精堂、一九九四年三月）
＊江種満子「有島武郎の女性論」（『立教大学国文』、二〇〇八年三月）
＊小玉晃一氏「有島武郎と西洋―イプセンにも触れて―」（有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』、右文書院、一九九六年七月）
＊三田憲子「有島武郎の女性問題評論」（有島武郎研究叢書第四集『有島武郎の評論』、右文書院、一九九六年六月）
＊『有島武郎全集』第七巻（筑摩書房、一九八〇年四月）
＊小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』―比較対比研究序説―」（『岩手大学教育学部研究年報』第二六巻、一九六六年一二月）
＊柳富子「『或る女』考―有島のトルストイ受容に寄せて―」（有島武郎研究叢書第九集『有島武郎と西洋』、右文書院、一九九六年七月）
＊「解題」（米川正夫訳『クロイツェル・ソナタ』、岩波書店、一九二八年九月）
＊『クロイツェル・ソナタ』（米川正夫訳、岩波書店、一九二八年九月）
＊瀬沼茂樹「解題」『有島武郎全集』第一巻、筑摩書房、昭和五十五年八月）
＊井上理恵「イプセン」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月）
＊長谷川泉「有島武郎とイプセン」（『有島武郎研究』、本多秋五・瀬沼茂樹編、右文書院、一九七二年一一月）
＊山田昭夫「或る女」（『鑑賞　日本現代文学　第十巻　有島武郎』角川書店、一九八三年七月）
＊奥田浩司「『或る女のグリンプス』における〈母性〉―イプセン受容を補助線として―」（『有島武郎研究』八巻、二〇〇五年三月）
＊『有島武郎全集』第八巻（筑摩書房、一九八〇年十月）
＊佐々木靖章「解題」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月）
＊『ジンメル著作集７　文化の哲学』（円子修平・大久保健治訳、白水社、二〇〇四年一〇月）

＊『或る女』(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月)
＊赤井正二「木下杢太郎の思想展開におけるジンメルの芸術論」(『立命館産業社会論集』第四七巻第三号、二〇一一年一二月)
＊『木下杢太郎全集』第八巻(岩波書店、一九五一年六月二〇日)
＊『日本国語大辞典(第一版)』(小学館、一九七四年三月一日)
＊『日本国語大辞典』の「第二版」(小学館、二〇〇一年五月二〇日)
＊「檜山京子宛」(『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月)

第五章

＊笹渕友一「『或る女』の主題―有島武郎研究―」(東京女子大学「比較文化研究所紀要」、第一七巻、一九六四年六月)
＊外尾登志美「『或る女』の主題「暗い力」」(「日本文学」、一九七八年九月)
＊「現代作家の取扱ふ小説中の女性」(『有島武郎(上)』、山田昭夫・内田著、桜楓社、一九七五年一月)
＊安川定男「解題」(『有島武郎全集』第四巻、筑摩書房、一九七九年一一月)
＊「〔『或る女』廣告文〕」(『有島武郎全集』第七巻、筑摩書房、一九八〇年六月)
＊長与善郎「再び人道主義について」(『白樺』一九一七年八巻六号)
＊本多秋五「『白樺』と人道主義」『「白樺」派の文学』新潮社、一九六〇年九月)
＊野島秀勝「詩への逸脱―有島武郎論〈最終回〉―」(「文学界」、一九六五年二月)
＊石丸晶子「『或る女』論」(「国語と国文学」、一九七三年七月)
＊馬場和子「『或る女』の主題をめぐって」(「国文白百合」六号、一九七五年三月)
＊福田準之輔「『或る女』の位相」(「國文學解釈と教材の研究」、學燈社第二二巻一〇号、一九七七年八月)
＊山田俊治「『或る女』の方法と主題―葉子の生の行く片」(『有島武郎「或る女」を読む』、青英舎、一九八〇年十月)

＊川鎮郎「有島武郎とキリスト教―研究史的に―」（有島武郎研究叢書第七集『有島武郎とキリスト教』、右文書院、一九九五年八月）
＊「第四版序言〔『リビングストン傳』序〕」『有島武郎全集』第七巻（筑摩書房、一九八〇年六月）
＊「竹崎八十雄宛」（『有島武郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九八五年六月）
＊「有島祖母・両親宛」（『有島武郎全集』第十三巻、筑摩書房、一九八四年六月）
＊川鎮郎「有島武郎における『神義論』的懐疑の成立」（日本文学研究資料叢書『白樺派文学』、有精堂、一九七四年八月）
＊上杉省和「有島武郎のキリスト教入信とその周辺―新資料による覚え書き―」（『国語国文研究』三一、北海道大学国語国文学会、一九六五年九月）
＊「札幌獨立基督教會　日誌〔抄〕」『有島武郎全集』別巻（筑摩書房、一九八八年六月）
＊佐古純一郎「信仰」（『近代日本文学の倫理的探究』、審美社、一九六六年七月）
＊笠原芳光「背教の論理―有島武郎の場合―」（『キリスト教社会問題研究』、同
＊「卽實の生活と宗教」（『有島武郎全集』第九巻（筑摩書房、一九八一年四月）
＊「ホイットマンに就いて」、『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年一〇月）
＊「有島安子」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇一〇年一二月）
＊北原照代「ユニテリアン受容を背景とした有島の信仰実態の検証」（『有島武郎研究』第二十三号、二〇二〇年五月）
＊小玉晃一「有島武郎・アメリカ時代管見」（有島武郎研究叢書『有島武郎とキリスト教』第七集、右文書院、一九九五年八月）
＊上杉省和「有島武郎と札幌独立基督教」（有島武郎研究叢書『有島武郎とキリスト教』第七集、右文書院、一九九五年八月）
＊橋本雅子「ホイットマン・キリスト教・有島武郎」（『ホイットマン研究論叢 27、

二〇一一年九月）
＊西垣勤「過去をどうみつめるか―「『リビングストン伝』第四版の序」をめぐって―」（『有島武郎論』、有精堂、一九七八年六月）
＊石丸晶子「有島武郎におけるニーチェ―離教そして「本能的生活」構築の支柱として―」（『有島武郎研究』第四号、二〇〇一年三月）
＊菊地弘「文芸観」（『有島武郎事典』、有島武郎研究会編、勉誠出版社、二〇一〇年一二月）
＊瀬沼茂樹「結婚前後の有島武郎―教授時代のうち」（『有島武郎研究』、瀬沼茂樹・本多秋五編、右文書院、一九七二年一一月）
＊「生活と文學」（『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年十月）
＊石丸晶子「有島武郎の文学世界とキリスト教」（『キリスト教研究』第三七号、二〇二〇年四月）
＊宮野光男「『或る女』論（一）―田鶴子と〈Ego〉―」（『有島の文学』、桜楓社、一九七四年六月）
＊本多秋五「有島武郎論」（『「白樺」派の文学』、新潮社、一九六〇年九月）
＊正宗白鳥「有島武郎」（『作家論（二）』創元社、昭和十七年一月十二日）